
INFINITE WITCHES　－無限の蒼穹を駆ける白き龍－

シュウ禅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

INFINITE WITCHES – 無限の蒼穹を駆ける白き

龍

【Zコード】

N4483X

【あらすじ】

白騎士事件・・・その日を境に俺たちの世界は一変した。理不尽で歪んだ世界へと・・・
その5年後、歪んだ世界を破壊するかのように突如世界は異形の者たちに襲われた。

その者達の名はネウロイ・・・

この物語は一人の少年と空を駆ける少女達の物語

護りたいから俺は飛ぶ！！

この小説はストライクウェイツチーズとインフィニットストラトラストのクロスモノでオリジナル主人公が出ます。若干のアンチ要素が含まれます。作者はこれが処女作です。それでもいいという方は是非お読みください

Ep.01 扶桑の白き龍（前書き）

ストライクウェイツチーズとTSA インフィニット・ストラトスのクロスモノです。

作者はこの作品が初めてですので至らない点などござりますがそれでもよろしければお付き合いで下さい。

今日も太陽は世界を照らし続ける。

世界が例えどれほど凄惨な出来事が起きていても

平等に

無慈悲に

世界は今

滅亡の危機に瀕していた

「伏せろー！」

その声が届くのとほぼ同時、爆発音がその声をかき消すように響いた。

「くたばれ！－ネウロイ共！－！」

「アハト・アハト 8·8 cm砲射撃用意－ 撃てえ！－！」

その巨大な砲が火を噴く

次の瞬間田の前にいる黒い異形に砲弾がぶち込まれた。瞬間激しい閃光と轟音がその場にいる兵士達を襲う。

「やつたぞ！－！」

「敵反撃来ます！－！」

「司令部－Dフィールドにネウロイ6－ 繰り返す、Dフィールド
に－」

「地雷原、突破されました！！」

「くそ、予備陣地へ後退！！」

その指示に従い、後方へと下がる兵士達。

しかし

「走れ！走れ！！」

急げ！

急

逃げる兵士たちを空から赤き閃光が無慈悲に襲う

一九四〇年

「飛行壺！」

「くそ才」

「アホだなあ……」

一人の兵士が呟く・・・・・

その眼前には・・・

無数の黒き異形が人類をあざ笑つかのように立ち塞がっていた。

2039年・・・

その年を境に我々の世界は一変した

その変化を一言で表すとするとならば、

人類は互いに殺し合^{遊び}つことを楽しむ余裕を失った、ということだ—

ネウロイ——

突如出現した「異形の敵」

人類はこの黒き異形の者たちと種の存亡をかけた戦いを繰り広げる事になつたのである

人類が敵対している敵、ネウロイ。

彼らは『瘴氣』をまき散らし、大地を腐敗させる。

その強力な瘴気に人間は太刀打ちできず、死に追いやられる。

しかし、中には瘴気に打ち勝つ者たちがいた。

遙か昔より存在する魔力という力を持つ者

その者達は自らの魔力を機械によつて増幅し、普通では持つことのできない兵器を軽々と操り、自在に空を飛び回り、敵の攻撃を障壁で受け止める

人々は尊敬の念を込めて彼女たちをこう呼んだ魔女ウイッチと・・・・・

欧洲一帝政力ールスラント東部、ボズナニア

欧洲で最も激戦区であるこの地では日々、地獄のよつたな激しい戦闘が繰り広げられていた。

「C中隊！残弾確認！！」

「もうカンバン！！」

「再配分お願いします！！」

「・・・・チツ！！」

C中隊隊長セシリア・グリンダ・マイルズは軽く舌打ちをする。

彼女たちブリタニア王国陸軍第四戦車旅団C中隊の周りは木々は倒れ、いくつものクレーターができていた

彼女たちの目の前には巨大なネウロイの姿。

その黒き体から伸びた砲塔が彼女達に向けられる。

「・・・・！ 総員、障壁展開！！」

その瞬間、マイルズは部下に指示を飛ばす。

ネウロイの砲から赤い赤い光の奔流がC中隊を襲う

辺りに衝撃が走った

砂塵が舞い、彼女たちを包む。

「被害報告ーー！」

「全員、生きてますーー！」

「よし！全軍、総攻撃！！、敵正面に全弾叩き込めーー！」

次々と巨大ネウロイに無数の砲弾が叩き込まれる。

「マイルズ大尉ー 徹甲弾残量僅少ーー！」

「構うな、叩き込めーー！」

なおも倒れぬネウロイ

「いい加減墜ちてえええええつーーーー！」

そしてついに

K Y R A A a a a a a a

甲高い、ネウロイの叫びがあたりに響くとネウロイはその口体を光の破片に変えた。

「敵ネウロイ、破壊確認・・・・・」

「ブリタニア王国陸軍第四戦車旅団C中隊よりHQ・・・敵大型ネウロイを撃墜、Dフィールド制圧完了しました。」

『こちらHQ、これより代替部隊を送る。部隊到着後、補給に戻れ。それまで現状を維持されたし』

「了解、交信を終了します。」

「・・・・・ふう」

ほっと息をつくマイルズ。

「大尉、司令部はなんと」

そばに控えていた彼女の副官が声をかける

「代替部隊の到着後、補給。それまで現状を維持せよ、だそうよ」

「そうですか、これで少しは休めますね」

「ええ・・・中隊円周防衛隊形！各員周辺を警戒せよ！・・・みんな悪いけどもう少し頑張つて！！」

「・・・了解！！」

指示に従い、円周状に固まる中隊の隊員たち。

しかし、その動きにいつもの精彩さはなかつた。

平時であれば、マイルズは緩慢な動きをした部下を怒鳴り散らすところであるが彼女はその気にはなれなかつた。

（・・・みんな相当疲れてる、無理もないわね。）

黒海付近に大規模怪異が発生し、歐州に侵攻を開始したのは今から八か月前の2039年4月のことである。

平和に酔っていたオストマルクを瞬く間に占領し、大国カールスラ

ントに電撃的侵攻を開始したのである。

欧洲各国をはじめ、世界は震撼した。

現在、カールスラント・オストマルク国境では絶望的な防衛線が繰り広げられている。

ネウロイの侵攻は激しく、このままではカールスラントも席捲されてしまうのは時間の問題と思われていた。

世界各国から援軍が送られてはいるが、強大なネウロイを食い止めるには至っていない。

彼女たち、ブリタニア王国陸軍第四戦車旅団C中隊もその送り込まれた援軍の一つであった。

(派遣されてからというもの、あちこちに狩りだされてろくに休みを取ることもできなかつたわね)

彼女たちはネウロイのカールスラント侵攻初期から参戦し、今現在もこうして前線に立ちつづけ、歐州防衛の一端を担っている。

それ故に連戦に次ぐ連戦により部隊の疲労も蓄積されていた。

(けどこの作戦さえ終われば後方で久しぶりに休暇がもらえる。 . .
・・・お休みもらつたら何しようかしら?)

彼女たちが周辺を制圧したことでほぼ八割がた今回の侵攻作戦は成功したといえる。

他の戦域も時期に制圧されるだろう。

この作戦の成功の暁にはカールスラントの首都、ベルリンで役3か月ぶりの休暇を取れることとなつていて。

隊のみんなでベルリンを観光するのもいいかもしれない・・・

そんなふうにこのあと休暇のことを考えていると

「ま、マイルズ大尉！ つ、上を見てください！！」

部下の一人から突然悲鳴のような声で報告が入る

「どうした！？」

上を見上げてみると・・・・

「そんな・・・・」

空にひときわ巨大な存在が彼女達の前に現れる

巨大な白鯨を思わせるシルエットの巨大なネウロイが小さな僕をつ
れそこに君臨していた

最近現れるようになった敵の新型だ

突如として現れた強敵に隊員たちの顔が絶望に染まる
彼女たちは装甲歩兵だ。陸上の敵は何とかできても空にいる敵はどうにもできない。

『ディオニアがその身についている機銃を彼女たちに向ける。

もう駄目だ・・・・・・

そう思ったとき、

どこからか砲弾が飛来し、ディオニアに直撃する。

『いや代替部隊だ、遅くなつて済まない』

無線機から代替部隊の隊長と思わしきの太い男性の声が聞こえる

「あ、ありがとうございます！」

『これより敵の注意をひきつける……君たちはその間に撤退を……』

「で、でもそれじゃあ……」

魔女ウイッチでもない者が敵の攻撃を食らえば一溜まりもない。

彼らは文字道理死ににいくようなものだ

『君たちは我々の希望なんだ！－こんなところで命を無駄にするな
魔女』

そう叫ぶ代替部隊の隊長

「・・・・すぐ戻ってきます、だから絶対に死なないでください！－」

マイルズはそう答えるのが精いっぱいだった

『気にあるな、いい女を待つのは男の甲斐性だ。され、行けえ！－』

「はー！－全軍後退！－」

そう叫び後退しようとするマイルズ

しかし・・・・・

ディオミニアから一條の閃光が走り、代替部隊を襲った。

その攻撃で代替部隊の戦車のほぼ半数が壊滅。

「や、そんな－！」

さらに「マイルズたちを逃すまいと無慈悲にその砲塔を彼女たちに向
け、放つ。

「くう、・・・・・」

何とか障壁で防ぐが押されるマイルズ。

「もう、駄目・・・・・」

今度こそ終わりだ・・・・そう思つた瞬間

一条の雷光がネウロイを貫く

瞬間、激しい轟音と共にネウロイは光の欠片となつて消えた。

「・・・え？」

一体何が起きたのだろうか。

あまりに唐突な出来事に呆然としていると突如インカムに若い男の声が入つてくる。

「大丈夫か、そこの陸戦ウイッヂ！！」

声のする方を見上げると、そこには一人の少年がこちらに降りてきた。

年齢は15・6といったところか、背は170cm半ば、扶桑人特有の艶やかな黒髪がところどころはねており、髪だけを見れば年相応かそれよりも下に見える。しかしそれなりに容姿が整っているのに加え、強い意志が宿る蒼く澄んだ瞳が大人びた雰囲気を出していた

「こちら、義勇統合戦闘飛行隊隊長、緋村優刀大尉だ！そつちの指揮官は誰だ？」

「は、はい！－ブリタニア王国陸軍第四戦車旅団C中隊セシリア・グリンダ・マイルズ大尉です。助けていただきありがとうございます」

「いや、こちらこそ遅れてしまない。今全線域がしつちやかめつちやかでデカブツを発見するのが遅れた。マイルズ大尉は今のうちに戦車部隊の怪我人の救出、手当てを頼む」

そういうて優刀は肩にかけていたリュックサックを下ろす。

「メディカルキットまで……いつたいどこから？」

「何、近場に補給所があつたからな、来るついでにもしかしたら、

と思つてもつて來たんだ。あと・・・・・マルセイゴー・・・

そう上空に向かつて叫ぶと上空を警戒していたウイッシュが一人おりてきた。

その手には武装コンテナがぶら下がっていた。

「あと弾薬もつこでにおいでいく

「いたりつくせりね。」

『優刀！…』

突然無線に少女の声が響く。

「武子、どうした？」

『三時方向から敵第三波！…すぐ戻つてきて…』

「了解、今戻る…」

「新手？」

「ああ、あとは俺たちが相手する。航空型だけみたいだからな、今
のうちに怪我人をつれて後方へ下がってくれ」

「後武運を！」

優刀は敬礼をして空へと去つていく

「あの噂は本当だったのね。」

「はい。最初はびっくりしましたけど、男のウイツチ、—WaiB Drache《白き龍》は実在したんですね。」

魔法を使えるのは圧倒的に女子が多い、

しかし、極稀に魔法力を生まれながらに持つ男子が現れる

今日の前に現れた少年もその一人である。

しかし、彼が有名なのは魔法が使える男子だからではない。

「オストマルク撤退戦において、迫りくるネウロイの軍勢を抑え込んだ扶桑の英雄・・・・」

オストマルクの都市、クラカウより民衆がカールスラントに避難する折、ネウロイが大規模侵攻をしてきたことがあった。あわやカールスラントにまで侵攻されるところまできた。その時、部隊を率いて難民防衛に当たったのが緋村優刀率いる扶桑国軍遣欧艦隊義勇飛行中隊であった。

その時に多くの難民を救つたこと功績からカールスラントの人々から畏怖と尊敬の念を込めてこう呼ばれるようになった

—WaiB Drache《白き龍》と・・・・

「下原、敵の数は？」

「はい、距離—100000、高度—5000、数は小型種12、中

型種3です。」

下原定子少尉の報告が入る。

「なんだ、いつもの雑魚どもか。」

下原の報告を聞いたドリード・カ・S・ジョンスタイルがめんどくせそうにしつぶやく

「ちょっと大将、不謹慎よ。」

その不謹慎な発言にエディータ・ロスマンが頭を抱えながら苦言を呈す。

「まあエディータ、大将の言つとももつともだ。ここ最近は特に張り合ひがないのが多くてつまらん。」

「ラルまで……」

「ところで優刀、彼女たちはどうだった？」

いつの間にか横についていたヴァルトルートクルプンスキーが意地の悪い笑みを浮かべて聞いてきた

「ああ、伯爵の予想通り、可愛い子ぞろいだったよ。」

「それはよかつた！ 優刀あとで一緒に彼女たち食事に誘いに行こうよー！」

「…………伯爵、お願ひだからやめて

クルプンスキーの彼女らしいいつもの調子この部隊の副隊長、加藤武子が頭を抱える

「さてと、おしゃべりは終わりだ・・・・・・加藤隊はロスマントークと共に小型機の牽制を、残りのモノは俺と共に中型をつぶすぞ！・・・化け物どもに我々の恐ろしさを思い知らせてやれ！！」

「「「了解！..」」

年若い少女たちの凛とした声が蒼き戦場に響き渡る。

優刀の合図とともに少女たちはいっせいに行動を開始する。

「[定子ちゃんついてきてー、ヒーリータ、フォローミリシベー..]

「「了解！」」

真っ先に行動を開始したのは加藤。

僚機である下原に声をかけ敵にめがけて一気に急降下する。

加藤と下原は持っていた機銃を小型の一群に掃射する。

敵は突如頭上から降り注いできた銃弾になす術もなくその身を撃ち抜かれる

エディーターとその僚機であるヒーリカ・ハルトマンがタイミングを見計らい、続いて降下する

加藤と下原を追いかけていた敵が更に上空からくる一人に気づくが時すでに遅く、反撃しようと試みるもそれよりも早くエディータとハルトマンが銃弾を叩き込む。

予期せぬ第一波に敵は対処するまもなく次々落ちていく。

当初確認された敵はその数を12から8に落とした。

加藤たちが小型をひきつけてできた隙間を6つの影が一気に駆け抜ける。

駆け抜けた後には数はさらに減り、5

「ジョンタイル隊は右の、ラル隊は左を頼む！」

「了解」

「ああ、任せろ」

6つの影が一気に加速する。

接近に気付いた敵が表面につく機銃を掃射するが6つの影は華麗にすり抜ける。

ジョンスタイルの後ろについていたフェデリカ・N・ドッリオが前に躍り出てその身に持つ大型の機関砲を構え、中型に襲い掛かる。

その強力な火力に敵は抗うこともできず、その身を削られる。

すると、ひときわ深く削られた場所から突如赤い宝石のような物体が姿を現す。

「大将、お願ひ！！」

「任せろ」

ジョンスタイルはさらに加速、

その赤い宝石めがけて矢のよう^に飛んでいき、肉薄、

「墮ちる」

赤い宝石にそのまま拳を勢いよく叩き込む。

拳を叩き込まれた赤い宝石はなすすべなく砕け散る

次の瞬間、

砕け散った宝石に呼応するかのように中型に亀裂が入り、その身を

無数の光る破片に変えた。

「やれやれ、大将も豪快だね。まさか拳でコアを潰しちゃうなんて
や。

「奴らしいといえば奴らしいけどな。クルプンスキー、そろそろ仕
上げるぞ」

「OK、ラル」

そういつて二人は中型にどごめを刺すべく向かっていへ。

相対するは彼女たちのゆつてん〇倍はあるつかという巨大な怪物。

しかしその身は傷だらけであり、今にも崩れ落ちそ�である。

G Y A a a a a A A A A A A a

声にならない咆哮を上げ、

向かってくる彼女たちを落とすと、機銃を放つが一人は華麗な機
動ですべてを躊躇し、銃弾を放つ。

そしてついに、

「これで、終わり！」

クルップンスキーが装甲を削り、ついに中型のコアを露出させる。

その隙を逃さずラルがコアを貫く。

「ふ、他愛ないな」

そつこつて髪を書き上げるラル。

次の瞬間、

背後で敵が崩れ落ちる体を光の破片に変えた。

G Y a o o o o o o o ! ! !

残る一体になつた敵は仲間の敵を取つとその攻撃を更に強める。

その銃弾の嵐の間を華麗にすり抜けて敵の身を削る影があった。

「やじだ、食らえーー！」

その間をすり抜け機銃を次々と潰していく少女、ハンナ・コステイナ・マルセイゴ。

しかし彼女は先のラルやドッリオのようにならぬ装甲を纏ひよつたことはしない。

かのじょは機銃だけを狙い破壊している。

そのはるか上空から敵に向かい突撃していく一つの影。

優刀だ

その少年が手に持つのは銃ではなく、一振りの刀。

その姿に気付いたのか、敵は男に向かつて機銃を掃射する。

しかし、少年はそのすべてを見切り最小の動きで躲す。

刀を上段に構え勢いを殺さず、敵に降下

「もうつたああああ……」

そのまま敵を一刀のもとに両断。

一つに分かれた敵は音を立て、その身を光り輝く破片に変えた。

「ネウロイ、全滅を確認！！」

マイルズは副官から歓喜の報告を聞く。

マイルズはその報告を聞き微笑み一言つぶやく

「—Wa·i·B Drachē《白き龍》が私たちを助けてくれたの
ね・・・」

「義勇統合戦闘飛行隊、任務完了。これより帰還する！」
R·T·B

それは、何の前触れもなく人類の前に現れた。

2039年

それを我々はネウロイと名付けた。

ネウロイがどこから、何のために来たのか誰にも分からなかつたが、彼らによつて人々は故郷を、国を追われたのは確かだつた。

しかし、彼らに对抗する者たちが現れた。

人々は彼女たちをこう呼んだ

魔女と・・・・・
ウイツチ

これはウイツチ達と共に空を駆ける一人の少年の物語
・・・・・

EP - 01 扶桑の白き龍（後書き）

どうも初めまして、ショウ禅です。

以前からやりたかったストライクウェイツチーズ（以下SW）とインフィニット・ストラトス（以下IS）のクロスものがやつとできました。

すいません・・・とか言いながらのEP - 01

ISのイの字も出でてきません

ISファンの皆様ごめんなさい。

今回はプロローグなのでオリ主やその周りのウイッチといつ存在の説明を優先した結果ISを入れる余地がありませんでした。

たぶん、篝やら、セシリア、IS学園の子達の登場はもう少し先になります。

4、5話はたぶん優刀達、義勇統合戦闘飛行隊の周りの世界観と情勢の説明の回になると思います。

あ・・・でも、あの子はみんなに先行して出るかな？

さて、今回出てきたウイッチですがはつきり言います。

ほとんどのメには出でていません

アニメに出てきていたのは今回名前だけでてきたハルトマンだけです。（あとマルセイユも一話だけでてます）

「マルセイユやマイルズは原作者のフミカネ氏の同人誌、「アフリカの魔女」シリーズのキャラです。

他のキャラは島田フミカネ氏のサイトに掲載されているWord Picturesのキャラです。彼女たちがどんなキャラかはそちらのほうを見てください。

あと何人かはちゃんとメイトニアに出ています。

この作品のモジトーは

ウイッチ達を可愛く、かつじょく書く

IUSとIUSではあまり待遇の良くない男たちにも活躍の場を

といつ感じです。

さて、このあとがきも書き終わりのテンションそのままに書いてしまったのでなんだか長くなってしまいました。

優刀がこの先どのような物語を彼女たちと繰り広げるのか、彼女達のかわいい姿をお届けできるよう頑張りたいと思います。

以上、シユウ禅でした。

いつも、ショウ禅です。

遅くなりました

と、いうわけで第一話です。

それではどうぞ！

俺の名前は緋村優刀。

扶桑国空軍大尉

このカールスラントで義勇統合戦闘飛行隊を率いている世にも珍しい男のウイッチだ。

義勇統合戦闘飛行隊は各国のウイッチを集めて結成された航空ウイツチ部隊だ。

各国の精鋭を集めた部隊とは謳われているが、正確に言えば各国から派遣されたウイッチの寄せ集め部隊というのが本当の所だ。

そんな女子だけの部隊に男が一人。

他の男連中から見ればおいしいシチュエーションのように見えるのであるうが

正直言つて彼女たちをまとめ、指揮するのは大変な仕事である事この上ない。

もちろん、彼女たちというのは楽しいし、かけがえのない仲間だとも思っている。

俺には俺なりの苦労がある、ということだ。

「うへん」

午前11時30分

書類を見ながら俺は一人うなり声をあげていた。

「変な唸り声をあげて一体どうした優刀」

そういうて声をかけてきたのはグンドュラ・ラル

カールスラント空軍所属のウイッチで、優秀な航空魔女が所属する
JG52の中でも指折りの腕利きだ。

うちの隊の中でも視越し射撃の腕は一、二を争い、年若い隊員からは頼れる姉のように慕われている

「最近ネウロイの装甲が固くなってきたらしく、なにか使える武装はないかなと思つても」

「なるほどな・・・確かに固かつたな、あいつは」

「最近のネウロイは急激にその性能を伸ばし始めた」

今までは小銃でも十分に貫けた装甲が防弾装甲に変化していたり、
再生機能を持つていてる中型も多くなってきた。

それで何か使えそうな武器があるなら物資の補給の発注と一緒に頼んでみよ」と思つてカタログを見ていたといつわけだ

「いまは何とかなつてゐるが、防弾装甲持ちの小型が出てきたら今までまじや手に負えなくなる」

その言葉にラルもうなづく

「だが一番厄介なのは、あの兵器だろ?」

「ああ、」

そうである。

ネウロイが進化したことで得た厄介な力。

光学兵器ビームである

やつらはいまだ人類でも実用できていないビームを使つよになつた。

古くからSFの世界で使われている強力な兵器が現実になつて我々を襲つてきた

正直言つてこれが怖い。

記録ではビルをまるまる消滅させたとか。

破壊ではない、消滅。

この世界から存在が消えてなくなつたのだ。

「今はまだ防げる程度だからいいが、そのうち防げなくなるや。」

「今でさえ防ぐと魔法力をじりそり持つてかれるもんな

今は何とか障壁で防げるからいいがそれもいつまでできるか……

この世界から跡形もなく消えるとか勘弁願いたい。

「どうにかならんもんかね~」

そんなふうに一人で頭を悩ませてると……

グ~~~~~

何やら奇妙な音が鳴つた

「・・・今のつて」

そう言つてラルの方を見ると

「違う。 私じゃないぞ」

即、否定するラル

その顔はほんのり赤かつた

「じゃあ、いつたい誰が・・・あ」

ある部屋の一点を見る

そこはこのオフィスに置かれている応接用のソファーの所であった。ただし応接用とはいっても、今まで本来の目的で使われたことはない。ちゃんとした応接室はほかに用意されている。

大体は隊員が寛いだりするのに使つてゐる以外は今のところ使われていない。

いつもは武子や下原などあたりが氣を遣い掃除をこまめに行つておりそこそこ綺麗なのがだが

今日はその真逆

ビールやらワインやらの空き瓶が大量に置いてあった。

昨日、部隊の年長組で飲んでいてそのまま片付けず就寝。

朝片付けよつとも思ったのだが、急いで先日の作戦の報告書を作らねばならなかつたのでそのまま放置しつぱなしだつたのだ

その「」置き場の中心から何かがムクリと起き上がる

「んん～～～、朝か・・・」

「おはようさん大将」

起き上がつてきた相手、ドミニカ・S・ジョンタイルに挨拶する。

彼女の名前はドミニカ・S・ジョンタイル

リベリオン合衆国の精銳部隊第八航空軍に所属するウイッシュだ。

氣急げな振る舞いが目立つが、その実は即断実行、意氣と情熱の熱

血魔女

その思い切りの良さや面倒見の良さからついたあだ名が「大将」

「ああ、おはよう・・・・といひでボス、今何時だ?」

「今11：45だ」

「・・・・もうそんなんになるのか。ほかの奴らは?」

「Hティーラは新人三人の訓練、武子は非番、伯爵は・・・・ビニ行つたんだ?」

「さあな。あいつも今日は非番だからな、どつかそこらぐんで女子をナンパいるんだね?」

「だらうな

「まあ、伯爵は置いといて・・・ボス、なんか食べるものないか?」

「冷蔵庫に何かしら入つてゐるだら? 適当に自分で作れ」

「・・・・了解」

そういうつて隣接される給湯室に入つていく。まあ、給湯室といつても窓際に仕切りを敷いて冷蔵庫とガスコンロをつけただけの簡易的なものだが。基地の給湯室は遠いので仕方がなく簡易的に作つた。

そもそも義勇統合戦闘飛行隊が使つてゐるJのオフィス、元々はミーティングルームだつたので少々広い。

スペースが余つてゐるのだけよじよかつたのだ。

「じゃあ、私はコーヒーでも入れてくるか」

ラルも席を立ち、給湯室に向かつ。

給湯室にはきちんとしたコーヒー＝ミルがおこしてある。

「コーヒーにこだわりのある武子とラルがわざわざブリタニア製の手動式ミルを取り寄せた。

しかも二つ。

ラル、武子がそれぞれ買い求めたらしい。

一つでいいじゃんと思つたのだが、ミルによつてはだいぶ味が変わる、
とのこと

まあ実際、一人の淹れたコーヒーはインスタントよつ格段においし
いので文句はないのだが

しばらくあるとミル一カは料理を乗つけて戻つてきた。

リベリオングループの国呑食、ホットドッグである。

「優刀」

「サンキュー」

ラルからコーヒーを受け取り一口

「つまいな

「やうか

満足そうに微笑むラル

「ところで一人は何の話をしていたんだ?」

自分の席でホットドッグを食べながらドリミーは先ほどの話を聞いてきた

「最近、敵が頑丈になってきたらうへ。」

「それで何かいい武器はないかって話をしてたんだ」

「なるほどな・・・・・」

「リベリオンでなんか使えそうな武器つてないか?」

「やうだな・・・・・」

あまり興味なやうに返すドリミー。

この態度だけを見ればあまり人の話を聞いていないよつことられるかもしだれないが、

そんなことはない。彼女はちゃんと聞いている。

氣だるげなのが彼女が一番リラックスできる状態なのだろう。

彼女はきちんと仕事をしているので問題はない。

「どうだったかな、あまり覚えがない。機関砲じゃダメだろ?」

「ああ、どちらかとこうと取り回しのいい機関銃の方がいいかな」

「じゃあ、ないな。今のはどれも一緒だ」

「やうか

「こいつの」と、ショットガンでも使うか。リベリオンにいいのがある

「でもそれだと装填数が少なくて長時間戦えないぞ?」

「無駄弾を撃たなきやいい。至近距離で当てれば問題はない」

「確かにそうだがハイリスクだな」

「やつぱり、機関銃が航空歩兵が持つには一番にいいとか・・・

」

「やつなるが、しばらくは戦い方を工夫して、戦っていくしかないな」

事実いつもやって自分の意見をきちんと出してくれる。

三人であーでもない、イーでもないと次々に案を出してくると

「失礼します、緋村大尉はいらっしゃいますか？」

「ああ下原か、どうかしたのか」

外で訓練をしていた下原定子が執務室に顔を出した。

この時間であれば、いつもなら訓練が終わり次第そのまま食堂に移動しているのに、何か用だろうか。

「はい、整備小隊の土田曹長が時間があればご足労願いたいと。」

どうやら伝言を頼まれたようだ。

「さつさと来いつてことか。」

「・・・おやつさん」

土田曹長

統合戦闘飛行隊のストライカーユニットの整備を担当する整備小隊の長。

基本的に整備中隊の切り盛りする最上級下士官というのは現場の叩き上げで登り詰めた人物が多い。

そんな百戦錬磨の人物に俺みたいなひよっこ大尉が逆らえるわけがない

事実上の出頭命令である

「あ・・・言つてくるか

「やうだな

そつこつテラルと執務室を出ようとすると

「私も行こう

デリカも席を立ちともに行動しようとしていった

「いいのか？ 今日非番だろ？」

「特にやつたことも決まってないからな、暇つぶしだまつうび
いい」

「やうか、じゃあ下原留守番頼めるか？」

「はー、任せてくれー」

「じゃあ、言つてくる。」

下原に見送られ、三人は執務室を出て行った

「「足労いただきありがとうございます」

オフィスを出て格納庫に赴くと格納庫の前で土田曹長が直立不動で待ち構えていた

「あ～、堅苦しいのは抜きでお願いします」

正直言つて土田曹長に敬語で話されるのはきつい。

何せ扶桑海事変から自分のコードを見てもらつていいのだ。そんな人物に敬語で話されるのは背中がかゆくなつてしまふがいい。

「いえ、部下の手前もありますから。」

即答である

確かに曹長より階級が上の大尉がペコペコ頭を下げていたんじゃ様にならない。部隊の士氣にもかかわる

「……わかつた、それで用件つてのはもしかして頼んでいた件か？」

「はい、とりあえずいろいろとつちの者たちで試してみたんですが・・・」

そういうて格納庫の奥へと案内される

案内された先には巨大なモノが鎮座されていた

IISだ

正式名称『インフィニット・ストラトス』

宇宙空間での活動を想定されて作られたマルチフォーム・スーツである。しかし当初の目的である宇宙進出は一向に進まず、様々な疑惑から兵器へと変わり、さらに『スポーツ』へと落ち着いた―――― 所謂、飛行パワードスーツだ。

しかし、『スポーツ』へと収まつたはずのIISだが、その既存の兵器を凌駕するスペックを持て余しすぎて、スポーツという枠にすら収まらず、軍事力の要となってしまつている。

そんなスポーツ用品なのか兵器なのかもいまいち定義が定まらないモノがなぜこの格納庫の片隅においてあるのか？

答えは簡単。

うちの部隊にIISを使える人物がいるからだ。

「ドッリオ中尉！大尉が来ましたよ――」

曹長が叫ぶとIISの後ろから一人の少女が顔を出す。

「Ciao、優刀。報告書は片付いたの？」

そういうて陽気な笑みを向ける彼女の名前はフューテリカ・エ・ドッ
リオ

ロマーニヤ公国出身のウェーチでエリのロマーニヤ公国代表候補と
いつ風変わりな経歴の持ち主である。

国家代表とはエリの世界最強を決める世界大会『モンド・グロッシ
ガ』年に一度行われる。その大会に出場する選手のことである。

要するに代表候補と言つのは国家代表のエリ操縦者のその候補とし
て選出される人達の事である。簡単に言つとヒーローだ。

「フューテリカ、どうだ量子変換システムの方は？」

「うーん、とりあえずサンプリングは終わったんだけどね。はい、
これがそのデータ」

目の前にディスプレイが表示される。

「うーん…へえ、思つていたよりも展開のエネルギー消費が少ない
な」

出されたデータの内訳に驚く

「ええ、しかもこれマガジンありよ。」

「すじいな、展開に一秒しかからないなんて驚きだ」

予想どおりといえれば予想どおりの結果に驚く五人。

頼んだ件というのはストライカーゴーラーの量子変換システムを搭載できないかということだった。

三人が見ていたのはI-Sの機能の一つ、量子変換システムの稼働サンプリングデータであった。

試しにカールスラント航空ウイッチの正式装備であるMG-42を量子変換して展開させてみたのだが、予想以上の良い結果に思わずほおが緩む。

量子変換システムを使うことができれば戦闘に携行できる武装も多くの出来ようになる。そしたら継戦能力もずっと長くなつて多様な作戦行動もとれるようになる。

正直言つて航空ウイッチは積載限界が低く、携行できる武装が少ない。最初から装備していた分のマガジンを打ち尽くせばあとはせいぜい予備のマガジンを一つ持てるかどうかだ。

それでは装甲の厚い大型のネウロイが多数出現している欧洲の戦いはこれからどんどん苦戦を強いられるのは目に見えている。

フェデリカが使用しているMG-151のような大型の兵装は強力ではあるが取り回しに難がある。

「量子変換システムに登録できる兵装はこの分だと4つぐらいか?」

今までだとせいぜい一丁か二丁だけである

そういうふた事情から今回のテストの結果は上々ともいえる。

「ストライカーコニットに搭載できるか？」

「大丈夫だと思うけど、魔力配分をいじらなきゃいけないから今乗つけてるエンジンのままじゃ余力がなくてスペックダウンは免れないわね」

「出力不足か……」

確かに、搭載することができることはあるようだがこれでは他の性能が下げるなくてはいけない。

持てる兵装が多くなることは重要だが、だからと言つてほかの性能を削るという行為はあまりしたくない

「使えると思つたんだけどね」

「そういうえばフューテリカは実戦で使わないな、どうしてだ？」

ふと、ドミニカはフューテリカがE.Sを使わない理由が気になつたのかフューテリカに尋ねた。

「ああ、それはね……」

「ブウー——ブウー——

突如、格納庫に外から耳を切り裂くようなけたたましいサイレンが鳴り響く。

「敵襲！？」

「まさか、おととい作戦があつたばかりだぞー!?」

「大尉、司令部から連絡がーーー！」

下原が電話を持つて駆け込んできた。

「はい、緋村」

「ボーンだ」

電話の相手はJG52の飛行隊指令フーベルタ・フォン・ボーン少佐からだつた。

「いつたいどうしたんですか？」

「ああ、先ほど全魔女支援要請が入つた」
プローケンニアロー

全魔女支援要請が出るなんて多々事じやない。

「こつたいたいどこから」

「カールスラント・オラーシャ国境沿いを航行する輸送機からだ。どうやら避難民をカールスラントに護送している最中に襲われたらしい。」

「リバウの航空隊が護衛にあたつているんじゃないんですか？」

「どうやら違ひらじこー」

オラーシャからカールスラントへの護送任務であるなら航続距離の長い零式艦上戦闘機を装備している扶桑遣欧艦隊所属のリバウ航空隊が当たっていると思つたんだが・・・

どうやら別の部隊が当たっているらしい。

「今はうちの第一中隊も第三中隊も出払つていて出せる部隊がお前の部隊だけだ。・・・いつてくれるか？」

「了解です、ただちに出撃します」

「今、クルピングスキーに指令書を持たせた。詳細は奴に聞け」

「伯爵が・・?」

意外な名前が出てきたのでふと引っかかる

たしか伯爵は今日は非番だったはず。・・・まさか

「少佐・・・・まさか」

「・・・ちょうど奴好みのいい酒が手に入つたんでな、安心しろ、まだ開けていない。奴は素面だよ。後でお前も飲みに来い」

どうやら昼間から飲み比べをしようとしていたらしい。

ヴァルトルート・クルピングスキー

無類の酒好き女好きの享楽主義者で樂天家。

すらりとした長身と優雅な身のこなしからついたあだ名が「伯爵」勇猛果敢、敢闘精神に溢れるあまり必要以上にネウロイに接近しぐニットを壊す部隊内のクラッシャー。

飄々とした性格で怒られたって気にしない。大概のことは笑つて流す。

朝から姿が見えないと思つていたら指令室にいたのか。

「・・・本当でしょうか？」

指令に念を押して確認する。

「当たり前だ。酔っ払いを飛ばせられるか

「わかりました。信じましょう」

「では頼む」

電話が切れると同時に、伯爵が駆け込んできた。

「優刀、出撃だよ！ 指令から連絡は？」

「今聞いた！」

「はいこれ、指令書。」

そういうつて指令書を渡していくる

目的地はここからずいぶん離れている。増槽をつけていくか

「曹長！」

「了解です、てめえらーーー出撃準備だツーーー回せツーーー」

卷之二十一

土田曹長が声を挙げ、部下の整備兵に指示を出す。

次々に滑走路にストライカーゴニットの発進台が並べられる。

一
優
力
！
」

滑走路に出ると武子が真っ先についていた

その後ろにエディータ、ハルトマン、マルセイゴがこすりながら向かって走っているのが見える。

「こつたにどつしたのー?」

「緊急発進だ！！敵が避難民の乗った輸送機を襲っている。これが
スクランブル ネウロイ
らオーラー・シャ方面に向かう。」

「オラーシャの？　こつちよりもリバウ航空隊の方が近いような気がするけど・・・」

「考えるのは後だ先生！大尉、速く出撃しよつーー！」

「ああーーー！」

マルセイゴが自分のユニットに飛び乗りエンジンに火を入れる。他の隊員も出力を上昇させる。

自分もユニット『零戦』に飛び乗り銃を手に取る

「義勇統合戦闘飛行隊、出るぞつーーーー！」

Ep - 02 義勇統合戦闘飛行隊（後書き）

いつも、シユウ禅です。

何とか一週間以内に一話目投稿できました。

本当はもう少し前に投稿するつもりだったんですけど、今週なぜかいろいろ忙しくて週末の投稿になりました。

これからは何とか週一で投稿出来たらなあ、と思います。

次回は、ISの人たちが登場です。

それではまた。

Ep.03 HS - インヴァーチャ・ストラクター（前編）

二話目です。

一話と二話が長かったように感じたので今回少し短くなっています。

それと今回からやつとHの組が登場します。

それでせびりや！

「けど、護衛についているのはこいつたいやいの部隊なのかしら？」

目的地に向かつ途中、右横を飛んでいた扶桑国空軍、加藤武子が疑問を口にした。

「さあな・・・通常だつたらリバウ航空隊が当たると想ひつんだが」

扶桑国遣欧艦隊所属リバウ航空隊

リバウ航空隊が装備する零式艦上戦闘機は長距離航行に優れており、その為オラーシャからの護衛任務であるならばリバウ航空隊所属のウイツチが適任だ。

であるはずがそのリバウ航空隊ではなくほかの部隊が当たっている。ではオラーシャのウイツチ、または戦闘機部隊が当たっているのだろうか。

先ほど司令部からの新しい情報によるとそちらも違つようだ。

「まあ、行けばわかることだ」

「やつこり」と

左横のラルの意見に同意する

「あれこれ予想を立ててもしょうがない。」

百聞は一見にしかず

現場に行けばわかる」とある

「そこ」に助けを求める人がいるならば助けに行く。そしてその力を
よつ多くの人々の為に使つ、それが俺たち？ウイット？だ

その言葉にうなづく隊員たち。

例え何があろうとも人々を守るために戦う・・・それが俺たちウイ
ツチだ

「いやあ、オラーシャ連邦第583輸送機部隊！ 我、ネウロイの
攻撃を受けつつあり！！至急応援を求む！！繰り返す！！我ネウロ
イの攻撃を受けつつあり！！至急応援を求む！！」

オラーシャの乾いた空の下、三機の輸送機が黒き異形から逃げ惑つ
ていた。

「くそ！..来るぞ！..」

一条のビームが一機の輸送機を襲つ

「粉ぐそおおおおおお…」

ハンドルを思つたり右に逸らし 機体を右に向ける

その機体の船艇下部をビームがカスめる

「や・・・奇跡だ・・・」

『だ、大丈夫ですか！？』

通信から聞こえてきたのは女性の声。

「何とかな！それよりも早くネウロイを落としてくれ！…」
には避難民が乗っているんだ！！そんな急激な機動は何度もできない！」

『は、はい！』

それを最後に通信が切れた

「くそ…なんでこんなことになつちまつたんだ！！」

「いつもならリバウ航空隊のウィッチ達が護衛についてくれている
のになんで今日に限つて…！」

いつもであればリバウにいる航空ウィッチの部隊が護衛にあたつてくれるはずなのだが今回に限つて違う部隊が当たつていた。

彼女たちも何とか頑張ってくれているが、その動きは扶桑の精銳といわれるリバウ航空隊と比べると格段に見劣りする。

「へへ、」のままつせ・・・・・・・・

「機長……。」

「じりした……。」

「つ、通信です……。」

「べ、とにかくだ……。」

「ウイットかうぢです……。」

その言葉は喜びに満ちてこた

「なんだと…… ゆし・つなげ……。」

『ひりひりバウ航空隊、竹井少尉です…… そりてあと一〇分で着きます…… だからあともう少しだけ持たせてください……』

「――――お安い御用だフローライン――待つところが……。」

そう言って通信を切る機長

「ふ、ふふ・・・・・・」

「は・・・・・・」

「あと一〇分――あと一〇分で我々の戦友が来てくれる――それまでなんとしても生き残るが……。」

「はい！！」

絶望の色に染まっていた瞳には今や希望の光が宿っていた。

「はあああっ！…！」

掛け声とともに突き出された巨大なランスがネウロイに突き刺さる。

「ぐらいなさいつ！…！」

次の瞬間ランスに内蔵された四連ガトリングガンが火を噴き、ネウロイを内部から破壊した。

「これで三機！…！」

息をつく間もなくそのまま次の標的に向かって飛翔する水色の機体。

その水色の機体はいま欧洲で多くみられるウィッチの使用するストライカーコニットとは大きく違った

確かに人の形をしているが、手足は一回り大きく、全長は優に3メ

一トルはあらうかといつ大きさ。

そつーーーーH.Sである。

世界最強の兵器とされるH.Sが今、ネウロトイと交戦していた。

しかし・・・

「きやあ!!」

「いや、こないで!!」

そのH.Sで構成された部隊はいま、窮地に立たされていた。

「山田先生!!」

青い機体を装備していた少女、更識楯無はこの部隊を指揮する人物、山田真耶に声をかける。

「更識さんーどうかしましたか!!」

「IJのままでは全滅です!増援はまだ来ないんですか!!?」

「は、はい!今通信が入つてあと10分でリバウの航空ウィッシュが来てくれるそうです」

「そうですか・・・・」

増援が来るまであと10分

楯無のかおが曇る

「このままじゃあと一〇分も立たずには全滅する。

その時

二人の間に一條のビームが走る

「ぐつ……」

楯無はガトリングガンを、真耶はアサルトライフルをネウロイに向かって放つ。

二人の攻撃を受けたネウロイはその身をむなっしく光の粒子に変えた。

「先生、このままじゃ……」

「はい、わかっています……」

楯無が懸念していることは他の隊員達の事であった。

いや、

正確には彼女たちは軍人ではない

彼女たちはI.S操縦者を養成する機関、I.S学園に所属する学生である。

ではなぜ学生とされる彼女たちがこの戦場にいるのか。

その理由はE-1という機体にある。

E-1はそもそも、宇宙で活動するための装備として開発されたのがいつの間にやら世界最強の兵器として軍事力の要とされた。

今回の大規模怪異^{ネウロイ}発生に伴い欧洲の防衛の為に世界中E-1も世界中から派遣された。

彼女たちE-1学園の生徒もその部隊の内の一つであった。

楯無含め、派遣部隊に選ばれた生徒は皆、各国の代表候補性や、学園でも選りすぐった優秀な人材ばかりだ。

しかし、皆実戦の経験はない。率いている山田先生すら実戦は初めてなのだ。

そのような誰も実戦経験者のいない中での出撃。

敵は派遣以前に渡された資料によると小型のラロスという機種が15機。

機種としては旧式に分類されるのだが、その旧式にすら生徒たちは手こずっている有様であった。

このままではまずい・・・

楯無はそんな予感がしていた。

そして、その予感は不幸にも的中してしまつ。

「も、もひいやああああああああつ！…！」

「ちょ、ちょっと待ちなさい！…！」

突如、生徒の一人が錯乱し、戦闘空域から逃げようとした。

敵がその隙を逃すわけもなく

「・・・・・避けとえつ！…！」

ネウロイは容赦なく逃げようとした生徒の背中に機銃を放つ

「さやあああああつ！…！」

無残にも背中から撃たれ落下する生徒

「よくもつ！…！」

ガトリングガンをラロスを放ち撃ち落とす

「もういいや…・」

「あたしだめ死にたくない！」

「まずい！…！」

楯無がそう思った時、すでに遅かつた。

仲間の一人が落ちたことで最後まで保っていた緊張の糸がぶつかり

と切れてしまったのだ。

死ぬかもしれないといつ恐怖

その恐怖が眞に伝染する

皆戦いつとを放棄してしまった。

戦意を喪失したのを感じたのか、ネウロイは戦意を失つた生徒の横を通り過ぎ輸送機に攻撃を仕掛けよつとする

「みんな！しつかりしてください…」

真耶が攻撃しようとしたネウロイを撃墜し、彼女たちを立ち直らせようとするが一度恐怖に支配されてしまえばそこからすぐ立ち直るのは困難を極める。

楯無は戦えなくなつた仲間をそのままにして一人戦い続ける。

「先生！…生徒よりも輸送機を…！」

「けど、更識さん…」

「IDSには絶対防衛があります…たとえ落とされても命には危険はありません！それよりも輸送機を守らないと…！」

「そ、そんな・・更識さん」

楯無の無常ともいえる言葉に真耶は困惑の声を挙げる。

「先生！…しつかりしてください！…あの輸送機には罪のない民間人が乗ってるんですよ！…見殺しにするつもりですか！…」

「……！」

楯無の言葉でようやく我に返り自らのやるべきことを思い出す真耶。

「更識さん！…私たちで増援が来るまで敵の注意をひきつけます！…」

「はいっ！…」

「他のみなさんはまず自分の身の安全を考えてください…。まだ戦えるっていう人は私についてきてください…！」

そう言ってネウロイの集団に攻撃を仕掛ける麻耶たち

何人かが二人に触発され攻撃に加わる。

そうして麻耶たちはネウロイに攻撃を仕掛け足止めする。

しかしたかが数人では足止めするのには限界があり

「しまつた！抜かれた！…！」

一機が真耶達を抜いて輸送機へと向かつ。

「更識さん！…」

「はい！」

楯無がその後を追いかける。

「うおおおおーー！」

ネウロイに向けてガトリングガンを放つが当たらない。

そしてついにネウロイは輸送機をその射程にとらえた

「ダメええええつー！」

楯無が叫ぶがネウロイは止まらない

ネウロイが輸送機に向けて機銃を放とうとしたその時

ネウロイに向かつてはるか上空から銃弾が降り注ぐ。

思わずそこからの攻撃にネウロイは何もできずに光る欠片となり消滅した。

「え？・・・」

予想外の出来事にあっけにとられる楯無

あの距離で全弾命中なんて、私つてば最強ねー!」

「何とか間に合つたみたいね・・・」

声がしたかと思つと樋無の頭上を疾風のよひに駆け抜ける三つの影

「こちら扶桑国遣欧艦隊288航空隊、竹井醇子少尉です！－これより貴官らを援護します！！」

ついに登場しましたIS組！！

七二

しかもじょこはながら最強の生徒会長をすが、生徒会長!! 強い!!

… おはようございます

扱しか結構不遇になつてしまつた。
… … … … めん 榻無さん

いや、IS好きですよ？ ブルーティアーズとか、打ち鉄とか、ラ
ファールとか、かつこいい機体がたくさんありますから！

けど、扱いか不遇とか言つてゐるけどなんだかんだで楣無さん、ネウロイを旧型の小型とはいへ5機落としてますから普通にエースです。しかも初の実戦で。ちなみに現実でもSWの世界でも合計で5機以上落とすとエースって呼ばれるようになります。

そこで考え方などトイツのバイロットにしてね
柄叩き出しているのはほとんどがトイツのバイロットです。日本にも一人三柄を超すトップヒーラーがいます。

・・・あまり素直に喜べることではないんでしょうか。

話がそれました。

今回の第3話、EVAファンの皆様からもしかしたらお叱りを受け
るかもしれません。

この作品の「E.S.」、最強って言つてますが、無双のよつたな活躍はしません。機体のレベルを下げるとかそういうつもりは作者の中にはありません。機体は間違いなく時代最高峰の性能を持っています。優刀が作中で言つていたように使える機能が満載です。

それでも今回、生徒が落とされたのは単純に使い手の問題です。

一応、彼女も設定では代表候補生だったんですけどね。話の展開の都合とか、この作品の土台的なものとか考えたら第三話、「E.S.勢があんまり活躍できなかつた。

最後のなりますが、『ご意見』『感想』の方、お待ちしております！

ではまた次回！！

すいません、遅れました

ところが、第4話です。

今回は少し長めになつたので、1つに分けました。

それではどうぞ

「こちら扶桑国遣欧艦隊288航空隊、竹井醇子少尉です…！…これより貴官らを援護します…！」

目の前の少女が高らかに叫ぶ

「…魔女」

私はその光景を見て、知らず知らずのつに呑み込んでいた。

魔女

遥か昔よつこの世界に存在する魔法という不思議な力を持った者たち。

しかし魔法といつてもいきなりどつかに瞬間移動とか、怪しい術で悪魔を召喚したりとかは出来ない。

出来る」といえば、少し障壁を張ったり、遠くにある物を少し動かしたりする程度であまり役には立たない。

そんな役に立つかどうかの力を持つもの…魔女

しかし、彼女たちのその力はネウロイに対しては絶大な驚異であり、ことネウロイ戦に対しても人類の切り札ともいえる存在である。

そんな存在が今日の前にいる。

「IJの部隊の指揮官の方は誰ですか？」

「は、はい！ IJS学園歐州派遣部隊隊長、山田真耶です。」

突然声をかけられ、声を裏返して返事をしてしまった。

声をかけてきた向こうの隊長を見る。

向こうの隊長のその若さに驚く。

「あ、あなたが隊長ですか？」

「はい、そうですが？」

年は14、5といったところである。

そんなまだ年端もいかない少女が部隊を指揮してこの戦場にいると
「う」と驚かない人間はいないだろう

「扶桑国遣欧艦隊288航空隊、竹井醇子少尉です。ネウロイは我々が相手をしますので輸送機の護衛をお願いします。」

「え！でも、そちらの人数は3人だけのようですが。それならば我々も一緒に・・・」

「彼らの隊員は見たところになるとPTS-Dを起こしています。

戦闘続行するのには不可能です。」

そう言って生徒たちのほうを見る竹井少尉。

そこには金切り声ですすりなき、金縛りで動けなくなつた生徒たち、無表情になり何かを呟き続ける生徒の姿があつた。

「あなたたちは今はここを一刻も早く離れるべきです。このままでは生徒は持ちません」

「……」

「……」は我々だけで十分ですので早く退避を

そう言って仲間の元へ戻つていく

「…………先生、……」は彼女たちの言つ通り輸送機の護衛に回るべきです

いつの間にかせばに来ていた更識さとしがそう提案される

確かにその通りだ。

このままでは生徒がみんなつぶれてしまつ。

部隊を預かったものとして隊員のことを考えるともつ限界だ。

此處は彼女の言葉に甘えるべきだ

「… そうですね、みなさん！ 私たちは輸送機の護衛に専念します！
万一敵が来た場合は慌てず騒がず私に報告！！私が相手をします！
！・・・動ける人は動けない人のフォローに回ってください！！」

私は生徒たちに指示をだし、離れてしまった輸送機に向かった。

「ふう、ようやく往ったわね」

離れていくE.Sの部隊を確認した醇子はほっと一息をつく。
もしかしたら隊長もPTSになつていなかつたがどうやら
正常な判断はできるようだ。

そこへネウロイが攻撃を仕掛けてくるが・・・

「・・・甘いわ！！」

その攻撃を軽やかに躱し、手にもつ九九式二号二型改13mm機関
銃でネウロイを落とす。

「まずは一機・・・・ 美緒、後ろーー！」

そう醇子が叫び視線を上空に向ける

美緒と呼ばれた少女の後ろに敵が張り付いていた。

少女を落とすと機銃を放とうとするが、突如ネウロイの正面から少女の姿が消える。

「はああああっ！－！」

ネウロイの上空から少女が、その手に握った扶桑刀がきらめく。

両足を複雑に動かし、後回転の要領で一瞬で宙返りをして相手の上を取つたのだ

「貰つた！！」

上空から急降下し、そのままネウロイを一閃、敵を両断する。

「これで一機－－！」

「後は……義子！－－一時方向の敵をお願い」

竹井の指示に気のない返事で返す少女。

「ん～、了解」

地表に背を向けた状態から一気に降下する

降下した少女の先には敵が4機。

そこに向かつて恐れる」となく一直線に落ちていく

敵に突つ込みながらすれ違ひ様に次々とネウロイに銃弾を叩き込む

「終わり~」

少女が通過した後、次々とネウロイは光の破片に変わった。

「ふう・・・終わったか」

「ええ、二人とも周囲を警戒して」

すべての敵を倒した三人はそのまま上空を周回して残敵がないか警戒する。

「しかし・・・彼女たちが例の部隊か」

上空を警戒していた坂本美緒飛曹長は心底つまらなそうに呟く

「ええ、HJ学園選りすぐりの精鋭部隊っていう噂だつたけど・・・
・・・」

「てんで駄目じやん」

「しかし、なんでもあんな訓練兵ばかりの部隊を送り込んできたんだ？」

「少しでも実績がほしいんでしょう？ 向こうでは怪異が発生してからその開発費に見合つ戦果を残せていないみたいだしね」

「それで訓練生の部隊まで送つてくるか？」

「ただでさえ機体の数が少なくて前線に回せる機体がない以上、少しでも使えるなら送つて実績を上げたいのよ。なんだかんだで今一番 IIS を保有しているのは IIS 学園のようだし。一応代表候補生は軍で一通りの訓練は受けているみたいだけど……」

坂本と竹井は遠くで輸送機の護衛に当たつている IIS 部隊に向ける。

初の実戦を経験したということもあり緊張が抜けていないのか、IIS 学園の生徒の飛ぶその姿はフラフラしておりかなり危なっかしい。
「あれでか？ …… あれだったらまだ戦闘機のほうが全然役立つぞ？」

「軍にもメンツというものがあるのよ、国民の血税で賄つてている軍事費の大部分を開発費に使つてるのよ？ それなのにいざつて時に全く役に立ちませんでした、なんて口が裂けても言えないわよ」

「確かにそうかもしれないが……」

「だからって訓練生を送つてくる上層部の考え方なんて私には理解できなきにけど」

「あんなものにお金をかけているんだつたら、こちに補修部品の一つでも送つてほしいものだ。現場は倉庫で埃を被つていた旧式の戦闘機や戦車を引っ張り出して使つていいんだぞ。」

IISが軍事転用され防衛の要となつた後、軍事予算の多くはIISの開発費に回され、既存の兵器である戦闘機や戦車の新型機開発計画は凍結、または縮小を余儀なくされた。その為、現在歐州戦線では10年から20年前の旧世代の戦車や戦闘機を使つていて、更に補修部品の生産ラインも縮小してしまつた為、補修部品がまったくと言つていいくほど足りない。今や前線では足りない部分をどうしようかと整備兵が日々頭を悩ませているというのが現状である。

「だけどさすが醇子だね。」

「ああ、よく輸送機がこここのルート通るとわかつたな」

「ええ、まさか本当にこのルートを通るなんて思わなかつたわ。」

元々、今回の任務は彼女たちの部隊が行ははずだつた。しかし、任務に入る直前、他の部隊が行つとされ中止を言い渡されたのだった。

何か嫌な予感がした竹井は自身の部下であり、親友でもある坂本美緒飛曹長、西沢義子飛曹長と共に哨戒任務の名目で普段は飛行しない空域に向かつた。そして輸送機は竹井が予想した通りの航路を取つていた。

「なんにせよ、輸送機が無事でよかつたわ。」

「はつはつはー…そつだな！」

「じゃあ、さつさと帰ろつよ。私お腹がすいたー」

「駄目よ、少なくとも安全圏まではついていないと。輸送機をこのままにしては置けないわ」

今、竹井たちが飛んでいる空域は人類側の勢力圏ではあるがしづかばネウロとの交戦が行われる空域に近いため、安心はできる空域ではない。

「うえー、めんどいな、もう。」

げんなりする義子

「そういうわないので…さてと、一人とも弾薬の方はまだ残ってる？」

「ああ」

「問題なーし」

「よひしい、- - - 輸送機部隊、これより我々も護衛へつきますよ。よろしいですか？」

『ああ、頼む。』

「山田さん、よろしいですね？」

IIS部隊の方にも確認を取る

『は、はい！お願いしま・・・・・・・・！』 竹井少尉！』

「どうしました！？』

突如、インカムの向こうから真耶の悲鳴が聞こえてきた。

『よ、4時方向に大きな機影！・・・・・・お、大きい』

「なんですか！？」

竹井はその方向に目を向ける

そこには

巨大な黒き影が竹井たちをあざ笑うかのように悠然とこちらに向かつて飛行していた。

E p - 04 魔女とHIS Apart (後書き)

リバウの三羽鳥、登場！！

B o a r t へ続きます

「竹井少尉、新しい敵が！」

「」こちらでも見えています。・・・・山田先生。そちらで戦えるのはどれくらいですか？」

「私を含めて4人です」

「そうですか・・・・」

竹井は顎に手を当て思案する。

真耶はああ言つてゐるが実際の所は数に入れていいかどうかはかなり怪しい。

IS学園の生徒たちは客觀てきに見ても、もつ戦うのは限界だらう

しかし、あの大型を相手にするにはウイッチ三人ではまず無理だ。

大型単体であれば時間がかかるが何とか倒せるだらう。

しかし大型の周りには小型機が数機、護衛についている。

しかも、今回は避難民を乗せた輸送機もいる。

まだ交戦距離には入っていないものの、足の遅い輸送機をつれて逃げるという選択肢もとれない

・・・・・山田たちに輸送機を守つてもいいつか？

いや今の彼女たちでは心もとない。

竹井が思案していると

「山田先生！－た、大変です！」

突然生徒の一人が声を荒げる

「ど、どひしました！－！」

「8時方向に機影を確認しました！－その数・・・・10！－」

「ま、まさか・・・敵の増援！？」

その報告を聞いた真耶の顔がみるみる青ざめしていく

「一直線にこちらに向かって来ます！－」

「全機全兵装使用自由！－我々で迎撃します！－」
オールウェポンズフリー

半ば悲鳴のように指示を出す真耶。

「待ちなさい！－！」

迎撃体勢に入るEVA学園を制す竹井

「美緒、？見える？？」

「ああ、問題ない」

竹井の問いに簡潔に答える坂本。

そう言って、右田の眼帯を外した。

眼帯に隠されていた右田の魔眼が赤く光る。

「日月旗を抱く白い龍のマーク……優刀だ」

「といふことは義勇統合戦闘飛行隊ね」

「それって、あの義勇統合戦闘飛行隊ですかー？」

その名を聞いて驚く真耶。

そこへ……

「竹井、済まない遅くなつた」

編隊を離れ一人の少年が竹井たちの所まで飛んできた。

「お久しぶりです、緋村大尉。」

「はっはっは！久しぶりだな、優刀」

「美緒も元気そうだな」

「やつほー ホムラ大尉」

「・・・西沢、ホムラじゃない、緋村だ」

おおよそ軍隊のあいわつとは思えぬフランクさであいわつを交わす4人。

そんな中、E.S学園の生徒たちの方から小さなつぶやきが聞こえてきた

「え・・・男？」

「なんで男がいるのよ」

「男のくせに」

「本当に増援なの？」

そのつぶやきを聞いた坂本は生徒達を睨み付ける

何かを言おうと振り向こうとするが・・・

肩を掴まれることで止められた。

「優刀・・・」

「いちいち相手にするな、毎度のことだ。」

そう言つてため息をつく優刀。

「しかし・・・・・」

「いいさ、それが彼女達の？常識？なんだろ？」

「・・・・・わかつた」

「・・・・・山田先生、生徒たちを連れて向こうへ行つてもいらっしゃます
か」

「え、でも・・・・・」

「我々での大型をどうするか話し合いますので周辺にこれ以上敵
の増援がないか見張つていてください。」

「わ、分かりました・・・・・」

何かを言おうとする真耶だったが、自身を見る竹井の冷たい目に何
も言えず、従うしかなかつた。

「・・・すみません、緋村大尉。いやな思いをさせてしましました」

「いいや、それよりも今はあの大型だ。」

「そつと大型のいる方向に視線を向ける優刀

「ああ、どうする？ 我々全員で当たるか？」

「いや、全員で当たるには後ろが心配だ。ここはうちの隊だけで当たる。竹井たちは最終防衛ラインについてくれ。撃ち漏らしと、後ろの警戒を頼む。」

「了解です」

「やれやれ、味方を警戒しなくてはならんとはな

「最悪、あいつらがパニックになつたら撃ち落としたつて構わない。連中には絶対防衛があるからな、たぶん死にはしないだろ。」

「本氣か？」

「ああ、撃ち落としてもここは人類の勢力圏内だ。陸戦型にやられるのではない。上層部も「アガ無事なら文句は言わないだろ」と。なにより一番怖いのは奴らがトチ狂つて輸送機を危険にさらすことだ。指揮官のあの様子じやともじやないけど何か起きたときに部下を抑えられんだろ」

「やうですね」

「奴らは一応学生だぞ？いいのか？」

「ISなんて代物を使つてゐる時点で学生だからなんて言い分通用しない。ISが国の防衛力であることを知つていて自らが使うことを選んだんだ。その選択をした時点で人を護る側の人間であつて、護られる側の人間じやない。それが嫌ならISを使うべきじやない」

「うへ～、いくら死にはしないからつて人に銃を向けるのは嫌だな」

「誰だつて嫌に決まつてゐる。けど俺たちは軍人だ。民間人を護るのが仕事だ。相手がなんであれ、民間人を危険にさらすのであれば倒す。それだけだ。」

「そうだな・・・我々も覚悟をしなければいけないか」

「すまないな・・・」ここで起きたことのすべての責任は俺がとる。

「いいや、気にするな。あんな連中のために誰がお前に責任を取らせるか」

「美緒の言つとおりです。大尉に責任なんて取らせません、後ろは私たちに任せてください。」

「そういふことだよ氷室大尉」

「ありがとう、三人とも・・・あと西沢、俺は氷室じやない、緋村だ」

「わははははっ」

「じゃあ、ここは頼んだ。竹井」

「御武運をーー！」

互いに敬礼を交わし、優刀は先行していた編隊に戻つていった。

「下原、敵の正確な数は？」

俺は編隊に戻ると下原から敵の詳細を報告してもらいつ

「はい、一高度9000ー距離11000に小型機が15機、先行してこちらに向かってきています。その後方に大型が一機接近してきています」

「そうか・・・」

下原の報告を聞き俺は作戦を考える。

「よし、部隊を二つに分ける。まず、俺とジョンタイル隊で敵小型編隊に突入、牽制。大型への道を作る。一呼吸おいて加藤は残りの隊員を率いて大型の相手を頼む。」

「…………」「了解」

「…………」

隊員から返答が返ってくるが大将 ジョンタイル・ハ返答を返さず一人、ある一点をじっと睨んでいる

「大将、どうした？」

「…………いや、なんでもない。すまなかつた。了解だ」

俺の言葉に返答を返すも、ジョンタイルはまだ心ここに非ずといった風だ。

「なんでもないことあるか。そんないかにも悩んでいまやつて顔してる奴と一緒に敵陣の中に突っ込んでいけるか。」

「……済まない」

「で……どうした」

「…………胸糞悪くてしようがないんだ。」

一拍おき、ジョンタイルは口を開く。

「何が？」

「あいつらだ」

そう言つてある方に視線を向ける

「わざのあいつらの物語が氣に食わなくてな」

「…………ああ、やつこいつとか」

先ほどのHHS学園の生徒の俺に向かっての陰口をやつしやつ偶然聞い

てしまつたらしい。

「・・・あいつら、ボスに向かつて？男のくせに？なんてふざけた」と言つたんだぞ。I.S.を使えるからつてい氣になつて、普段はえばかり腐つているくせにいざ戦闘になつたら何の役にも立ちはしない、そんな奴らがずっと前線で戦い続けたボスに？男のくせに？だと？一体あいつらは何様のつもりなんだ」

普段の彼女の姿からは想像できないほどの怒りを表すジエンタイル。

隣を飛んでいたフェデリカがかなり驚いた顔をしている

それはそうだ。彼女がこんなに怒つているところを隊員の誰も今まで見たことない

「ボスたち、男の人達だつて皆、今もこの戦場で必死に戦つているんだ。家族を、国を、護ろうと、必死で戦つているんだ。そこに男も女も関係ない。私たちと共に戦つている？戦友ながま？だ。その？戦友ながま？をあいつらは貶けなしたんだぞ？そんなの許せるか！」

「大将・・・」

「世界最強の兵器であるI.S.使えるのは女しかいない。だから女は偉い？だから男は私たちに跪け？はつ、恐れ入るよ。だつたら今すぐこの世界を救つてみろ、世界が救えないなら多くの命を救つてみろ。それすらも出来ないで、敵を前にびくびく震えてビビッていた奴が前線で命を懸けて戦つてる仲間に向かつてHラうそな口叩くな！！」

「大将・・・もういいよ」

「ボス、いいわけないだろ。あいつらはコケにしたんだぞ！！私たちの仲間を！！」

「大将、いいんだ。？俺たち男？は大将達がそう思つていてくれるだけで・・・それだけで十分だ」

そう、？俺達男？は彼女達ウイッチがそう思つてくれているだけで十分だ。

彼女の言いたいことも痛いほどよくわかる。

ISが登場してから世界は変わった。世界最強の兵器、ISはなぜか女性にしか反応しなかった。その為、女と男の社会的パワー・バランスは崩れ、この世界は女尊男卑の世の中になり、男は女よりも弱い生き物と言われるようになつた。

ISによる女尊男卑の世界になつたことで被害を一番受けたのは間違いなく軍に籍を置く者たちだろう。

特に空軍、戦闘機パイロットたちはその一番の被害者といえる。

役割の大部分はISに取つて代わられ、その規模の縮小を余儀なくされた。

それでも今も大部分の軍人は男である

もちろん男にはISを扱う事は出来ないし、俺のように魔法力を持

つ男子は本当に稀にしかいない。

でも俺は今の歐州が「いつやつて何とか持ちこたえているのは特別な力も持っていない彼らのおかげだと思つていて

きつと戦つているのがウイツチやIISだけであつたらとつぐに世界はネウロイの手に落ちていただろ。」

皆が力を合わせているから今も「いつして戦つていられる。

そんな共に戦つている俺たちの仲間を、IIS学園の生徒は貶したのだ

俺だつてそんなの許せるはずがない・・・・・・・・だが。

「しょうがないさ・・・・彼女たちはまだ本当の？戦場？を知らないんだ」

そう、彼女たちは知らない

戦場といつものがいつたいどれだけ過酷で悲惨なのかを・・・・

人々の泣き叫ぶ声

人の焼ける匂い

町が燃えていく様

真つ赤に燃える空

そこに浮かぶ黒き影・・・・・・

それらの前では男も女も関係ない

皆、等しく命を奪われる

それが戦場・・・・・

そんな光景を彼女たちは知らない。

だが、俺は知らない方がいいと思つている

そんな経験はもう一度と起きない方がいいに決まっている。

「俺は彼女たちがそれを知らない」とは仕方がないと思つてゐる。」

「だから、俺たちは彼女たちの言つことなんて気にしない、ただ俺たち軍人はやることをやるだけだ。・・・・けど、もしそれを知つてしまつても尚、同じことを言つようであつたら・・・・俺は許さない」

「ボス…」

「だから・・・大将が、少なくともウイッチの皆が俺達、男のこと

を共に戦う？戦友？と思つてくれているのなら、それだけで十分だ。」

」

そう言つて大将に向かつて笑いかける。

「ふ、・・・・・当たり前だ。ボスは私たちの隊長だ。誰もが認める私たちの最高の隊長だよ」

そつといつてふつと笑みを見せるジョンタイル。

「やつぱり大将はそつじやないと。そつやつて笑つてゐる方がしか

め面よりずつと似合ひ。やっぱり美人は笑つていないとな

その言葉にきよとんとする大将。

周りに微妙な空気が流れる

あれ？

もしかしてまた何か俺やつちゃったか？

「ふツ、ふふふふふ、あはははっ！！　さすが優刀！　言つことが
ちがうな！」のジゴロめ！」

「ちょ、痛つ！何すんだよラル！」

いつの間にか真横に来ていたラルが人の肩をバシンと強くたたいて
軽快に笑う。

「誰がジゴロだ！誰が！」

「まったく自覚がないのか？　だつたら余計達悪いな天然ジゴロー！」

「天然ジゴロ！？」

「まつたくもう……」」れだから扶桑の人間は

ロスマンが呆れたように頭を振る

「大将が羨ましいわ。私にも誰か言ってくれないかしら

頬に手をやり、はあ、とわざとらしいため息をつくフェデリカ

その肩をちょんちょんとつづく影、

「あら何、伯爵？」

「フェデリカ Quant o sei bello! Non t
i f a c c i o d o r m i r e p e r t u t t a l a n
o t t e 《君はなんて素敵なんだ！ 今夜は
寝かないよ 》

「

おそらく、クルピンスキイは口説き文句であるうセリフをロマーニヤ語でフェデリカに囁く。

「あら伯爵ロマーニヤ語上手ね」

フェデリカはそれを軽くいなす

「残念、行けると思つたんだけどね」

そういうクルピングスキーの顔は大して残念そうではなかつた。

「伯爵には悪いけど、私ノーマルなのよ。とにかくで……優刀！今の伯爵の言葉を言つてくれないかしら！？」

「フェデリカ、何言つてんの！？」

「ねえロスマン先生、伯爵はなんて言つたの？」

ロマーニヤ語が解らなかつたハルトマンはロスマンにその意味を聞く

「フラウはまだわからなくていいのよ」

ロスマンは笑顔でそう答えるが額に青筋が浮かんでいる。

あ、すげー怒つてるな。

「はいはい、もうその辺にしなさい。敵とあと少しで接敵するわよ

ちゅうじこにタイミングで武子が締めてくれた。

「ア解だ」

やつて話は終わるとばかりに前を向く。

まったく、クルピングスキーとドッリオに感謝しなくちゃな。

「よしそ、準備はいいな！……これより戦闘を開始する……我々と出合つたことを奴らに後悔させてやれ！……」

「「「「了解！」」」

その言葉を聞くよりも早く俺とマルセイユ、ジョンタイル、ドッリオの四人は敵群に向けて最大戦闘速度で呐喊する。

突出した俺たちを先頭の小型ネウロイは当然狙い撃つがその攻撃を体を少しひねることで紙一重で躱す。そのまま敵に向かつて両手に持つMG34の銃弾を打ち込む。

まず一機

そのまま敵編隊を真つ二つ割る様に突撃、抜けたところで左右にブレイク。二つに分かれた敵編隊の背後をそれぞれ強襲する。

「今よー。」

武子達が絶妙なタイミングでその隙間を次々と駆け抜けていく

そしてその勢いを殺さずに大型のネウロイに向かっていった

これで大型は大丈夫だ。

しかし敵もそう簡単に武子たちを行かせようとはしない。

敵の一機が急旋回し、武子たちの後を追おうとする

「やうはせないー！」

追おうとする敵を撃ち抜く

今度は敵の一機がこちらに向けて銃弾を放つ

そのまま編隊の側面に向かつて突撃、向かつてくる一機を銃で牽制、
その横を通り抜ける

その攻撃を障壁で防ぎ、編隊の周りを大きく迂回するように旋回し
ながら攻撃を放った敵を撃ち落とす。

そこへ・・・

「マルセイユーー！」

「はあーー！」

マルセイユが上空から攻撃を仕掛けた。

そのままなすすべもなく撃ち落とされる敵

そのまま低空へと抜けていくマルセイコ。

敵の一機がマルセイコを脅威と感じたのか、そのあとを追いかける。

降下速度も加わって敵はどんどんマルセイコに勢いよく近づく。

ついに射程に到達したとき、

「甘こーーー。」

マルセイコはロールしながら機首を上げ、弧を描く螺旋を描がきながら飛行する特異な機動を取る。

マルセイコがその機動を取つたことにより、勢いがつき過ぎていた敵はそのままマルセイコを追い抜いてしまった。

「もうひつたつーーー。」

敵の背後を取つたマルセイコはその隙を逃さず敵に機銃を叩き込む
「これで三機四ーー。」

残りは小型は9機。

、右の編隊に向けて攻撃を仕掛けんジエントイルとドッリオ。

二人は敵編隊に反撃の隙を与えるまいと勢いよく呐喊する。

ジエントイルは自身の前方にいる敵の攻撃を気にしないといった風にそのまま敵に突っ込み続ける。

そのまま至近距離まで近づき……

「へりえ！」

右手に持つショットガン、レミントンM870を敵の機首、ギリギリのところで発砲。

敵は粉々に砕け散る

「ふむ、威力は問題なし」

銃を一回転させて排莢、次弾装填。

そのまま、次の自分に向かってくる敵に撃ち込む。

次の敵も粉々に砕け散る。

「ち、連射性と射程、速度が問題か・・・やはり航空機動戦にはあまり向かないな」

そういうとレミントンM870を肩にかけ、背負っていたM249を左手に、ホルスターからデザートイーグルを抜き右手に持つ

次々と敵機がジェンタイルに向かつて攻撃を仕掛ける

「今のは最高に機嫌が悪いんだ、落とされたくないやつは近づくな・・・」

「大将怖すぎるわよ。・・・まあ気持ちは分からぬないけどね
ジェンタイルの斜め後方についていたドッリオは自身に向かつてくる敵をM151で撃墜しながらつぶやく

「さてと・・・彼女たちに教えてあげようじゃない。自分達が思つていろほどあなたたちはすこくないつて事を」

ドシリオは一體の敵に田をつかると一気に加速し突撃する。

敵は撃ち落とせんと機銃を放つがドシリオはなんてことなこといつてそのままの勢いで狙いを定め、銃弾を叩き込む。

「まずは一機目ー。」

上昇、そして次の標的に狙いを定めて急降下、敵にぶつかつこうになるほど近づくまで銃弾を叩き込む。

「これで一機、次ー！」

次の標的に向かおうとするが、

「・・上!?

上空から敵機が一機、ドツリオに強襲する

その攻撃をシールドで防ぐ

「いい攻撃ね・・・けど!」

ドツリオは手に意識を集中させる。次の瞬間、彼女の手には光が集まり、その手に剣の形を成していく。

「それじゃ私は落とせないわよーー!」

その手に現れた剣で迫るネウロイを両断する。

「あと、一機!」

最後の一機の方へ向いた瞬間、

「残念、終わりだ」

最後のネウロイはジョンタイルの手によつて葬られた。

「あら、とられちゃったわね。ど、うへ。すつきりした?」

「ああ、気分爽快だ。」

そつまつて口の端をわずかに吊り上げるジョンタイル。

「モフ

そつまつてにこやかに笑いかけるドッリオ。

「セヒ・・・あつちも終わった様だな」

ジエントイルが視線を向ける。

その視線の先いた優刀達は、たつた今最後の小型機を撃ち落とし、武子たちの所に向かおうとしていた。

「さて・・・私たちも行きましょうか」

「今更私たちが行つても間に合わない気がするけどな」

「ラル隊はそのまま攻撃を続行、コアをあぶりだして！ ロスマントークンは砲座に攻撃を集中、ラル隊を援護！ 定子ちゃん、私たちは敵右翼を叩くわよ！」

「はい！」

敵大型ネウロイに対して勢いよく降下する武子と下原。

二人が狙うのは、敵ネウロイの両翼、その付け根の部分

付け根に向かつて二人は急降下し機銃を放ち翼を根元から吹き飛ばす。

「いのまま左翼も・・・・!」

そのままネウロイの上に上昇。再度左翼に向かつて下降する。

「はあっ！！」

続いて左翼を破壊

しかしネウロイはすぐ再生し、元の姿を取り戻す

ネウロイは再生が完了すると武子に向かってビームを放つ

「やはり『ア』を破壊しないと駄目ね」

「武子！…コアを発見した！ 胴体のちょうど真ん中だ！…・・・
・くそ、もう再生しているのか！」

ラルから「ア発見の報を聞き、武子はすぐに指示を出す。

「了解、エディータ！ 胴体上部、前方左側の銃座をお願い！」

「了解！」

「ラルは右側の銃座を…」

武子の指示にを聞いたエディータとラルは次々と銃座を破壊していく。

「これで対空砲は破壊した。再生するまでコア周辺は丸裸・・・やるなら今ね ドラッヘルより各機 - - - これより敵コアを破壊する。援護されたし！」

「「「了解!!」」

武子は下原をつれて急降下を開始する。

降下中も加速し、大型との距離を縮める

目の前には視界を覆つぼどの巨大なネウロイ。

その大きさに圧倒されそうになるが、ただひたすらに距離を詰める

「……今！」

引き金を絞る。

機銃から放たれた銃弾はネウロイの装甲を深く抉り、コアを露出させた。

「定子ちゃん！」

「はーー！」

後方を飛ぶ下原の銃撃

下原の放った銃弾は吸い込まれるようにコアへ

次の瞬間、

バ——ンッ！！

ガラスが割れるような音があたりに響き、赤いネウロイのコアは砕け散る

コアが破壊されたことにより、ネウロイはその巨体を光の破片へと変えていった。

「山田先生！！敵大型ネウロイの破壊を確認しました！」

生徒の一人からそう報告される。

報告してきた生徒の声は喜びに満ち溢れていて、今にも泣きだしそうである。

「やった！！」

「わ、私たち生きてる・・・」

周りにいる生徒たちも歓喜に沸いていた。

そんな中、ただ一人だけ表情を暗くしている人物が一人

「更識さん、どうかしました?」

「…………いえ、なんでもあつません。みんな無事でよかったです。

」

「そうですね、落とされた子も黙事のようだし、本当に良かった

「ええ、そうですね」

真耶の言葉に笑顔で答える楯無ではあったがその胸のうちは暗澹とした思いだった

(…………結局、今回の私たちの戦果は旧型の小型機が6機。しかも彼女たちが来なければ輸送機も守れずあのまま私たちはやられていた。敵もすべて撃墜できず、輸送機も満足に護れなかつた……
・世界最強の兵器が聞いてあきれるわね)

今回の戦果は旧型の小型機が6機。しかもこちらの損害はEISが一機である。

幸いコアは無事だったものの、EIS一機に見あつ戦果じゃなかつた。

(いえ、私たちが未熟だった……といつぱ。EJの結果に?上

「はなんて言つからひっ。怒つてまたとんでもない無茶なことをや
らうとするわね」

己の未熟さを痛感する樋無

そしてある一つの決意をする

その瞳はある一点を見つめる

一点を見据える彼女の瞳には強い決意の光が灯っていた

E p - 04 魔女とHS B part (後書き)

E p - 04 終了です。

ごめんなさい、めっちゃ長くなりました。

なんか、HS学園の生徒たちが嫌な子達に見えちゃいましたね。

でも、あの反応がHSでは一般的なんぢやないですかね。

個人的には大将の言いたいことが伝わっていればと、そう思います。

E p - 0 5 O n e - m a n A i r F o r c e

V S

M Y

さうも、シユウ禅です

E p - 0 5 です。

それでまじめーーー！

「・・・私は行かない」

吹き荒れる嵐の中、静かに告げる

「先生！…先生がいないと私・・・・・！」

一人の少女が叫ぶ

「坂本……君のその誰かを…何かを守りたい…君のその胸の誓いを果たせるか否かは正直に言って私には判らない…」

彼女が何をしようとしているのか判っているはずなのに・・・・・・

「・・・・・・・・・・」

俺はそれを止めることができない…………

「優刀……」

向けられたその眼は優しく語る

だから……

「少佐…………心配しないでください、自分たちが必ず作戦
を成功させます」

そんな冗談みな言葉しか言えなかつた

そして・・・

「ハヌヌヌヌウ・・・・」

田の前に立てるやうにはさうのない人物

「やぬるおおおおおお・・・・」

青く光る光の剣の身上迫る

光の剣にこもる殺意・・・・

死を覚悟した瞬間、田の前の景色がガラス細工のように崩れ去る

「まあシー・まあシー・まあシー・」

ベットから跳ねるよつて起き上がり、田を覚ました。

周囲を見渡す・・・・・

古せたとこねだりの壁。そこには無機質で質素な時計がかけられており、時刻は午前7：00ちょっと前を指してくる。

夜間哨戒に出ていたナイトウイッチを出迎える準備をしているのだろう、外からは朝早くから整備兵たちの活氣ある声が飛び交っている。ついで現実であることを確認し、息を整えてから息を吐く

「はあ、……………くそ、またあの夢か」

今まで何度も見てきた夢だ……

いや、夢ではない。

記憶といった方が正確である…………

何回も、何十回も

忘れない、忘れない、何度もあの光景がよみがえ

る。

繰り返される悪夢・・・・・・

いい加減見飽きている夢だから、立ち直るのも早く済む。

つい一週間前にも見た夢だ。

この夢を見る原因というのは大体決まっている。

立ち上がり、酷く汗に濡れたタンクトップを脱ぎ捨て、デスクに置いてある扶桑国空軍の男性士官用制服に手早く袖を通し、着替える。

「少佐、起きていらっしゃいますか？ 朝食ができましたので呼びに
きました」

セレック今田の朝食番である下原が俺を呼びにきた。

「ああ、分かった。すぐ行く」

こつまでも夢のひとを気にしてこじてもしようがない。

今田も今田として片付けなければいけない書類が山のよろあるのだ。

「よし、こへか」

デスクの上の昨夜見ていた資料を掴み、自室を出る。

・・・・・今日の朝食は何だろつか？

三人の口からは呆れているとも、驚いているともとれるため息を吐く

「ねえ・・・・」

「これは」

「う～ん・・・・・・」

上空を飛ぶ一つの黒い点を見つめる俺、ラル、エディータの三人
我々義勇統合戦闘飛行隊の面々は滑走路でただいま模擬航空格闘戦
の真っ最中。
であるはずなのだが・・・・・

そんな彼らの視線の先では

「もうつた！」

「ぐ・・・まだまだ！」

義勇統合戦闘航空隊の一番槍、ワン・マン・ニアフォースことドミニ
ニカ・S・ジエンタイルと・・・・

IISオラーシャ連邦代表、更識楯無が苛烈な空中戦を繰り広げていた

「はああああっ！」

楯無は手に持つ巨大なランス、『蒼流旋』に装備されたガトリング
ガンをジェンタイルに向かつて放つ。

ジョンタイルはそれを微妙な緩急をつけて左右に移動することで紙一重で躲しながら楯無に突撃。

近距離でM249のフルオート射撃を放つ。

「はっ！」

それをギリギリで躱し、ジョンタイルにランスの突きを繰り出す。

それを体を捻ることで躱すジョンタイル。

捻った反動を利用してジョンタイルは側面に移動、突きを放つたことでがら空きになつた楯無のボディに右手に持つショットガンを撃ち込み、抜ける。

「くーーー！」

腹部に放たれた一撃で崩れた体勢を立て直し、ジェンタイルの後を追いかける

ジェンタイルの後を追う間も、狙いをつけてガトリングガンを放つがそれを後ろに甩がついているかのごとく次々と躰すジェンタイル。

「・・・・！」

ジェンタイルが自身の直線ラインに入った瞬間、樋無は一気に加速、ランスでジェンタイルを貫かんと吶喊する。

「ふっ！－！」

しかし、ジェンタイルはそれをバレルロールで躰し、逆に樋無の背

後を取る。

「もうつた・・・・・・」

M249とレミントンM870を楯無に向ける。

「甘いわ！！」

つきだしたランスをそのまま真一文字に薙ぎ払つよつて振るつ。

「なに！？」

ジエンタイルはその一撃をシールドで防ぐも、その巨大なランスの勢いを殺すことは出来ずに押し負け、吹き飛ばされる

「ちこひーーー！」

吹き飛ばされた勢いを利用し上昇するジョンスタイル

「逃がさないーーー！」

その後を追う楯無。

「へえ、やるじゃないか。彼女

- - - - -

いつもは軽快な軽口を言っている伯爵が驚嘆の声を漏らす。

「はえ～す」いね～

「ふ、ふん、隊長の方が強いぞ！」

「あ、あはははは・・・・」

上空を見据えていた年少組のハルトマンただ感心し、マルセイユはふてくされた顔をしている。下原に至っては乾いた笑いしか出でこない

そうしてこる間にも一人の戦いは続く・・・・・

そもそもなぜ、IS学園派遣部隊に所属している彼女が義勇統合戦闘飛行隊の隊員であるジェンタイルと模擬戦をしているのか？

話は数日前に遡る・・・・・・

数日前

「緋村大尉、ボニン少佐が指令室までお越しください、とのことです」

昼前、隊のオフィスで報告書と格闘していた俺に連絡士官がそう告げた。

共に書類仕事をこなしていた武子を連れ、何事かと指令室に駆けつけるとそこには温和そうな紳士然とした基地司令アドルフ・ローラント大佐にしてG52飛行隊司令、フーベルタ・フォン・ボニン少佐とカールスラントではあまり見かけない東洋人の男性がいた。

「祖国のお客人だ、緋村」

そういうつてボニン少佐が東洋人を紹介する。

男性は優刃に一コリと笑いかけた。

「やつほー緋村、久しぶりだね。」

「お、織田^{おのだ}大臣官房、なんでこんなところにー?」

目の前にいる人物に驚く

彼の名前は織田高顯
おのだこうげん

扶桑国防省に勤務する官僚であり、扶桑国全軍の任免、給与、懲戒、服務その他的人事その他もろもろを統括する部署の長だ。

織田大臣官房とはある事件で知り合い、扶桑にいたときは一時期彼直属の部下のような形で個人的に任務を渡されたことがあった。

近所の溝浚いから、孫の送り迎えに首相夫人の警護まで、個人の趣味から重要任務までやらされた。

性格を一言でいえば食えない狸親父である。

「ずいぶん活躍しているようだね、扶桑国民として僕も誇らしいよ。先日、撃墜数100機を突破したらしいね。おめでとう、現時点で君は扶桑派遣組の中でトップ・エースだ」

「はあ」

「さて、君の活躍に僕たちも答えてあげなきやと思ってね。今回、君に功四級金鶴勲章を叙勲することに決まったよ。名誉だよ、緋村」

「はあ」

なんで今更・・・口には出さないものの、内心疑問が残る。

「追つて正式に通達があるだろ? 授賞式はパリで行う予定だ。各國の大天使を呼んだ派手なパーティーだって、楽しみにしていいよ」

「ありがとうございます」

とうえす一礼。

まさか本当にこれだけのためにこの人は最前線くんだりまで来たのか？

「さらに君は本日付で少佐に昇進、よかつたね」

「はい？」

今、この人なんて言った？

俺が少佐だって？

「あれ？聞こえなかつたかしら？ 少佐だよ、緋村」

「い、いえ・・・あまりにも突然の事でしたので」

「まあ気持ちはわかるよ、何せ前例がない。君の年で佐官なんて誰もいらないからね」

「は、はあ

「まあとにかく君は今日から少佐だからもがんばっててくれたまえ」

「ありがとうございます」

釈然としないまま敬礼。

「おうと、最後にもう一つ」

「…………まだ何か」

まだあるのか…………

「なんでいやそうな顔するのかしら？ 君って今反抗期？」

「違います、いつもまつまい話ばかりですから何か裏があるんですね」

「さすが、緋村鋭いね」

「やつぱり…………」

何かあると思ったよ。この人がこんなところにまで来ているんだ、何もないわけがない

「今回君の昇進を機に一人君の隊に補充人員をまわすことになった」

「え？…………補充人員ですか？」

「いや、なに、いつの間にかしても君の頑張りには最大限いたえてあげよつと思つてね」

「……で、その補充人員に問題があると」

「うへん、当たらずも遠からずつてとにかくしら？」
「どうこいつことだ？」

「彼女自身はとても優秀だよ、それは間違いない。……ただ」

「ただ？」

「彼女の背後がいろいろとややこしくてね、正直、現場そうちにも迷惑がかかるかもしねえ」

「うえ・・・・せうなんですか？」

「そ、文武両道、容姿端麗、座れば牡丹、歩く姿は何とやら、きれいなバラには棘があるつてね」

「なんですかそれ・・・・」

「とにかく明後日の午後には着くんじゃないかしら？　ま、詳しい話は彼女から聞いてちょうどいいな」

- - - - -

といつわけであの得体のしれない狸親父から彼女、更識権無を押し付けられたといつわけだ。

更識権無

IS学園一年生でオーラーシャ連邦代表の扶桑出身で自由国籍権を持つ16歳

今回、どういつわけかうちに配属されることとなつた

なぜ彼女が配属されたのか

「ISとウイッチの連携運用法の確立と運用データの収集」というのが目的らしい。

何はともあれうちに配属されたからには戦力として数える。

物は試しに模擬戦をやらしてみたのだが・・・・・

「すういな

ラルが素直に驚嘆の声を漏らす。

「ええ・・・・切れのある機動、的確な状況判断、遠近の兵装選択、回避と防御のバランス。どれをとっても高いレベルでこなしています」

「代表は伊達じやないって事か」

ふと、更識の方を見続けているとふと違和感を覚える

「あれ？・・・・・」

「どうかしたのか？ 優刀」

「あ、ああ・・いや、なんでもない」

違和感の正体がなんなのか必死に頭を捻つて考えるが、結局その違和感の正体がなんなのか解らなかつた

装甲している間にも一人の戦いは沸しを増す。

「見ろ、決まるぞ」

「はあ！！」

楯無はガトリングガンを放つ

「ちいっ！」

それをジェンタイルはロールして躲しながら接近、楯無もジェンタ
イルに呼応するように呐喊していく。

そのさなか、樋無は蛇腹剣「ラステイー・ネイル」を展開、ジェンタイルに向けて振るう

「ちいっ！！」

その攻撃をシールドで弾き返すジェンタイルだが、突撃の勢いはそがれてしまった。

「貰つたわ！！」

そこへランスの突きがジェンタイルを襲う。

樋無は勝利を確信した

が、ジェンタイルは思いがけない行動に出る。

「まだだつ！！」

ジェンタイルは左手の甲の部分にシールドを展開、迫るランスの一撃を裏拳の要領で弾き飛ばす。

「つそー？」

さすがに樋無モードの行動は予想しておらず、唖然とする

「もらった！！」

その隙を逃すジエンタイルではない。

楯無の懷に入り込み、その拳を振りぬく

卷之二

その一撃は楯無のHSのシールドを破壊し、楯無自身に襲い掛かる。

「ああっ！？」

反撃の隙を与えまいと次々に拳を楯無へ叩き込む。

「それで

拳にすべての力を込める

「終わりだ！！」

渾身の右ストレートを楯無に叩き込む

パリイイイインッ

シールドが砕ける

ジョンスタイルの右拳は楯無の腹部へと吸い込まれ・・・

「そこまでーー！」

ジョンスタイルの拳は楯無の腹部に当たる寸前で止まっていた

審判をしていた武子が模擬戦終了のホイッスルを鳴らす。

「勝者、大将」

武子の声が空に響いた

意外にも早く来てしました。

ウイツチ V S I S

ここ最近、ばっかり大将は活躍します。

それに比べて武子、影薄いの何の・・・
好きなんですかね、なかなか難しいです。
次は他の子を書きたいなと思います。

では次回。

エド・06 聞いた由より見た一つ（前書き）

エリウサ、シユウ禪です。

エド・06です。

では、どうぞ

Ep - 06 聞いた百より見た一つ

「加藤中尉、ジェンタイル中尉、更識少尉、お疲れ様でした！」

模擬戦が終わり、下原が降りてきた三人にスポーツドリンクを渡していく

「ありがとうございます、定子ちゃん」

「助かる」

「ありがとうございます」

「それで？ どうだった大将？」

「ああ」

大将はいかでか考え込むそぶりを見せた後、その口を開く。

「問題ない、十分に実戦に出れる。」

「やつか」

その言葉を聞き安堵する

「他のみんなはどうだ？」

「問題なし」

「右に回りへ」

「問題なしよ」

「いいよ」

「いんじやない？」

「少佐がそういうなら・・・」

「はい、賛成です！」

「いいわ」

「というわけだ、改めてよろしく頼む」

そういうて樋無に俺は手を差し出す。

「ええ、よろしく、少佐」

そういうて樋無はその手を取り、握手を交わす。

「よしこ次は2対2の模擬空中戦を行う。ラル、クルピングスキー、ロスマン、ハルトマン。準備しろー！」

「了解ー！」

俺の号令のもと、四人は自分のストライカーユニットに向けて駆けて行った。

少しして・・・

「隊長、少し聞いてもいいかしら？」

空中で繰り広げられる模擬戦闘を見ていると、いつの間に隣に来て
いたのか更識が俺に話しかけてきた。

「なんだ？」

「单刀直入に聞くわ……ISをどう思つ?」
私たち

「ずいぶん唐突でストレートだな」

「新参者ですから、早いうちに部隊の皆とは仲良くなつておきたく
てね、私たちIS関係者をウイッチの子達がどう思つているか知つ
ておきたいのよ」

「そうか」

「それに私、あなたに興味があるのよ」

そついつて下から人の顔を覗き込む権無。

「俺に？」

視線は今、空中で模擬戦しているラルたちに向けたまま答える

「そり

そういうて元の位置に戻る更識

「扶桑国空軍緋村優刀少佐。世界でも数少ない男性のウイッチで
扶桑海事変の頃からネウロイとの前線に立ち続いている扶桑の誇る
トップエースの一人」

空に視線を戻し続ける更識

「欧洲がネウロイの脅威に晒されると遣欧艦隊の航空部隊隊長に任命され欧洲戦に参加。欧洲に来てからの活躍は目覚ましく、オストマルク撤退戦の活躍から、『Weiß Drache』と呼ばれるようになつた」

一拍おき

「そんな誰よりも戦場を知っている君が、私たち操縦者のことをどう思つていいのか知りたいの」

まさかこんなにストレートに聞いくへるとほ

「わかった、答えてやる

「ありがとう」

そういつて微笑む楯無。

一呼吸おいて俺は口を開く

「わかった、答えてやる」

彼がそう答えた時、私は少し体を強張らせる。

それはやつだらけ

自分は今どんなでもない事を聞いひつとしているのだから

分かり切つた事を聞いていると自分でも思つ。

前線にいる軍人がIS関係者を快く思つていはないのは分かり切つていることなのだ。

それはじょうがないと思つてゐる。

私たちのような戦場を知らない者が、我が物顔で好き勝手やつているのだ

それを好意的に受け止めろ、というのが無理な話だ。

だが、私はあえて聞く

今日の前にいる、数多の戦場を駆け抜け、歐州の人々から畏敬の念を込めて？扶桑の白き龍？と呼ばれるこの少年に・・・

彼と初めて出会つた、あの護衛任務を生涯忘れはしないだろ？。

彼の戦いを見て私は身震いした

キレがあつて正確で華麗な航空戦技

的確な部隊指揮によつて、瞬く間にネウロイを殲滅したあの後ろ姿
は今でも瞳の奥に焼き付いている

「ありがと」

私は緊張を悟られないように彼に微笑む。

彼が一呼吸おいて口を開く

「別に」

「へ？」

「別に何とも思っていない」

視線を逸らさず答える

「へ？」

予想外の言葉にあっけにとられる。

「そ、それってどうこいつ意味かしら？」

「意味ってなんだ？」

「ほり、私が言うのもなんだけど、私たちつてある意味、女尊男卑社会の象徴みたいなものじゃない？ そんな私たちのことをどう思っているのかな・・・て」

彼の言葉の真意を解りかね、何とか意味を聞こうとする

「ああ、別にどいつも思っていないぞ・・・いや、正確にはそ

の括りで判断する？意味？がないって思つてゐる、と言つたといふのか

言つてることの意味が解らない

「え、ええっと・・・ごめんなさい、分かるように説明してくれる
？」

結局、私は理解できず彼に説明を求める。

「そうだな・・・例えば、俺達扶桑人は世界の人からはどう思われ
ているか知つているか？」

「ええと・・・確か？扶桑人は口数が少なく無表情。自己主

張しないで、言わされたことだけを淡々とこなす？だつたかしら？」

「ああ、世界から見た扶桑人像はそうちらしい、でも扶桑人全員がそうか？」

「ちがうわね・・・」

自分の幼馴染の姉妹を思いだし、否定する

確かに姉の方は扶桑人像のまんまであるが、妹の方はマイペースきまわりなく、扶桑人像からは遠くかけ離れている

「口数が多い奴もいるし、表情豊かな奴もいれば、自己主張が激しい奴もいる・・・全ての扶桑人が世界の人が持つ扶桑人の印象の人物ではないわけだ」

「確かに・・・」

「前線にいる兵の持つEIS操縦者の印象と言えば？いつもは威張っているくせに、いざというには役に立たない御嬢様？と言つた処だろ？」

「う・・・・

やはりそつかと少し落ち込む

分かっていたことだがそれでも少し胸が痛む

「だが、実際は全員がそうなかつて言われるとそつでもない。中にはひやんとした連中もいる」

彼は言葉を続ける。

「要するにIS操縦者であるからと書いて？更識？個人を嫌う理由にはならない。付き合って、話してみなければその人がどういう人物なのかなんて分かりはしないしな」

「え……」

「所詮、IS使えるかどうかなんて、個人の才能の一個に過ぎない。大事なのはIS使えるかどうかじゃない……。その人間が何を思い、どう行動するか？　だと俺は思っている」

「…………」

彼の言葉に私は何も言えなくなつていた
す」「……

その一言しか思いつかなかつた。

『所詮、ISを使えるかどうかなんて、個人の才能の一個に過ぎない。大事なのはISを使えるかどうかじゃない・・・・・ その人間が何を思い、どう行動するか? だと俺は思つてゐる』

彼の言うとおりだ

大事なのは力を持つてゐることじやない。

何を考え、どう行動するかだ。

それによって人は決まる・・・・・

例えＩＳを使えようが、行動した結果が評価されなければ、人は評価されない。

彼の横顔を見る

その表情からは彼が何を考えているのか読み取ることはできない。

「ねえ、」

「なんだ」

「いいえ、『めんなれ』…………なんでもないわ」

私は？あること？を彼に聞くつとしたが…………やめた。

少なくとも私はまだ？それ？を聞けるほど、彼とは親密な仲ではない。

「せうか

深くは追求してこない。

彼はなぜ戦っているのか、何のために、どうして？

聞いてみたいとも思った。

けれど、

一番聞いてみたいと思った事は・・・・・・・

?ブリュンヒルデ?が憎いか
・
・
・
・
・

その彼の青く澄んだ眼は今も空の仲間たちを見つめ続けている

その青い瞳に、この世界はどう映っているのか・・・・・・

今の私には分からなかつた

やつと、メインになりました

今まで主人公「らしき」と何もしてません、優刀。

これから、ちやんと主人公をさせたいと思います。

この分だとEIS組、いつだせるんでしょうね

それと、感想を書いてくださった方々、貴重な意見の数々ありがとうございました。

皆様から頂いたご意見を参考にこれからも頑張って書いていきたいと思います。

皆様から「」指摘いただいた一夏の処遇なんですが、まだ決まっていません。

出すなら性格は原作一夏のままどうにか出したことは思っていますが。

いつそのこと・・・だすのやめようかな？

それを含めて検討中です。

感想や、要望などは隨時受け付けておりますので、気軽にお願ひします。

以上シユウ禅でした、ではまた次回！

E p - 07 国家代表（前書き）

Ciao! とこ'づわけでビリも、ショウ禅です

今日は割と技術的な話になっています。

それではまづぞー！

「緋村少佐、少佐はお忙しうなされますか？」

大将対戦の後、何回か模擬戦を行い太陽が我々の頭上まで上がつてきた頃に訓練は終了。

周りにいた整備中隊の整備兵がストライカーコーナーを格納庫へかたずけ隊員が隊舎に戻っていく中、本日の食事当番である下原が訪ねた。

「そうだな・・・悪い下原、これから整備班長のとこ行かなきや
いけないから、何か適当につまめる物を作つて置いてもらえるか?」

「分かりました。じゃあサンドウィッチか何かでいいですか？」

「ああ、頼む」

「（）めんなさい定子ちゃん、私の分も作つといってくれる？」

す

るといつの間にか人の隣に来ていた、フェデリカが申し訳なさそうに下原に頼んだ

「え・・・中尉の分もですか？」

「ええ、これから私は格納庫にいもつちやうかりな

「分かりました」

「ああ済まない下原、私も頼む」

「ラル中尉もですか？」

「ああ、私は自分の銃のメンテをしようと思つてな。」

「分かりました。作つてテーブルの上に置いておきますね」

「ああ、頼む」

下原はやうこいつは強すぎ。さうと云ふと向かっていった

「[アタガニ] やんじいナよね~」

去つていぐ下原の背中を見ながらフローティングは弦く

「ああ、料理洗濯掃除が出来て器量よし、まさに扶桑撫子の鏡だな」

ラルがうとうと領を同意する

下原定子、扶桑国空軍軍曹で義勇統合戦闘飛行隊に所属する新人三人のうちの一人。

元はリバウ航空隊所属のウイッチで竹井や坂本の下で経験を積んでいたが、義勇統合戦闘飛行隊発足時に？索敵能力の高い夜間戦闘もこなせる優秀なウイッチ？として引っこ抜いてきた。

戦闘技能はハルトマンやマルセイコに一歩劣るもの何事もそつなくこなし、大人しい性格ではあるが他人との協調性も高い事から組む相手を選ばない。

敢闘精神旺盛なウイッチが多いこの部隊では彼女たちの背中を守る心強い優秀なウイッチである。

「ホント、将来いいお嫁さんになつそうだよな」

そういうて二人に同意する

「…………へえ」

「…………ほお」

なぜだかわからないが一人は意地の悪い笑みを浮かべ、近所の主婦の井戸端会議よろしく、ひそひそと話し始める

「聞きました奥様？ 彼つてばまた無意識に言つてますわよ…………」

「

「まったくこれだから困るんだ扶桑のウイッチは…………」

・・・・天然ジゴロとか、女の敵とか聞こえるが、俺には聞こえない

「まあ、彼女の料理は後のお楽しみといつじでせつせと行いり」

いつまでも滑走路のど真ん中に立っているわけにもいかないのでひそひそ話している一人を促し格納庫へ向かつた

「それにしても彼女すごいわね」

向かってる最中、フェデリカが何ともなしに呟く。

「彼女？・・・ああ、更識か」

「ええ・・・彼女、あの年でオラーシャ連邦の代表よ？しかも自由国籍権を取得してのオラーシャ代表・・・ただモノじゃないわね」

「そんなにすごいのか？ 彼女。」

いまいちその凄さにピンとこないラルが訪ねる。

「ええ・・・元々 IIS のテストパイロットって、その IIS との相性がいい人物を私たちの年代から選ぶの」

「そうなのか？ 普通テストパイロットと言えば経験豊富な高い技量を持つベテランがやるものだろ」

「ええその通りなんだけど・・・IIS の場合それができないのよ。アラスカ条約のせいで」

まったくばかばしいわ、と呆れたようにため息をつくフローテリカ。

「アラスカ条約でI-Sを保有する世界各国はI-Sに関する情報の全面開示を義務付けられている。例え開発中の機体であろうが、開発中止を言い渡されて廃棄される機体だろうが常にそのデータを開示しなくちゃいけないわけ」

「なるほど……」

「兵器開発において開発中の機体のデータを開示するなんてご法度。他国に技術を盗まれるばかりか兵器そのものの優位性が失われるつて訳か……」

「そういうこと」

「確かに……」

フューテリカの言葉に同意する。

いつの時代も情報といつのは大事である。特に戦争においてはそれが顕著だ。いつどこどこに敵がせめて来るとか、敵の兵站の場所はどうにあるとか分かっていれば対策の取りよつがある。

たつた一つの情報が多くの人を救うこともあれば、命を奪うこともあるのだ

その中でも新兵器開発においては情報の漏えいといつのは命とりである。

新兵器開発において一番重要なことは敵の兵器より優れている兵器であることが絶対条件である

その絶対条件が情報漏えいによつて対策を取られ優位性を失つてしまえば終わりだ。

実際、過去の戦争では敵側に味方側の兵器の情報が洩れ、対策を取られてしまい劣勢に立たされた例は多々ある

「そこ」で原則あらゆる国家から干渉を受けない IIS 学園でデータを取ることにしたのよ。あそこなら少なくとも 3 年間は誰も生徒に手出しきれない。その生徒が得たデータも呪り、国家は生徒の同意がないものはそのデータに触れることができない。」

「なるほどな・・・」

「ま、要するに大勢の専用機持ちと呼ばれる代表候補生は高い技量を持つているからテストバイロットに選ばれたわけじゃなくて、少し IIS 適性が高かったから選ばれたわけよ」

「でも、更識は違うわけか・・・」

「ええ、代表候補生は国家または企業が選ぶけど、彼女の場合その所属を自由に選ぶ事が出来るの。」

「自らがその所属を決める事ができるか・・・・・すこいな

「ええ、よっぽど操縦者の技量が高くないと選ばれないわ」

そんなふうに話をしていると義勇統合戦闘飛行隊が使用している第
三格納庫の前につく。

中に入ると左右にストライカーコニットが俺たちを出迎えるよつこ
並んでいた。

ストライカーコニット・・・・

「土田曹長、ストライカーユニットの整備要望リスト持つてきまし
ウイッチ達の魔法力を魔導エンジンと呼ばれるもので増幅し、駆動する飛翔ユニット。

発表されたのはISと同時期であつた為、その性能差から当初、航空戦力の主力となることは敵わなかつたが、使えるのがウイッチのみという制約があるものの、男子でも女子でも魔法力があるものなら扱え、何より既存の兵器よりも安いコストで生産出来、ISには及ばないものの優れた機動性を發揮した為、開発が細々と続けられた。

その後コストパフォーマンスに優れた兵装として、ISの予備兵力の名目で少しづつ配備され始めた。

そしてネウロイとの戦争が始まるとISの兵器としての欠点が次々に露呈、その立場は一気に逆転し、現在ではネウロイとの航空戦の主役としてこの大空を駆けている

た

「わざわざすいません、緋村少佐。ご足労いただきありがとうございます」

中に入り、ストライカーコニットの整備をしていた土田曹長にリストを渡す。

「班長、奥借りるわね~」

「ええ、構いませんよ」

フェデリカは曹長に許可を取るとコニットが整備されている場所のさらに奥の少し広まつたスペースへと駆けていく。

そのスペースには大きな台座が一つあった。

そのうちの一つの前にフェデリカは立つと右腕を突き出し、目を閉じ右手のバンブルに意識を集中する

「行くわよ、テンペスター」

パアツ、とフェデリカの周りを光が包む。

その光が晴れると、そこには赤い装甲を纏つたフェデリカがいた。

「いつみてもす”」い光景だな

ラルは今の光景に感心したように言葉を漏らす。

それはそうだろう。

人が光に包まれたと思ったらそこに機械を纏つた人間がいるのだ。
驚かないわけがない

第三世代型IS 『テンペスター・ロッジ』 『赤い嵐』

ロマーニヤ公国が開発している第三世代型ISでフェデリカの専用機。

既存のISよりも一回り小さく細身で、更に専用機、
と同様に他のISに比べて装甲が少ない。

ミステリアス・レイディ
霧纏の淑女

全体的な印象としては航空機の印象で特に脚部と腕部装甲は鋭角的な
なフォルムで無駄のないすつきりとした形をしている。

脚部の側面には可変式の折りたたまれた翼がついており、ストライ
カーコニットの名残とも見れる。

ひときわ田を惹くのは両肩に浮かぶと非固定浮遊部位《アンロック》・

ユニットとスカートアーマーだ。スカートアーマーは後方にストライカーウィングに酷似した二つのブースターが伸びて機体が高機動型なのがよくわかる。

アンロック・ユニット
非固定浮遊部位ブースターからは従来の航空機の翼のような翼が伸び、折りたたまれている。その姿はいつか空を駆ける日が来るのを待つ猛禽類のようだった。

「すごいわね・・・これがドッリオ中尉のEIS?」

ふと後ろから声がして振り向くといつの間にか来ていたのか更識が立っていた

「ええ、 そうよ。 第3世代型EIS『テンペスター・ロック 赤い嵐』よ。」

そういうてフューテリカは台座にテンペスタを預けると装着解除して
ひょいとHISから飛び降りる

「もしかして機体は完成しているの？」

「ええ、？ 基本的な部分？ はもう完成してるわ。けど特殊兵装の方
がまだよ」

「そりへ、ちなみにその特殊兵装って？」

「教えないわ」

あつぱりと言い切るフューテリカ。

「そり、残念」

とはいものの、その答えを予想していたのか更に知識はあまり残念そ
うな顔をせず、クスリと笑うだけだった。

「当たり前でしょう？ いくら同じ部隊の仲間とはいえ、他国の代
表にそこまで？無条件？で教えるわけにはいかないのよ」

さすがロマーニヤ公国の代表候補

相手には不必要な情報は与えないといつわけか。

俺たちの部隊は様々な国の人間が一致団結して日夜戦い続けている。

けれど、決してお手手つないでみんなで仲良くなってしまつた集団では決してない。

みな共通の目的を持つて集まつた者たちで、強いきずなで結ばれてゐると思つてゐるが、それでも必ず超えてはならない一線というものが互いにある。

「それに、あなたの機体も同じようなものだと想ひなさぢ?」

「私の機体も?」

そういうつてフューテリカは更識の方へ目を向ける

「あの機体、霧纏の淑女(ミステリアス・レイディ)も特殊兵装の方がまだ完全に出来てはいな
いんじやないかしら?」

「その根拠は?」

「機体の装甲が少なすぎるのよ。いくらT-10に絶対防御があるから

と言つて、装甲のないところに絶対防御でも防ぎきれない攻撃が直撃すれば致命傷になる。それなのに敢えて装甲を減らしているのなら、何か別 の方法で機体を守るすべがあるはずよ」

更識はフェデリカの言葉を黙つて聞いている

「最初は防御を無視して機動にリソースを割り振つた大胆な設計なのかと思つたけど、そういう設計ならもつと極端に機動性が高い筈。けどさつきの模擬戦では確かに高機動だつたけど極端な速さではなかつた。だとすれば、左右に浮遊するクリスタル状のユニットが自立して防御シールドを展開するのかと思つたけどそれも違つた。」

「ああ、そつかそつたのか……違和感の正体はそれだ」

先ほどの模擬戦を見て引っ掛けついていた違和感の正体がわかつた。

あのクリスタルだ。

あの時はまだ更識の技量に目が云つていたが、確かにあのクリスター上のものは特に何もせず浮かんでいた。

「特殊兵装が出来ていないつて考えればすべて納得いくのよ。あのクリスタルは何もしなかったんじゃない、何もできなかつた。そして、あなたの機体の特殊兵装はたぶん、攻撃にも防御にも転用できる物なんぢやないかしら?」

そういう言葉を締めるフューデリカ。

話を聞き終えた更識は・・・・・

「はあ、参つたわ・・・降参よ。まさかたつた一度の戦闘でそこま

で見破られちゃうなんてショックだわ

降参とばかりに両手を上げる更識しかし、その顔はあまり残念そうではなかつた

「正解よ、ドシリオ中尉。まだ私の霧纏の淑女ミスティアス・レイディは特殊兵装の方が出
来ていないので。そして特殊兵装も攻撃にも防御にも使える機能つ
ていうのも」推察の通り

「そう、よかつたわ当たつてて」

「ほほ笑むフューテリカ

「でもこれじゃフェアじゃないわ、あなたの機体の兵装も教えてく
れないと」

「いいけど条件があるわ」

「条件?」

「や、条件」

やつこつてフン♪トコカはニヤリと口端を釣り上げる

「一人より二人、三人より四人・・・・お互い、特殊兵装の開発に戸惑っているみたいだし、ここはロマーニヤ、オラーシャ仲良く共に開発と行こうじゃない」

「……………？」

今回はフェデリカさんの話でした。

彼女はオリキャラって思った方には申し訳ないですが、彼女は完全なオリキャラではないです。

一話のあとがきで話した通り、この作品に出てきているウイッチの多くは島田フミカネ氏のサイトに書かれているworld wide seriesが元ネタです

当初は501のメンバーでISとクロスさせようとしたんですが、いくらなんでもSW一期開始時の戦争が苛烈を極めている最前線にいきなり原作の一夏や筈たちが乱入するのは話の整合性が取れず、めちゃくちゃになるだらうなと思いました。

個人的に凝り性で話に一定の整合性がないと嫌なんです

詳しいことは第零章が完結した際に書くつもりですがそんなこんなでアニメのキャラクターはほとんどが出演しないという事態になり、代わりに大将や、フェデリカといった設定上にしか存在しないキャラが出演することになりました。

そもそもSWに出てくるキャラクターは第一次世界大戦で活躍したエースパイロットをモチーフにしており、その数だけで結構います。実際元になったパイロットたちもそうですが、設定だけにしつこいばかりもつたいぐらい彼女たちは魅力的なキャラです。

そんな彼女たちが活躍したりする姿が見てみたいと思つた事もこの作品がこういったオリジナル要素の多い作品になつた一因でもあります。

一つの作品のヒピソードはいすれちやんと書きますが、少なくとも第零章はオリジナル展開で進んでこきます。

ちやんといじで書くべきことを書いておかないと、後で説明不十分なことがこりいろ起きてしまってそつなので。

第零章は後の章を楽しむための土台だと思つてください。

次回から一、二話は彼女がメインの話になるかもしません。

iji最近はijiの悪い点の指摘ばかりしか書いていなかつたので、今後はもう少し彼女たちウイッチを活躍させようかと思つています。

彼女たちのijiの作品での設定などは近い方に上げようかと思つています

最後になりましたがiji意見、iji感想、評価などお待ちしています

以上シユウ禅でした

いつも、ショウ禅です。

ウィッチ達の使っている機材が知りたいという意見がありましたので、登場人物の紹介を作りました。

とりあえず、今までメインまたはサブとして出てきた子達だけです。

（登場人物紹介）

緋村優刀

年齢 15歳 誕生日 6/20
身長 175cm 階級 扶桑国空軍大尉

概要

世界でも数少ない男性のウイッチ。

扶桑海事変より参戦しており、同事変のエースの一人。

性格は穏やかでどんなときもあきらめない芯の強さを持つ。

扶桑刀による近接戦闘能力が得意でその腕前は扶桑でもトップクラス、魔力コントロールも超一流。

部下を束ねる統率力に優れ、戦場では常に冷静沈着、優れた洞察力と柔軟な思考を持ち合わた指揮官としても優秀。

真面目で事務仕事も極めて有能ではあるが、堅物ではない。

ここ最近は補給物資の調達に奔走しており、仕事中毒ワーカーホリックになりつつあるらしい。

容姿は艶やかな黒髪だがツインテンドにはねている。蒼く澄んだ瞳が印象的な少年。

戦闘時は制服の上着を脱ぎ、魔法纖維で编みこまれた白い羽織を羽織る。

ウイッチの義姉がいる

ポジションは前衛

固有魔法

「大気操作」

ハルトマンと同じ自身の魔力で大気を操ることができ。しかし、その威力は桁外れで、大気中の魔力を操作することによって雷を発生させることも可能。（その場合、魔法力の消費も比例して多くなる）

使用武器

MG54

扶桑刀（陸奥守吉行）

ストライカーユニット

十一試艦上戦闘脚

メッサー・シャルフ Bf109E

（扶桑海事変にて扶桑に持ち込まれた新型エンジンDB-601搭載の先行試作型のうちの一機。）

- - - - -

加藤武子

年齢15歳 誕生日9月28日

身長 163cm

階級 扶桑国空軍中尉

概要

扶桑空軍きつての名指揮官。

欧洲の大規模怪異発生の前年に起きた扶桑海事変において、江藤敏子中佐による指揮の元、優刀と共に飛行第一戦隊に所属し勇戦。江藤中佐の下で指揮官としての経験を積む一方で、自らも扶桑刀による居合い技「無双神殿流・空の太刀」を用い2機のネウロイを撃墜している。

この頃から既に個人戦績には興味がなく、部隊単位での戦術を摸索していたようである。

同隊に所属した穴拭智子少尉（当時）とは戦友。また、加東圭子少尉（当時）を加え「扶桑海三羽鳥」と賞された。

基本に忠実で堅実な戦法を重んじる反面、欧洲の機材や戦訓を積極的に吸収するなど、進取の気性も持ち合わせている。

穏やかな性格だが、優刀曰く、「怒らせるとやばい」らしい事変後、優刀の副官として共に欧洲へ派遣され、彼を陰に日向に支えている部隊の縁の下の力持ち。

最近の悩みはどつかの誰かさんにストライカーゴニットが日々壊されること

ポジションは後衛

使用武器

扶桑刀

MG54

ストライカーゴニット

長島飛行脚 キ43一式戦闘脚 隼

固有魔法

「三次元空間把握」

- - - - -

グンデュラ・ラル

年齢 15歳 誕生日 3/10

身長 169cm 階級 カールスラント空軍中尉

概要

義勇統合戦闘飛行隊に所属するカールスラント空軍ウイッチ。はさばさばした姉御肌で、どんなに厳しい状況でも笑みを忘れずに周囲を安心させる豪胆さを持っている。

見越し射撃の名手で、芸術的な空戦技能を持つ。

また指揮官としても優秀で、以前はJG52の中隊長をしていた。

義勇統合戦闘飛行隊では主に前衛を担当

使用武器

MG54

ストライカーグニット

メッサーシャルフ Bf 109E (黒の13号機)

- - - - -

デミー力・S・ジエンタイル

年齢 15歳 誕生日 12/6

身長 174cm 階級 リベリオン合衆国中尉。

概要

リベリオン空軍の精銳、第8空軍出身。

氣怠げな振る舞いが目立つが、その実は即断実行、意氣と情熱の熱血魔女。

抜群の体力と動体視力をもち、それは戦闘や趣味のボクシングでも遺憾なく発揮されている。

戦闘スタイルは単純明確、敵を見たら突っ込んで、撃つて、落とす。

義勇統合戦闘飛行隊では主に遊撃を担当

使用武器

レミントンM870

M249

デザートイーグル50AE

S&W M500

ストライカーユニット

ノースリベリオン P-51B (39-86913号機)

- - - - -

フェデリカ・N・ドツリオ

年齢15歳 誕生日4/24

身長 166cm 階級 ロマーニヤ空軍中尉（赤ズボン隊

?パンタローニ・ロッシ?）書類上はその他三軍から独立した指揮

權があるロマーニヤ公室直屬精銳部隊。

概要

ロマーニヤ公国 の ウイッチ。機械好きで技術者を志望し、ストライカーエリート技術者を目指し軍でストライカー等の研究に従事していたが、後に魔法力が発現し、試験的に受けた飛行訓練で高い空戦ウイッチとしての適正が判明。技術学校から士官学校に入校し直し、

航空ウイッヂへの道を進んだ。

技術職へのこだわりから、正規教育を受けて少尉に任命された後、戦闘部隊には入隊せず民間メーカーのテストパイロットとなつた。そのメーカーがIS開発も行つてゐるメーカーで、技術者として興味があつたのか、ISをふとしきつかけで触つてしまつた。その際高いIS適正が発覚しそのままISのテストパイロット、代表候補生へと駆け上がつていった。

明るく陽気な性格だが冷静な一面も持ち合はせており、要所要所で的確なアドバイスを行う。

余談だが、赤ズボン隊在籍時、前線への戦意高揚等の目的でウイッヂの「せくしーカレンダー」を企画。

「高揚し過ぎちゃうから危ない」という理由でロマーニヤ公からやんわりと止められた。

これに対し一部の過激派青年将校の間でクーデターが計画されたという噂がある。

義勇統合戦闘飛行隊では遊撃（ジエンタイルの一一番機を担当）

使用機材

MG151/R

ストライカーゴニッヂ
ファロットG55 チェンタウロ

IS

第三世代IS　『^{テンペスター・ロッソ}赤い嵐』

オリジナル武器紹介

MG54機関銃

カールスラント軍が正式採用した最新機関銃。カールスラントの名銃ラインメタル MG 42 に連なる機関銃で分隊機関銃から車載用に至るまで幅広く使用されている。優刀や武子はその性能の高さから自国製の機関銃よりこちらを使用している。優刀曰く？こっちの方が性能がよくて、デザインが好き？らしい（デザインはMUV-LUVオルタの戦術機 EF-2000タイフーンの装備、Mk-57中隊支援砲）

MG151/R機関砲

ウイッヂが使用する専用の機関砲。ウイッヂはもともとあまり重量のあると武装が持てないということが問題視されており、それを克服するために開発された。元は第一次世界大戦の航空機に搭載されていた機関砲、MG151を現在の技術で再設計し、ピストル

グリップや電気発火式のトリガー、サブグリップ等を装着し手持ち式に改修した。型式番号のRは？再生？の意味

といつわけで、登場人物紹介でした。

いかがでしたか？

この登場人物紹介が作品を面白くする隠し味となってくれれば幸いです。

あと、劇中で彼女たちが使っている武装なんですが、一部の子達は第二次世界大戦中の武装をそのまま使っていました。

ごめんなさい、作者の調査不足です。

後、ストライカーコニットなんですが、原作通り第一次世界大戦中の機体をモデルにしています。

もちろん性能自体は2039年代の技術で作られているため原作とは比べ物にならないほど高性能ではあります。

これは本篇に入る必要のない、比較的どうでもいい作者の完全な裏設定なんですが、

白騎士とストライカーコニットがその性能を比較された際にある一人の試験官が、「ISとストライカーコニットでは一F-22? ラブター? どゼロ戦くらい差がある」と言われた事に腹を立てた扶桑のストライカーコニット開発陣が後に扶桑軍が正式採用する際、意趣返しにゼロ戦よりも前の機体、96式艦上戦闘機をモデルにした

96式艦上戦闘脚を開発したという事がきっかけで、軍部から戦闘機の活躍の場を奪つた最新鋭とされるエリへの皮肉と、もう一度戦闘機が大空を舞う日を夢見て、過去の名機の名前を付けるといった慣習が世界に伝わった、といった裏設定をがあつたりします

まあ・・・実際どうでもい話なんですけどね

現行のラプターとかF-2とかもスタイリッシュでかっこいい良くて好きなんですが、ああいう第二次世界大戦の機体には今の機体にはない、古いが故のかつこよさがあつて好きです。

時期的にはちょっと悪いかなとも思いましたが、少し作者の息抜きも込めて作りました

引き続き、「意見」感想をお待ちしておりますので、ガンガン送つてきてください。

作者の励みになります。

以上シユウ禅でした

いつも、ショウ禅です。

今回もフューテリカさん回です

それでほづべき

さすがに今の話は部隊の指揮官として看過できない話だ

「何かしら優刀？」

フェデリカはとんでもない条件をつきだしてきた。

「ちよっと、待てえっ！？」

「お前、自分が言つてることの意味わかつてて言つてるんだよなー。？」

「ええ、そりゃ。当たり前じゃない」

「それならいいけど、一応俺にも分かるように話してくれるか?
場合によってはさすがに俺一人でどうにかできる問題じゃないな
る」

「ああ、『めんなさい』。あまりに突飛過ぎたわね」

さつきまでテストパイロットやら情報がどうやらの話をしていた直後の話だ。

普通に考えればいい手かもしれないが、二人は国家代表という国を背負っている人物たちだ。個人がどうこう、というレベルの問題じゃない

「では説明するわね・・・まず第一に私が使っている機体が歐州統合防衛計画『イグニッショング・プラン』の次期IS主力機選定のトライアルに参加しているのは覚えているわよね」

「ああ、そういうばっさだつたな」

そういえば彼女がこの部隊に配属された当初、そんな説明を受け

た記憶がある。

「今の所、他にトライアルに参加しているのがブリタニアのティ
アーズ^{モテル}型と、カールスラントのあの?アホ部隊?が使っていたレー
ゲン^{モテル}型の二つ」

「・・・・あいつらか」

「・・・・・」

フェデリカの言葉に一瞬嫌な記憶がよみがえり、俺とラルは顔を
歪ませる

そんな俺達の事を無視しフェデリカは話を続ける

「で・・・今のところ特殊兵装の開発に一步リードしているのが
ブリタニアのティアーズ^{モーテル}型で言われているんだけどほんきつ言って
何処の国もいまだに実用化の日処が立つてないの」

「なるほど・・・で、お前は一つの国を出し抜いて先に特殊
兵装を完成させて、次期主力機に採用させたいって訳か」

フューデリカの言いたいことが解ったのか納得したという顔をする
ラル

「うがうわ」

ラルの言葉を即座に否定する

あ、ちよつとラルがふてくされた

「私自身もそうだけど、ロマーニヤ軍と開発メーカーはそこまで
今EIS開発に本腰を入れてるわけじゃないよ。」

「…………その割には毎日こうじつてこる『嘘』があるが」

「ううとふうとしている、珍しいな

「ハル拗ねるなよ。似合わな」「フンフン……」「イタあつー?」

ゲシツ……

思いつきつつ足を踏みつけられた

「はいはい、一人とも夫婦喧嘩は後でやつてね・・・・・で
話を戻すけど、はつきり言ってこれから先、歐州はＩＳ開発には力
は入れられなくなると思うのよ」

「ま・・・・まあ、そりだらうな」

踏んづけられた足をさすりながら考える。

今の現状で金が馬鹿みたいにかかるＩＳ開発を强行しようなんて
考える国はまずないだろう。

それ故に、各国のＩＳ開発部門やら政府から助成金をもらっている
会社は何とかＩＳに戦果を上げさせ、開発の凍結を防ごうとして
いるのだろう。

・・・・おかげで前線の俺たちはいい迷惑だが

「じゃあ、なぜお前はそんなに急いで特殊兵装を完成させようと
しているんだ？ 聞いている限りだとあまりイグニッショングラン
に乗り気じゃないみたいだが？」

「個人的にイグニッショングランでヨリの国の中が選ばれよ
うが興味ないんだけど、政府から助成金が出てこないと開発させ
ておきたいシステムがあるのよ」

「システム？」

「そ、そのシステムが私の機体の特殊兵装で、そのシステムを開

JASDF 発することが私やロマーニヤ軍、ファロット社、ていうよりは、統合先進打撃航空技術開発計画にとって一番重要なことなのよ

「ああ、そういうことか」

JASDF 統合先進打撃航空技術開発計画の名前を聞いて納得する。

JASDF 統合先進打撃航空技術開発計画・・・・・・

欧洲へのネウロイ侵攻の前年に扶桑とヒスパニアに大規模な怪異が発生した

後に言われる『ヒスパニア戦役』と『扶桑海事変』である。

この二つの事件後、各國はネウロイを人類共通の天敵として認識し、今後ネウロイが発生した場合、各國が共同でこれに対応することと決定した。

そうして連合軍が結成されていく中で推し進められている計画の一
つが統合先進打撃航空技術開発計画である。

元々の計画の内容は各軍の次期主力航空兵器の開発を一本化し、各國の軍の要求を満たせる共通の機体を開発する事だった。

しかし、計画の要である次期主力航空兵器の最有力候補であつたISが『扶桑海事変』で兵器としての欠点が次々と露呈し、各國が防衛戦力の中核をISから他の航空兵器に変更せざる負えない事態に陥つた為、計画は変更を余儀なくされた。

代替プランとしてストライカーコニットを各國は次世代航空主力兵器の開発機種に選定したのだが、ここでも問題があつた。ISのように生産数が限られておらず、ストライカーコニットは他の一機に比べ比較的安価に生産でき、高い費用対効果を見込める優良な機体ではあつたが、積載量が航空戦闘機やISと比べて圧倒的に少ない、一つの機体に比べてアビオニクスや火器管制能力が著しく低い、上記二つの要素から他の一機種のような多用途性が持つことができ

ない、いつた問題があつた。

・・・・・
マルチロール
計画は多用途ストライカーコニットの各国の基本仕様の構築を目的とした概念実証研究計画といつても過言ではない。

確かにストライカーコニットの問題点はアビオニクスと火器管制
能力をつけて積載限界をアップさせるだけで解決できるので、航空
戦闘機はともかくEISの問題点克服より遙かに現実的である。

ストライカーコニットであれば基本単価が安く、たとえマルチロ
ール化による機体の単価が上昇したとしても他の機種よりも安く済
むというデメリットらしいデメリットにならなかつたというのもス
トライカーコニットを選んだ理由なのだろう。

「だったら最初から統合先進打撃航空技術開発計画の一環つていつてくれ。言つてくれたらこんな回りくどい説明をしなくて済んだろ」

「何言つてゐるの、すっかり忘れていたくせに。聞いたら武子が怒るわよ。」

「まったく・・・・・・でも、これで更識がなんでもうちに来たのか納得がいつたよ」

「え、それってどういふことかしら?」

今まで黙つてフェデリカの話を聞いていた更識が俺の言葉に疑問を持つたのか口を開く

「つかの部隊、?書類上?は義勇統合戦闘飛行隊は統合先進打撃航
空技術開発計画の直轄部隊なんだよ」

「ああ、そういうればそういう情報があったわね」

更識が納得したようにポンッと手を叩く。

いろいろあって俺たちが義勇統合戦闘飛行隊設立することになつた際、上層部から多国籍部隊の前線での詳細な運用データがほしいという通達があつたのだ

データを提出する代わりに補給の方を優遇してくれるという結構な高待遇であつたので、この後どんな無理難題を言われるのかと当初は警戒していたのだが、実際は部隊が統合先進打撃航空技術開発計画の為に何か特殊な任務などには着いたことがなく、定期的にデータを寄越すよう連絡が入るのみだったので記憶の彼方に追いやられていた。

この計画責任者が更識の霧縛の淑女の特殊兵装のデータがシステムミステリアス・レイディ

の開発に使えると踏み、この部隊に送ってきたのだろ。

「と、まあそんな訳でオラーシャも計画に参加しているから、私が彼女に共同開発を持ちかけてもOKな訳よ」

「なるほど……」

ラルが納得いったと頷く。

「で、どうかしら？　更識さん、私に協力してくれるかしら？」

更識は少し考える素振りをして……

「よかつたわ。じゃあこれから宜しくね、えと……・・・・・ 楠無
つて呼んでも？」

フェデリカは微笑み、握手を交わす

そういうて右手を差し出す

「いいわ、協力しましょう」

「ええ、構わないわ。私もフェーテリカって呼ばせてもらひつか」

どうやら、話は纏まつたようだ。

こうして本日より「J-J、JG52基地・義勇統合戦闘飛行隊格納庫
でIS第三世代機?赤い嵐?^{テンペスター・ロッソ}ミスティアス・レイディ^{ミスティアス}の霧纏の淑女?^{レイディ}の共同開発がスタートしたのだった。

また小難しい技術が並りの「」のところ話になってしまった。

肝心のフューテリカのHSの特殊兵装がなんなのか明かすことができませんでした。

「ごめんなさい」・・・・・

次回ではさすがと明らかになりますので楽しみにしていてください。

ヒントを上げるとするならば「ステリアス・レイディの特徴はなんのか、フューテリカさんは何？」

とこう感じです。

・・・・話が一向に進まないですね、速くHS組を出したいんですけどやつぱりきちつと書きたいので・・・

最後になりますが「」意見「」感想、この作品を見てふと思つた事などを待ちしております！

出来る限り、すべての感想には返信をきつと書きたいと思ひます！

以上、シユウ禅でした

どうもシユウ禅です

今回、つににあのキャラが出てきます

それではどうぞ

「それじゃあ、さっそく？ミステリアス・レイディ霧纏の淑女？の特殊兵装を教えてくれるかしら？」

互いに握手を交わして早々にフェデリカは本題を切り出した

「そつちから教えてはくれないのかしら？」

「ええ、ちょっと私の機体のはちょっと変わっていてね、まずあなたの機体からの方が分かりやすいでしょう？」

「いやかに笑つて答えるフランチリカ

「これ以上問答しても意味がないと感じたのか、更識は早々に聞き出すことを断念し、

「はあ・・・・・わかつたわ、まずは私から説明するわね」

「ようがないとばかりにため息ひとつ、説明を始める

「まあはおやうこ・・・・・隊長、HIS第三世代は何を目標に開

発が進められているのか知ってる?」

「ええっと・・・確か、操縦者の操縦者のイメージ・インターフェイスを用いた特殊兵器の搭載っていうのが目的なの。例えば、昔アニメでやつてたファン○ルみたいなわゆるトングモ兵器ね」

いつもや読んだIS関連の論文の一文を思い出し、答える

「そ、正解。第三世代は操縦者のイメージ・インターフェイスを用いた特殊兵器の搭載っていうのが目的なの。例えば、昔アニメでやつてたファン○ルみたいなわゆるトングモ兵器ね」

「トンガモ兵器つてお前 」

「私の？霧纏ミスティアス・レイディの淑女？はその中でもかなり特殊でね、水を自由自在に操ることができるのである能力なの」

「な 」

「 またえらいトンガモ兵器を作りうとしたものだな」

ラルが呆れたように息を吐く。

「ふふ、自分で言つのもなんだけど結構トンガモ兵器でしょ？」

「す」いわ！　まさかそんな発想が出てくるなんてビックリよ！

呆れたような顔をしている俺とラルの二人に対し、フェデリカは

いつの間に書いたんだ？

ちなみに扇子には『水芸』とべらく達筆な字で書いてあった

パンツと開いた扇子で口を隠し、上品に微笑む。

もつと詳しく聞かせて…」

喜色満面で更に詳しく聞くと更識に詰め寄る

更識はフューテリカのその様子がうれしかったのかにいやかに笑みを浮かべると更に説明を続ける。

「霧纏(ミスティリアス・レイディ)の淑女？」

の左右のクリスタルはHSのエネルギーを伝達するナノマシン製造プラントなの、そこで作られたナノマシンが空気中の水分を利用して水の鎧と楯を形成する。そしてその水は攻撃にも使える・・・予定よ」

「まだ完成していないのではないときっと言えなかつたのだろう、最

後の方は少し自信なさげだった。

「まだ兵装のシステム構築が完全に出来ていなくて、待機静止状態の形状維持ができないの、」

「なるほど、それで実戦では使われていないって訳か・・・」

「ええ、待機状態の形狀まで私の方で制御していたら、いくらなんでも私の方が疲れちゃうのよ」

「だから、当面の問題はいかにイメージインターフェイスを介さないで静止状態を維持できるようになるか、っていうところね。」

「そう・・・でも、大丈夫。二人より三人、三人より四人。扶桑のことわざでもあるように二人寄れば何とやら、私たちで完成させましょ？」

「フェデリカ・・・」

「・・・お前、いつたじドリード扶桑の」とわざなんか覚えたんだ?
？」

「ふふ、内緒」

もうじつ微笑むフリテリカ

相も変わらずほほえみは明るく、人を元氣にせせる。

「じゃあ、今度は私の番ね。」

もうじつと、何やらフリテリカは右座からコンソールをひっぱり出ってきて素早くキーを叩き始める。

数瞬後、フェデリカの周りに空中投影型のディスプレイが現れ、次々と細かいデータが表示される

「……私の機体、テンペスター・ロッソ赤い嵐? の特殊能力はおおざっぱに言えば『魔力行使』これに尽きるわ」

「・・・・え、それだけ?」

「ええ、そう」

更識が何とも間の抜けた顔をし、一人の間に微妙な空気が流れる・・・

「あ、ああ、ごめんなさい。その、ええ・・と、なんというかあまりにも予想外だったから、ちょっとジックリしちゃった」

「まあ、フヨーデリカの言葉だけじゃ、その反応が普通だよなあ・・・」

「まあ、だまされたと思つたりと見てちょうどいいな。 . .
ねえ優刀、あれやつてくれる?」

「はあ、しょうがないな・・・・・」

「そういふとフューテリカは一体どうから出してきたのか分からない
が、廃棄されたストライカーゴニットの装甲板を取り出し、適当な
壇との台を見つけてその上に置く

「さて、こちらにあるのが先日、うちの部隊のあほの飲んだくれ
が破壊してくれましたストライカーゴニットの装甲・・・・・と
いうわけで、はいこれ」

そういうて渡してくるのは一本のダーシの矢。

「はあ・・・・・

おもむろに受け取り、狙いを定めて投げる。

ヒュッ・・・・

矢は装甲板に当たるも案の定弾き返され、床に転がった。

「ま、刺さらないわよね、普通は

「ええ・・・・

「じゃあ、今度は・・・・・優刀お願いね

「りょーかい」

そう言つて、俺は目を閉じ、意識を集中させる。

・・・・いぐゞ、？相棒？・・・・

自身の中に眠る友に心で声を掛ける

次の瞬間、体を青白い暖かい光が包み、穏やかな風があたりに吹き始める

そして意識をダーツの矢に集中・・・・・

そして、やつきと同じように投擲・・・・・

放たれた矢はそのまま、吸い込まれるように板へ・・・

ドンッ！！

なにかが爆ぜる音が格納庫内に響きわたる

「・・・・・嘘」

更識は信じられないといった風に装甲板を見ている。

先ほどまでそこにあつた堅牢そうな装甲板が見るも無残に大穴をあけ、その大穴から後ろの格納庫の壁にめり込んでいるダーツの矢が見えた。

その光景に驚くなといつ方が無理だろ。

「はい、といつわけで分かつてもらえたかしり？」

「え、ええ・・・・要するに魔力は物体の強化に使えるのね？」

いくらか今の出来事にあっけにとられながらも、更識は納得いつたという風に呟く。

「そういうこと」

ウイッチは魔力で身体を強化したり、障壁を張るほかにもう一つ出来る事がある。

それが、物に魔力を込めるということであった。

魔力を込められた物体は強度が増し、丈夫になる。

それは個人の技量にもよるが大抵、2～3倍ほどは強化することが出来る。中には物質に魔力を圧縮して対象に魔力を徹すことが出来るウイッチもいる。

「・・・・・ま、そんなこんなで搭乗者の魔力を機体、または武装に付与し、機体の性能を上げるシステムが？^{テクノベスター・ロッド}赤い嵐？の特殊兵装と言えるんだけど、一つ重大な問題があるのよ。」

そういうて、言葉を区切る

「・・・・・私たちが魔法を使用するとき、使い魔が魔力コントロールをサポートしてくれるんだけど、IS使用時に魔力を使うとすると、どういうわけかISの稼働率が極端に下がって、動作不良を起こしてしまうの」

「動作不良？」

「ええ、エスって体の四肢の操作はともかく、P.I.C.、情報、通信は操縦者の思考制御じゃない？ その思考制御システムが使い魔の思考まで読み取っちゃうのよ」

「なるほど……」

「実際、私のほかにもIS適正の高いウイッチが何人もいて、上層部はウイッチの装備品としてISを運用しようとしたんだけど、これが原因で断念したのよ」

「魔法を使わないでEISを使用しようとは思わなかつたの？」

「もちろん、上層部も一度、通常ウィッチにはストライカーゴースト、その中でも優秀で適性のあるウィッチにEISを支給しようつて考えたわ・・・でも私も含めて前線のウィッチは一度も戦闘で使おうとは思わなかつたわ」

「どうして？」

「ええっと・・・・どう説明すればいいのかしら・・・EISは四肢の稼働をするとき、皮膚の電位差を計測してEISのコアが判断、四肢を動かすじゃない？だから一回コアを介してっていうプロセスを踏む分、どうしてもタイムラグが生じてしまうのよ」

ナウリット本日何度目かのため息をつくフェーデリカ。

「ああ、もうこいつとか」

今度は俺がぽんと手を打つ番だつた

「更識は何か武道やつているか?」

「ええ、家柄いろいろとね、やつてるわ

「じゃあ、たまに感覚が鋭敏化する時つてないか?」

「ええ、・・・・・ああ、そういうこと...」

「うやう、櫛無も理解したよつだ。

要するに、IISを使つてゐる状態で四肢の動作をするときに一回、コアでの処理といつプロセスが入つてしまつたため、どうしても遅くなつてしまつのだ。IISに搭載されてゐる高性能センサー、ハイパー・センサーで特に感覚が鋭敏化してゐる状態だと、その差が一気に出る。元からIISで訓練してゐる者にはあまり感じれない、また

はしょうがない差と取られてしまうが、身体強化で思考と反射のタイミングが極めて少ない状況に慣れているウイッチにとっては大きな差で、反応が鈍いと感じてしまつ一因なのだろう

「まあ、いろいろ話が脱線しちゃつたんだけど。要するにウイッチの能力を最大限發揮できるシステムが私の機体の特殊兵装っていうわけなの」

「なるほどね・・・ウイッチ専用IOSかあ」

更識は考え込むように手をつぶる

「その過程でウイッチでも使えるイメージ・インターフェイスの開発が一統合先進打撃航空技術（JASFT）開発計画の目的のひとつなのね」

「ええ、ストライカーコニットの特性上、手での操作が困難だから火器管制、量子変換システムの操作はイメージ・インターフェイスがストライカーコニットには最適なのよ」

「なるほど・・・・確かにイメージインターフェイスを使え

たら楽ではあるな・・・

「というわけで、私たちの目的は特殊兵装とウイッヂでも使えるイメージインターフェイスの開発っていうことね」

「話は終わりとばかりにフェデリカは手元にあったコンソールを元の場所に戻す。

「ん？ もうこんな時間か・・・やれやれ、銃の整備に来たはずがいつの間にかIDSの講義を受けてしまったな」

ラルの言葉にふと格納庫においてある古臭い時計を見る。

時刻は午後一時、

・ 結局俺たちはフェデリカの話を一時間近く聞いていたのか・・・

「やれやれ、貴重な昼休みを潰しちゃったな」

「あら、結構有意義な昼休みだつたでしょ？」

「昼飯を食えていたらな」

「あら残念」

午後からはまた訓練がある

その前に少しでも腹に食べ物を入れておこうと思つて、オフィスへ
帰る前に格納庫から出て行こうすると・・・・・・

「済まない、こちらに緋村少佐はいるか？」

整備員たちの声が彼方此方から飛び交う格納庫の中でもその毅然とした声は綺麗に澄み渡り、奥の方にいた俺達にも聞こえていた

「ん・・・・この声はバルクホルンか？」

ラルがその声の主に見当がついたのか確認するように入り口を見る

「本當だ、トゥルーデだ・・・・おーい、トゥルーデ」

その声の主を見つけその名前を呼ぶ。

その呼び声に気付き、一人の少女がこちらに向かつて歩いてきた。

「やはりここにいたか」

毅然とした口調でカールスラント軍人の鏡のような彼女の名前は
ゲルトルート・バルクホルン

ラルと同じくカールスラントJG 52に所属するウイツチで飛行
隊長を務めている。

彼女とは去年の4月にこの基地に派遣された時に知り合い、同じ
中隊長という立場からすぐに意気投合し互いによく相談する間柄に
なっていた

「どうかしたのか、お前が人のことを探しに来るなんて珍しいな」

「いや、午後は我々第一飛行隊の訓練ということだったからな。
その細かい調整をと思ってな」

「ああ、そういうえばそうだったな・・・ん？」

「まったく、お前といつやつはほん？」

そこで彼女はこの場に見慣れない人物がいる」と云ひきながらに目を向ける。

「優刀、彼女が例の補充人員か？」

「ああ、更識、自己紹介」

「初めまして、昨日義勇統合戦闘飛行隊に配属されました更識楯無少尉です。よろしくお願いします」

「JG52第二飛行隊隊長 ゲルトルート・バルクホルン中尉だ。
よろしく頼む」

そういうて互いに敬礼を交わす。

「ラルすまない、オフィスに言つたら俺のサンドウイッチ冷蔵庫に入れといてくれ」

「ん、わかつた、行くぞ二人とも」

ラルは察してくれたのか一人を連れて格納庫を出て行つた。

その様子眺めながら、俺たちは格納庫の外に出る

「ふう、やれやれ・・・・また昼飯食い損ねたな」

「ふ、多国籍部隊の隊長はなかなか忙しいみたいだな」

「まったく、猫の手も借りたいよ。……で、どうだ、彼女の印象は？」

そういって彼女がこの格納庫に来たホントの目的を指摘する。

「……気づいていたのか

「ああ、やはり？あの戦い？を経験している以上、彼女が気にならないはずがないからな」

「……やうお前はどうなんだ、彼女のことをビリと思つてい

る」

「…………彼女は？あいつら？じゃない、比べても意味がない」

「よくそこまで割り切れるモノだな…………私も頭では分かっているつもりなんだが」

そういうて表情を曇らせるトゥルーテ

「いいさ…………そこまで割り切れるほど俺も大人じゃないさ…………」

「そうか…………」

それ以上は何も言わない

上に向く…………

最近は雪の日が多いカールスラントの空は珍しく晴れており、

その青い空はどうまでも拡がっていた

というわけで、ついにバルクホルン登場です。
やつとです。

やつとアーメのキャラがメインで出せました。

といつても最後の方だけでしたけど・・・
あとも「これで技術回終了」です。

次回からはちゃんとストーリーが進行します。

・・・・・「最近ハイペースでしたのでこれで少しほスピードを落とせるかな?

最後に「意見」感想をお待ちしています

どいつも、ショウ禅です。

今回はエーリカ主役です。

では、どうや！

「緋村少佐、十時方向にリバウ方面へ航行する敵編隊を確認。その数一十・・・・・」(さういはまだ氣づいていないつです)

私の横を飛んでいた下原が隊長に敵発見の報告をいれる

『了解だ下原・・・・よし、ドラッヘ〇二率いる第一中隊は右から迂回して奴らの側面に攻撃を仕掛けろ』

その報告を受けた隊長はいつも通り簡潔に命令を下す。

『 周りは気にするな、いつも通り突っ込んで叩き落としてやれ！

L

「「「「了解！」！」」

隊長の極めて簡潔な檄をを受けて私達第一中隊は上昇、敵より高度を取つた後、敵に向かつて一気に加速、その距離を詰める。

敵の編隊を射程にとらえる。

「了解だ・・・・・ クルピングスキー、行くぞ！」

「りょーかい、ラル。 . . . じゃあフラウ、先に行つてくる

۱۹

そういうて私にさわやかに微笑んで敵へと矢のよつに飛んでいく

伯爵とラル中尉

続いて、ロスマン先生と私が敵へと呐喊。

降下し速度を失った二人の背中を追いかける敵に向かつて銃の引き金を引く。

銃弾を食らつた敵はそのまま成すすべなく爆碎、敵の一群を突き抜ける

その私達の背中を敵の一體が追いかけてくるが私たちは氣にせず
に再び高度を取るために上昇を始める。

もちろん、敵もおめおめと黙つてみてているわけではない。

高度を取らせまいと私たちの上に出ようとすると・・・

「はあつー」

更に私たちの後に降下を始めていたカトー中尉にとつて落とされ
る。

「よし、各機ブレイク！」

その掛け声を聞き、私たちは残りの敵機を叩くために各自攻撃を開始した。

・・・・・

「お疲れ様、エーリカちゃん。今日は一機撃墜おめでとう。お姉さんびっくりしちゃった」

帰投後、格納庫で一息つく私に先口配属された更識少尉が笑顔を浮かべながらスピードリンクを差し出してきた。

「ううん、あんなのロスマン先生のおじいさんだよ・・・それに、更識少尉の二機撃墜の方がすごいじゃん

敵編隊を撃破した直後、新たな敵編隊が現れてその編隊を隊長率いる第一中隊が迎えうち、その中で彼女は単独で二機落としたのだ。

そちらの方がすごいと思つのは私だけだろつか？

「そんなことないわよ、私はまだまだITSの性能に助けられてい
る部分が大きいわ。なんだかんだで攻撃をくらちやつてるし・・・
だから一発も被弾しなかつたエーリカちゃんの方がすごい！　お姉
さんが言つんだから間違いないわ」

そういうて私の頭を姉が妹を褒めるよつになれる。

モニ・・・

「やあ、一人して何の話をしてるんだい？」

陽気なキザつたらしい笑みを浮かべて伯爵が現れた。

「あら、伯爵」

「もひお説教は終わった…みたいだね」

よく見るまでもなく、その綺麗な彫刻を思わせるような端正な顔の左頬には小さい赤い手形がくつきりとついていた。

キザつたらしい笑みを浮かべて爽快と登場したはいいが、その所為でなんだか間抜けに見える。

「あはは、いやあエディータも可愛いところがあるよね。私が他の子に話しかけるだけですく嫉妬するんだから」

「絶対違うと思つ」

「ええ」

大方、帰ってきて早々に他の隊の後輩ウイッチをバーに誘おうとした所を、偶然発見したロスマン先生に思いつきり張り手を食らつたのだるつ。

「やれやれ、二人とも手厳しいね・・・・といひで、一人して一
体何の話をしていたんだい?」

「今田のエーリカちやんはすゞかつたつて話をしていたよ」

「そりだね、今日は一機撃墜だなんてやるじやないかフリウ」

「まだまだだよ。まだ出撃のたびに緊張するし、銃を撃つのにも
手が震えるんだ」

そう、震えるのだ。

戦場に出るのが怖くて仕方がない。

もしかしたら、自分が落とされて死んでしまつかと思いつとども
立つていられなくなる。

銃を撃つときだつて味方に当たつたらビリじょひなどと考へてし
まうのだ。

軍人としては失格だろう。

「それでいいんだよフラウ、戦場では恐れを忘れた人から死んでいく・・・・恐怖を感じるつていうことは生きていくうえでとても大切なことだ」

伯爵は普段のさわやかなキザつたらしい笑い方ではなく、人を安心させるような穏やかな笑みを浮かべ頭を撫でてくる。

「伯爵・・・・」

「でも、フランツがそつやつて震えてしまったらしい。私が優しくベッドで「このHセ伯爵ひひひひひひひひひひひひ！」

？」

そんな叫び声とともに何かが飛んできて伯爵の後頭部にクリーンヒット。

頭に重い一撃を受けた伯爵はそのまま前に倒れる。

「え？・・・・・辞書？」

伯爵の頭に直撃した物体を手に取る。

そこにはカールスラント語でジーイ〇ス独扶辞典とでかでかと書いてあった。

「なんで辞書なんか・・・」

辞書が飛んできた方へと目を向けるとそこには・・・

「 まったく、このHセ伯爵！ 私のかわいい教え子に何してくれようとしてるのよ」

部隊の新人教育係のロスマン先生が立っていた。

「ロスマン先生・・・」

「フラン、大丈夫？　変なことされなかつた？」

「うん、大丈夫だつたけど・・・」

「まつたく、油断も隙もないんだから！」

「この、この、どこからか普段講義中に使つてゐる指揮棒を取り出しそ、氣絶する伯爵の頬をつつく

「ねえ先生・・・」

「何かしらフラン？」

「どうすれば、隊長達みたいに強くなれるかな・・・」

「え？」

「…………ごめん、なんでもない。先に戻るね…………」

そういうて私は一人に敬礼し、足元に転がっている伯爵をそのままに格納庫を出た

「…………はえ？」

顔に暖かい感触を感じ目を覚ます、

季節は冬の為太陽が昇り切っていないのか、カーテンが完全に閉まつていな窓からは弱い陽光が入り込んでいる。どうやらその陽光が顔に当たっていたのだろう。

ベット脇のテーブルの上の時計に目を移す・・・

時刻は午前6時を指している。

いつも起床ラッパが鳴るまで眠っている私にとつては未知の時間帯だ。

辺りを見回す。

反対側のベットには同室であるハンナ・ユスティーナ・マルセイユが気持ちよさそうに一定のリズムで寝息を立てている。

もう一人のルームメイトである下原は起きて朝食の準備の為にオフィスに行っているのだろう。上からは人の気配がない。

「…………起きよ」

いつもであれば一度寝を敢行するところであるが、とてもそんな気にはなれなかつた。

ベットから抜け出し、枕元にある携帯端末をいじり始め、空中にディスプレイを投影させる。

そのディスプレイの中では優刀と、ラル、二人のウイッチが高度な空中戦を繰り広げている

先日の模擬格闘戦の映像だ。

「はあ……まだまだ隊長達のようにはいかないなあ

この部隊に配属されてから数か月経つが、いつもこの部隊の先任達の技量の高さに驚嘆させられてばかりだ

圧倒的な空戦機動、正確な射撃能力、なにものも恐れないその

精神力・・・数を挙げればきりがない。

同じ時期に入った同期のハンナは隊長の一一番機に抜擢されて次々と戦果をあげ、先任だけど私たちと同じ時期にこの部隊に来た下原はこの部隊の目として皆から頼りにされている。

それに比べて私ときたら・・・・。

初陣では長機であるロスマン先生を敵機と誤認して逃げ回った挙句墜落。

そのあともいろいろと墜落やらなんやらいやした。

最近は何とか慣れてきて、敵機を撃墜できるようになつたがそれでも一人に比べればずつと少ない

はつきつ言つてダメダメだ。

「…散歩に行こ」

沈んだこの気持ちを朝の寒いけど清々しい空気がきっと変えてくれるだろ?と信じて身支度を整えるべくロッカーに向かつ。

その時ふと窓を窓の外に向ける

「・・・・・隊長?」

窓の向こう側に隊長の姿を見つけてた。

名前はなんだったか忘れたが、愛用の扶桑刀を持ち、戦闘中に来ている扶桑独特の上着、羽織を着て宿舎の裏手の林へと入つていった

「なんだろ、行つてみよつかな?・・・」

私は隊長の後を追つことに決め、ロッカーから防寒着を取り出し、まだ寝ているハンナを起こさないよう静かに部屋を出た・・・・・

サアツと辺りに冷えた風が吹く・・・・

(いつたい何をしているんだろ？？？？？)

隊長は腰に差した扶桑刀に手をかけて目を瞑つていて動く気配がない、

私は気づかれないようにじっとそりと木に身を隠す。

隊長の後を追いかけて林に入ると少し広がった場所にその姿を見つけた。

一体何をしてこらのか聞き出せりとて物陰から出て行ひつじ
たその時・・・・

隊長がゆづくつと皿を開く・・・・・

ビクッ！――！

隊長の纏つ霧囲氣が変わる

いつも辺りを穏やかにする温かい霧囲氣から、そこにいるモノを
斬り殺すよつな、冷えた、ひどく恐ろしい空氣にその在り方を変える

次の瞬間・・・・・

「オオオオオオオオッ！――！――！」

隊長が叫んだ瞬間、隊長の周りの空気がはじかれたように辺りに吹き荒れる

辺りには吹き荒れた空気によつて木の葉が舞い散り、切り裂かれ次々と粉々に弾ける

「キヤッ！？」

その光景に驚き、その場に倒れてしまった

「……………フランカ?」

隊長が私に気付いた

近寄ってくる今の隊長はいつも暖かい雰囲気の隊長だった

「お…………おはよー隊長」

「何やつてるんだ　お前?」

隊長が呆れたようにぶやく

「あ、朝の散歩…………な、なでしあつて」

そう言つのが精いつぱいだった。

後をつけてましたなんてとてもじゃないが言えない。

「ふうん、まあいいけど。ほら立てるか？」

そう言つて手を差し出してくれる

「だ、大丈夫…一人で立てるよ…あれ？」

何とか一人で立とうとするが腰に力が入らない

「まつたく…ほら行くぞ？」

私の脇の下に手を入れて立たせる隊長…しかし

「わ、わわー！」

どうやら腰が抜けてしまつたらしく足に力が入らない・・・・
うう、我ながら情けない

「しうがなにな・・・・・みのりこむ」と

そういうと器用に私をおんぶする隊員、

「ハハハ、『めん隊長』…………」

「いいさ、別に」

そういうて隊長と私は宿舎の方へと歩き出した

「ねえ隊長。わたくしのは剣術の練習?..」

宿舎への道の途中、私はわたくしの事が氣になり聞いてみた

「ああ、違つ違つ。練習つてこつまどのものじやない、ただ体が鈍らなこよひに氣を引き締めていただけだ」

「いつもの訓練とは違つの?..」

「ああ・・・」

やうこつて上を見上げる隊長。

「俺の場合、時折ああやつて氣を引き締めなこと心の中が黒くなつていつて、気持ちが悪くなつていくんだ」

「んへへへ、やうこつ」と?..」

「やうだな・・・・・・フラウ、銃を持った時ビリビリ?..」

少し考ふるよつとして私に聞いてきた

「え？ それは怖いよ……だつて人を殺せりやうんだもん

「そうだな、それが普通だ……けど、どつかで好き勝手に撃つてみたって思わないか？」

「う……たまに、ちょっとだけ」

私は情けなく答える。

銃を持ったとき、確かに怖いと思う、けど同時に、少しだけ使ってみたいと思うのも事実である。

だからこそ余計に銃を持ちたくないし、引き金を引くのにもためらいが生まれるわけだが……

「まあ、要するにそういうた風に力を持つたら使いたいって思うわけだ。……けど、俺たちは好き勝手に力を使つていいいわけじゃない。……俺たちが使つている銃は人をも殺せる道具でもあるんだから」

「うん……」

そうだ・・・今はネウロイに向かつて銃を放つてはいるが、今使つ
ている力は人も殺せるんだ・・・

「だから、たまにああやつて気を引き締めるんだ。自分が持っているその力に飲まれないように」

「どんな力だつてその力の振るい方を間違えばそれは悲しみを増やすだけのただの暴力だ。だから強くなることに焦っちゃいけない・・焦つて手に入れた力に心の成長が追い付いていないんだ。そういう力には必ず振り回される」

そういうつて淡々と話し続ける

そういうと今まで上に向けていた視線を私の方に向か諭すように語りかける

「・・・・・剣は凶器、剣術は殺人術。どんな綺麗事やお題目を口にしてもそれが真実・・・・・だからこそ、俺たちはその力の振るい処を間違っちゃいけない・・・強くなる事を焦つちやいけないぞ、フラウ」

「え？・・・

「エディータから聞いたぞ？ 最近お前が沈んでいる、訓練中にもどつか焦りが見えるつて・・・何を焦っているんだ、フラウ」

「……私はまだ足手まといだから、速く強くなつて、早くみんなと一緒に胸張つて飛べるようになりたい、皆に背中を預けてもらえるよつになりたいんだ」

わたしはもつとみんなにちゃんと仲間として認めてもらつたのだ。

背中を預けられる仲間として・・・・・

「ならお前は大丈夫だ、フラウ」

「え？」

「嘘、お前のことを頼りにしてこるよ。俺が言つんだから間違いない」

ハリウッドにやかに笑ひ笑ひ

「そんなことないよ……初陣ではロスマン先生を敵と思つて逃げ回つて落ちちゃうし、そのあとだつて何回も落ちちゃつてるし……みんなに迷惑かけっぱなしだよ」

「……でも、今は違つだろ、エディーターが言つてたぞ？ 最近のあの子はすごいって、ときどき私もビックリするぐらいタイミングで敵の攻撃を仕掛けるつて」

「そんなの偶然だよ……」

「伯爵も言つていたぞ。何回あの子に助けられたか分からぬつてな」

「…………」

「武子いわく、？彼女は私より周りの観察力がある、あの子は私が命令するよりも早く敵の弱点に攻撃している？だ、そうだ」

「…………」

「大将はあの高度回復の速さは見事だった、だってさ」

「…………」

「フューテリカやラル、下原だつて…………フラン、ビリーフた？」

「…………うえ、ぐす…………うえ えぐつ」

「なんだ、泣く奴があるか…………」

「うう…………だつて…………ひづく…………ぐすつ……」

だつてしょうがないではないか、ずっと今までみんなの足をひっぱて來ていたんだ。眞に迷惑をかけてきたのだ。いつの間にかみんなに認めてもらつていたと言われて、嬉しくない筈がない

「だから、あんまり卑下するな・・・お前は既くやつてるよ。確かにまだまだ空戦技術は荒いけど、お前は他のみんなの背中をうちもんと守つているんだ、みんなお前を頼りにしているよ・・・」

「・・・う・・・・・うわあああああつー！」

「・・・」

「もう少し遅めに着いたか？」

「…………」

「やうが…………じゃあやつたと帰るとあるか、もうやつたと朝食の時間だ」

「うん…………朝食、楽しみだね」

「ああ…………」

私が落ち着いたのを見計らい再び歩き始める隊長
「ああ…………」と見えたな、宿舎だ

「ホントだ、カトー中尉と下原だ」

大方、朝食の時間になつても現れない私たちを探査能力の高い二人が探しに来たのだろう、中尉はやれやれと安心した顔でいて、下原は手を振つてゐる。

「さて、さつと帰るか」

「うん・・・・・・・ねえ隊長」

「・・・・・・・なんだ?」

少し、間が開いて隊長が答える

「私もつと頑張るね・・・・・」

「ああ」

そう一言答えた後、隊長は一人の言つ方へと歩いて行つた

ところが、エーリカ回でした

やつとスポットライトが当たりました

次はだれを書こうかな？

祝日なんで割とのんびり書いてたらいつの間にかこんな時間に！？

まあ、でも今回はすんなりと思い通り書けたんで個人的には満足です。

お知らせですがこの零章もこの話で半分を切りました。

後はもう一つ一つ、ウイッチ個人にスポットライトを当ててそのあとにリストパート、エピローグです。

ようやく本編行けます。

じつちにHIS勢はがつつい出でてきます。

第零章がウイッチ達の物語だとしたら第一章はHIS操縦者の物語

です

楽しみにしていただければ幸いです

それではご意見、ご感想お待ちしています！！

以上、シユウ禅でした！！

さういふも、シユウツク神です。

前書きが書くことないです・・・・

ゲフンッ！

ではどうだ？

「ふ、ふふ・・・・・・」

「ハンナ、どつたの？」

「急に笑い始めてどつしたんですか？」

一月上旬のある日、私達新人三人が格納庫で土田班長からストライカーゴニットの講習を受けている最中に突然ハンナが笑い出した。

頬をだらしなく緩めて笑うその姿ははつきり言つて気持ち悪い

「いや、なに・・・最近やたらと視線を感じるようになつてな・・・

「ええ、ハンナってそんな趣味を持つてたんだ・・・・・・」

「違います。」

「えうですよ、エーリカさん。ハンナさんは見られるのが好きな変態さんじゃないですよ」

「そりだ、さすが下原！ 良く分かってゐるじゃないか」

「ハンナさんは隊長達に言葉でいじられるのが好きなんですね！」

「えう、私は言葉で弄られるのが好き……ってちがうつ……！」

「うわ……」めんハンナ、さすがに私も呑みます……。

「

まさか士官学校からの同期がそんな趣味を持っていたとは驚きだ

「違うって言つてるだろ？ 最近、やたらと誰かに見られて
いる気がするんだ！ 今だつてほら！」

そういうて格納庫の外を指さす。

指さした方には最近見かけるようになつた数人のウイッチがこつ
ちを向いてひそひそ話をしているのが見え、私たちの視線に気づく
とそそくさと逃げるように去つて行つた。

「ホントだ・・・・なんだろ？」

「私にエースの貫録が出てきたんだな。きっと

「なんだそれ・・・・・・

「あははは・・・・・・

「・・・・・へえ、さすがは未来のエース達ね。私の授業中に
よそ見なんていい度胸してるとわ〜」

「？・・・・・

「あ・・・・・

「ひ・・・・・

突如、背後から心底冷えた声にが聞こえ、刃物でも突きつけられたような感覚が背筋に走り、体を強張らせる私達三人・・・・・

ゆつくりと背後へ振り向いてみれば二コリといつもの穏やかな笑みを浮かべるロスマン先生。

しかし纏つ雰囲気はまったくの逆で、その場にいる者を凍死させるのではないかといふほどのひどく冷えた怒氣を辺りにふりま正在る。

そうだった、私たちはロスマン先生の授業の一環で土田班長にストライカーコーナーの講習を受けたんだった

有無を言わぬ先生の異様な迫力に思わず身を強張らせる。その背後にはなぜか九本の尾っぽ生やす成長した先生の姿が浮かび、こちらを射殺すよつた目で見ていた気がする。

うん、氣のせいだ。

そうこうしているとモシ。

すぐそばにいた土田班長がその怒気に当たられ少し怯えてくる。

「さてさて、授業を真面目に聞かない子にはどんな御仕置きがいいかしら・・・・・・」

ゆうり、と先生が動く

「い・・・・・」

「い・・・・・」

「……………」

「久しぶりだな。緋村中尉…………いや、もう少佐だったな」
「お久しぶりです将軍。将軍のご活躍はしきりまで届いていますよ」

「はは、まさか？扶桑の白き龍？の耳に入つてゐるとは恐れ多いよ。」

「またご冗談を……」

「この日、俺は部隊のオフィスで珍しい人物と再会を果たしていた。

今日の前にいる人物はエルヴィン・ロンメル。カールスラント陸軍将軍である

巧みな戦略・戦術によって、圧倒的なネウロイとの戦いで勝利し続けるカールスラントの英雄で、兵からの人気も高い将軍である

「それで、将軍がわざわざG52までいらした理由はなんでしょうか？」

「やれやれ……君もせつかちだね少佐。若いうちからそんなに急いだつてなにもいいことはないぞ」

「はあ……」

「こやかに笑い、武子に差し出された特製コーヒーを飲む将軍。

「ああ、實におこしゃ「一ノ瀬」だ・・・・・」

「ありがとうございます」

本人もまんざりではないのかにこやかに笑つて返す武子

「ああ、ウイッヂでなければうちの部隊に来てほしこくらうだよ」

「將軍・・・上向の田の前で堂々と部下を口説かないでください」

「これは失敬」

まつたくわざわざ一左衛にみずから会つに来て、部下を口説く
将校といつのも珍しい。

そういうたフランクな部分も現場の兵士達から絶大な人気を得
てゐる一つの要因だつ。

なんというか、将軍は他のカールスラント軍人と少し変わっている。

いや、将軍だけではない。

俺が親しくなるカールスラント軍人は皆、一般的なカールスラント軍人像から逸脱している

謹厳実直なカールスラント軍人はどこへやら

まあ唯一、バルクホルンだけがTHE・カールスラント軍人と言えるんだろうが

彼女もなんだかんだで癖強いからなあ・・・・・・

・・・まあ、こっちの方が親しみやすいので個人的にはいいのだが

そうしてゆっくりコーヒーを味わっている将軍の姿を見て、自分も武子のコーヒーを味わうことにした

「プラークが落ちた」

そうして、一杯目のコーヒーを飲み終わり、武子が再び入れてくれた二敗目を飲みながら将軍が口を開く。

三人共、無言でただコーヒーを飲む。

「・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・

「・・・・・ そうですか」

ロンメル將軍が告げた内容をただ肯いて納得する。

「なんだ、驚かないのか?」

「ええ、予想はしていましたので・・・・・」

信じたくないが、予想はしていたことだ。

カールスラントヒオストマルクの国境近くにある都市、ブラーク。カールスラントは特異な形状をしており、オストマルクの上に半分覆いかぶさるように突き出た東部地方がある。

ブラークはその突き出た部分の根元ともいえる所にあり、ここを完全に抑えられてしまえばカールスラントは東部と西部に分断されることとなる。

セシが抑えられたとなると・・・・・

「我々にその奪還作戦に参加しようとしないですか？」

「いや、違う

「…………ですよね、だったら将軍がこんなところにいる筈がない

将軍が本当に奪還作戦に参加するのであれば、今頃国境沿いのレストランにいる筈だ。

「まったく可憐げのない奴だな。私が君たちに作戦に参加する手に頼みに来たとは思わないのか？」

「何処の軍に一部隊の隊長に参加するより手に頼みに来る将軍がいるんですか・・・・・あこへとやつ思ひよつたアホ臭いヒロイックな精神構造してませんよ」

「ええ

將軍が子供のように拗ねる

ちえつて・・・・案外お気楽だなこの人は

「…………で、将軍が来た理由はなんですか?」

「・・・・・ プラーク奪還作戦が実施されるに当たり、もう一か所奪還作戦が実施されることとなつた」

今までの陽気な雰囲気を一変させ、顔を引き締める将軍

その佇まいに、こちらも自然と氣を引き締める

「その場所つて、まさか・・・・・」

「ああ、そのまさかだ・・・・・」れより一週間後、我々はクラカウ奪還作戦を実施する

クラカウ奪還作戦

ついにその日が来たか・・・・・

クラカウ・・・・・

こちらもまたブラークと同様にカールスラント、オストマルクの国境近くにある都市で、昨年の九月にネウロイによって陥落した都市である。

クラカウはカールスラント東部の最東端に近く、今や東部戦線に飛来する航空型ネウロイの多くは、ここにクラカウから飛来しているといつても過言ではない。

先日のオラーシャからの避難民を乗せた輸送機を襲つた航空型も
ここから飛来したと思われる

グツ・・・・・

コーヒー カップを持つ手につい力が入る

「優刀・・・・・」

横に座っていた武子が心配そうに顔を覗いてくる。

「・・・大丈夫だ」

心配そうな武子に笑顔で答えてやる。

そうだ、ついにこの日が来たのだ・・・・

「・・・・あの日、君の部隊はクラカウにおいて避難民を守る為に最後まで戦い、君とカトー中尉を残して全滅・・・・・幸い、死者は出なかつたものの、部隊は歐州からの撤退を余儀なくされた」

ロンメル将軍の言う通り、あの日クラカウにネウロイが襲来した際、東部戦線全域にネウロイが大攻勢を仕掛けてきた。俺が率いる扶桑国遣欧艦隊21航空隊第3中隊はクラカウを防衛するために出击した。

・・・・・後は将軍の言つ通りである。

「その後、君は歐州に残る事を決め、クラカウ撤退戦時に共に戦つた者たちとの義勇統合戦闘飛行隊を創設した・・・・・」

「ええ、そうです」

わずか半年前の出来事だが、今でも昨日の事のように思い出せる。

空は一面にネウロイに支配され、逃げようとする人たちに容赦なく赤い閃光を振りまく。

すぐ近くにいる味方さえも判らないほどあの日の戦場は混乱し、次々と仲間が傷ついて行った・・・・・

あの日、俺は大将とフェデリカに出会い、同様にクラカウ防衛の為に出撃し、部隊を壊滅させられたラルや、エディータ、伯爵と共にこの義勇統合戦闘飛行隊を創設した・・・・・

「・・・・少佐、この作戦に参加するか？」

「・・・・え」

「今回、部隊がこの奪還作戦に参加するかどうかは君に一任されている・・・・参加するもしないも君の自由だ」

なるほど・・・そういうことか

この部隊は多国籍軍である為、正確には「G52」の命令系統に属していない。連合本部の直属の独立した遊撃部隊である。

現場での行動は自分に一任されており、特にこれといった注文を付けられたことは今までにない。

そして今回も上が何も言つてきていなし以上、参加するか否かは任せているといったところだろう・・・

「・・・・・・迷つてこるのかね？」

将軍のその瞳が俺の心を見透かすように覗き込む

「・・・ええ」

そう、俺はロンメル將軍の言つ通り迷つている

もちろん、作戦に参加したいという思いはある。

けれど、それとは別にはたして参加するべきかと迷つているのだ。

「・・・・・君の所にいる新人たちが心配かね？」

「・・・・ええ、よく御存じで」

やはり、抜け目ないな・・・ちゃんとこじらの情報をきちつと仕入れている。

もつともそうでなければネウロイとの戦いで勝ち続けることなどできないのであるづが

「……今回の作戦、撤退戦の時よりも苛烈を極めるでしょう。・
・・・その中で戦場の現実をいやでも突きつけられる場面がきっと
何度もあります。・・・・・・・・あいつらは将来有望なウイッチで
す。けれどまだ13歳の子供であります。・・・・技量の方はとも
かく、精神が成長しきっていないあいつらが現実を突き付けられ
とき、潰れないかが心配なんです」

戦場にあるのはゴミの様な人の死だ。

どんなに大義名分を立てたところでその事実は決して変わりはし
ない。

彼女たちはきっと将来優秀なウイッチになる。だからこそ、精神
が成長しきつていないうちに、トラウマになるようなことは避けた
い。

「俺はあの子たちに潰れてほしくないんです。・・・・けど

「世界は彼女たちの成長を待ってくれる。・・・・・わけではな

い、か

「はい・・・・」

だけれど、世界は彼女たちがその事実を受け入れられる程に成長してくれるまで待つてくれはしない。

今も、歐州のどこかで助けを求めている人がいるのだ。

その人たちを守る為に戦うのが我々の務めだということは十分に理解しているのだが・・・・・

「それでも出来る事なら、そんな現実をみせてやりたくないのだろ?」

「はい・・・・」

自分の考えている事が甘いという事は十分に解つている。

口では大きなことを言つておきながら、いざと詰つときこその決断が出来ないのでから・・・

そうやって俺が悩んでいると・・・

「・・・・・ボス、 参加しよう」

突然、声のする方を向けば、そこにはドアに寄りかかってガムを膨らませている大将の姿があった。

「つて、大将！？」

「・・・・・ボス、」の作戦に私たちは参加するべきだ。私たちにとっても、あいつらにとってもな
・・・・・

「大将・・・・・けど…」

さすがに將軍のいる田の前でいきなり横から出てきた彼女を武子
が非難するように声を上げる。

將軍の方は大将の行動に特に何も言つつもりはないようだ。

「どのみち遅かれ早かれこの歐州は今以上に戦いが激しくなる。
だったら早いうちに知つておいた方がいい」

「わかつてゐるさ・・・・・けど」

「私はあいつらがそれで潰れるほどヤワな奴らだとは思つていな
いぞ？ 奴らなら乗り越えられる・・・・もつ少しはあいつらのこと
を信じてやれ

それでもおれは・・・・

「やれやれ、どうもボスは過保護だな・・・・もしそれで潰れそう

になつたら、私たちが支えてやればいい、私たちは仲間だろ？

「大将・・・・

そうだ・・・・大将の言ひ通りである。

「やれやれ・・・・大将に言われて氣づかされるなんてな

そういうと自然と笑みがこぼれた

いくらかクラカウといつ名前を聞いてナーバスになつていたようだ

「ふふ、若いな君たちは」

そんな俺たちのやり取りを今まで黙つてみていたロンメル將軍が
一ツ口端を上げて笑いかける

「あ、し、失礼しました少佐！」

「いや、いいさ・・・それでは緋村少佐、答えを聞こつけじやない
か」

ロンメル將軍のその真摯な口をまつすぐ見据えて俺は・・・・・

「はい・・・我々、義勇統合戦闘飛行隊はクラカウ奪還作戦に参
加させていただきます」

そうだ・・・・・

俺は彼女たちを信じてやればいい・・・・・

そして、もし彼女たちが潰れそうになつたのなら、そばでできちつ
と支えてやる・・・・・

それが、仲間なんだから・・・・・

ロンメル將軍登場！！

やつたぜ！ イエイイイー！

え？

知らない？

これは失礼しました・・・・

將軍はオリキャラじゃないですよ。

SWのアフリカの魔女にも出ていますが、將軍は実在した第一次世界大戦中の人物です。

彼の詳しい経歴を知りたい人は『砂漠の狐』で調べてみてください。

彼かっこいいんですよね～

・・・・すいません、テンションがおかしな方へといつてしましました

第零章、前話で言つた通り此処から折り返し、一気に物語は加速します。

「の後もよろこければお付き合こトセ」。

最後になりますが、「意見」「感想などありましたら遠慮なく送つてください。

「感想を送つていただけたら、作者のこれから励みにもなりますので……」

とこつわけで、また次回……

じつもシコウ神です！

E p - 1 2 • • • やつひまつたせ•••

というわけぢいぢーーー

ロンメル将軍にクラカウ奪還作戦に参加する折を伝えた数日後、俺と武子、ラルはJG52基地の作戦会議室で行われているクラカウ奪還作戦の作戦会議に参加していた。

作戦の総指揮を執るロンメル将軍はもちろん、基地司令、JG52飛行隊司令のボーン少佐、陸戦部隊の指揮官、あとは周辺基地の司令なども会議に参加していた

「これが今回、偵察部隊が撮影したクラカウに展開するネウロイの映像です」

そういうて情報官がスクリーンに映像を映し出す。

「…………これは！」

その映像を見て室内がじよめく

スクリーンに映し出されていたのは・・・・・

「『山』か・・・・・・・」

忘れるはずがない

かつて扶桑海事変において、猛威を振るつた超大型ネウロイ・・・
・・通称『山』である

その黒こげドードの巨体は小高い山など比較にならなほどの
巨大である

こいつの所為で扶桑はあわや壊滅といつといふまで追い込まれた
のだ。

ひりひと横に座る武子に皿を向ける

「・・・・・」

武子はただじっとスクリーンを見つめていてその胸中はつかがえ
ないがきっと考えていることは同じだ

彼女も忘れてても忘れられないのだらう・・・・・

「こいつの事も、あの時の事も…

「緋村少佐、このネウロイの説明を頼む」

「はい・・・・・では」説明します

スクリーンの横に立つ

「・・・・・このネウロイはご存知の方もいらっしゃれるかと思い
ますが、扶桑海事変においても確認された
超大型ネウロイです。その大きさは見てわかる通りそこいらにある
小高い山ほどあります」

そして説明を続ける。

「このネウロイの特徴はをその堅牢な防御力と他を寄せ付けない攻撃力、その攻撃の有効射程です」

「こいつの高出力ビームの有効射程は優に半径15000mを超えます。その出力も駆逐艦を一撃で沈めるほどであり、ウィッチのシールドを持つとしても精々一、二発といった所でしょう」

「更に極めつけは体内から無数の小型機を輩出できる能力です・・・これにより瘴気外の小型機の活動時間を大幅に引き上げてあり、まさしく移動要塞といつても過言ではありません・・・」

その驚異的な性能にその場の全員が押し黙る・・・・・

「緋村少佐、率直に聞きたい」

そんな中、一人手を上げる人物が一人

「なんでしょうか、ボニン少佐？」

「少佐達はどうやってこのネウロイを倒したのだ？ 扶桑が健在で少佐がここにいる以上、攻略法がない訳ではないのだろう？」

ボニン少佐の言つ通り、攻略法がない訳ではない……
しかし……

「……当時我々がとつた作戦は至極簡単です。当時は海上戦でしたので戦艦を囮に使って小型機を誘導、その間に航空ワイツチで敵に接近、コアを発見して破壊しました」

「コアはどうあるんだ?」

「おそれへいりやで」

そういつて、ネウロイの頂上付近を指す

「…………ちよつとひつぺんか」

「……はい、一年前に現れた奴と同型であればこいだと思われます。もちろん、ここ以外も十分に考えられますが、その事も考慮して、今回コアを発見できる能力を持つリバウ航空隊の坂本一飛曹に助力を乞いました」

「コアの発見はそれでどうにかできるとして問題はひとつやつて敵

のビームを掻い潜り、「コアを破壊するかだが……少佐、君たちはどうやって破壊した?」

「……あまりほめられた方法とは言えませんが、戦艦からの艦砲射撃により敵のビームをそちらに引きつけ、その間に航空ウィッヂが吶喊、コアを破壊しました」

「なんと……」

「リスクが高すぎる……」

「扶桑軍人は何を考えているんだ?」

とたん会場がざわつき始める

それはそうだろう……

もしネウロイが戦艦の艦砲射撃を迎撃していなければ、艦砲射撃とビームによつて現場にいたウィッヂが皆全滅しかねなかつたのだ

一か八かの賭けにすらならない大博打である

といつても最初からそいつた作戦だったわけではなく、その時に起きたいろいろな不運が重なりそうなつてしまつただけであるが・
・・・

どうしてそんな作戦をとつたかは身内の恥以外の何ものでもないので、語らないでおこいつ・・・

「・・・・・ 緋村少佐、ありがと」

「は」

説明を終え、俺は席に座る

「諸君、今回の作戦にはこの様な巨大な敵が目の前に現れたが、撃破した前例がない訳でないという事が解つてもらえただろ。・・・我々は何としてもこの作戦を成功しなくてはならない。その為には諸君ら現場の人間一人ひとりの協力が不可欠だ。皆そのことを胸に刻んでこれから働いてもらいたい・・・具体的な作戦の立案は明日だ。以上で本日の作戦会議は終る、解散！」

ロンメル将軍はそう締めくくつ、会議は終了した・・・・・

そういうて、一つの指令書を渡す・・・・・

「ローラント司令官どうしましたか？」
「君? に任務だ

会議が終わり皆がさうさうと廊廊を出て行く中、ローラント基地司令に声をかけられる

「少佐」

渡された書類に印を通す。

「…………分かりました、すぐ準備します」

「……優刀」

任務の仕度の為に由室に戻りつゝする俺の背中に武子が声をかける
その顔はどこか憂こを帶びて居るのを感じる

「……明日には戻る。それまでは隊のこと頼む」

そんな武子に俺は振つ返る「などやつぱり、足早にその場を
後にした

「…………」しかし第一部隊、所定の位置についた。第一部隊、そ
ちゅうはどひつだ？』

『…………』しかしも所定の位置につきました……』

夜

満月が辺りを幻想的に照らし、静寂が包み込む森林の中をくづぬ
く黒きモノたちがいた。

その数、あわせて二十

しかしそのモノ達は件のネウロイではなく、その出で立ち風貌は
紛れもなく人間のものであった

「よし、全員所定の位置についたな……これより、我々は
この基地の I-S 部隊、『黒うさぎ隊』^{ショウジョウザギ}が保有する第三世代型 I-S 『
黒い雨』^{ショウジョウノイ・レーベン}を奪取する。」

そう・・・彼らの目的はこの先の基地にあるが保有する一機のIS、彼らはそれを奪取するために今回、？組織？から選ばれた精銳部隊である。

彼らは林の中を音も立てず疾走する。

彼らのその動きは洗練されていて、よく訓練された者たちであると観る者が見ればすぐさま見抜けるだろう。

「よし、もうまもなく基地の側面だな・・・第一部隊、そち
うはじうだ？」

先頭を走る人物が、別働隊に連絡を入れるが・・・

『・・・・・』

返事が返つてこない。

「どうした？ 応答しろ」

何度も呼びかけるがいくら呼びかけようとそのインカムから第一部隊の声は全く聞こえてこない

「第一部隊どうした！？ 応答しろー 何があった！？」

「た、隊長！、前方に人影が！！」

突如、横にいる部下の声に前に顔を向ける

そこには一つの人影があつた

その人物には見覚えがあり・・・

「お前は第一部隊の・・・」

そう彼は通信の途絶えた第一部隊の隊員であった。

「おい何があった！－ 他の隊員はどうした－」

「・・・・・」

その問い合わせに答えない第一部隊の隊員・・・しかし彼はただ一言・
・・ 答えた

「・・・・・つ・・・・・つよ・・・い

その場に崩れ落ちる隊員

その後ろに一人の人影・・・・

「き・・・・貴様は！？」

そこにいた人物・・・・それは

「今すぐ退け、退けば命は助ける………退かぬのなら………斬る」

白い羽織を纏い、その手には満月の光を反射して青白く光る扶桑刀

「緋村……優刀………！」

田の前にいる者の名を呑々しげに口にする

彼らの田の前に立ち塞がるのは・・・扶桑の白き龍と言われる
エース、緋村優刀であった

「なぜ、扶桑の白き龍がこんなとこに。」

優刀がここにいることが信じられないといった風に呟く。

此處は彼が駐屯する「G52基地ではない・・・それなのに何故
ここに彼がいる

「何が襲撃されると解っていたのか？

いや、この任務は組織でも少数しか詳しく知られていかない極秘
任務であつたはずだ。

それをたかが一部隊の隊長が知りえる筈がない

「もつ一度言つ・・・・・退け、そもそもば斬る」

優刀は先ほどの言葉を淡々と繰り返す・・・・・

彼のその蒼い瞳にはいつも穏やかさも、ネウロイとの戦いの際の厳しさもなく・・・・・ただ、ただ、相手を刺すような重く冷たい殺気が籠っていた

今の彼を見て、誰があの扶桑の白き龍と呼ばれる少年と判るだろうか？

優刀が一歩踏み出す・・・・・

「・・・つ・・・・・」

優刀が放つその言ひようのない威圧感に兵たちは飲まれてしまつ

「構うなー殺せ・・・・え?」

隊長格がその重圧に耐え切れなくなつて優刀を殺すよつに命じようとした刹那、命じ終わるよりも速くその胴体が袈裟状に切り裂かれ、生々しい鮮血が噴き出る音が夜の暗闇に響き渡る。

その動きはまさに神速

「な・・・なつ」

断末魔をあげる暇もなく崩れ去る隊長を部下たちは呆然と見つめ、掠れた声を搾り出すしか出来なかつた。

「う、撃てえええつーー!」

仲間の一人がそう叫ぶと、皆いつせいに優刃に向かって射撃を始める・・・しかし、すでにその場所には彼の姿はなく、放たれた銃弾は、まだかろうじて息のあつた隊長にそそがれることなりその命を絶つ事となつた。

「た、隊長！――」

「う、ちくしじつ・・・よくも――！」

「皆同士討ちこなす気をつけろ――！ 一か所に固まれ！」

そうしている間にも次々と優刃のその凶刃によつて仲間が倒れていく・・・いかに彼らが精強な部隊であつても、目の前の理解しがたい状況に彼らの思考が追い付いかない。

「くそおおつ――！」

「いたぞ！ そこだ！！」

優刀の姿をとらえた一人が銃弾を放つも、それを左右のステップを踏んで回避し、その距離を縮める。

相手の懷に入り込むと、刀を下から掬い上げるように振るつてその両腕を断つ

赤い鮮血が弧を描き、斬り離された腕が宙を舞う。

「うをおつーーー！」

後ろにいた兵が銃では形勢が不利とみてナイフを抜き放ち、突き出す。

その一撃を体を時計回りに捻ることで避け、その際発生した遠心力を加えた斬撃を相手に叩き込む。

そのまま、離れた兵へ錐もみ上に体を回転させ突進、その胴を斬り捨てる。

背後に回っていた優刀の倍は背丈がありそうな兵が優刀にその組

んだ剛腕を振りおろすがそれに対し、優刀はそれを下から峰に手を添えて振り上げると同時に跳躍する。

跳躍の力を得た一撃は兵の固く組んだ両手を斬り離し、顎を切り裂く。

そして優刀は倒れ行く兵を踏み台にしてさらに跳躍、空高く飛び上がり、更に次の敵へ頭上から襲い掛かる。落下の力を利用した縦一閃の斬撃を放ち、相手の腕を切り裂く。両断された傷口から噴水のように鮮やかな朱い血が噴きだし、その朱が暗い闇の中では月の光に照らされてその美しさが更に映える。

「ギヤツチー。」

その一撃を食らった兵は無様な声を上げてその場に倒れる。

そして倒れた彼の眼前に鮮やかな朱を吸つても尚、その淡い蒼白い輝きが損なわれることのない美しい扶桑刀の切っ先が向けられる。

「答える……お前たちの目的はなんだ？ 何が目的で工事を
集めている？」

その切つ先を向けたまま、優刀はその兵に問いかける。

「それに我々が答えると思つか？ ……」

「だらうつな……少なくともお前たちは半端なテロリスト
どもじやない。よく統率のとれた屈強な兵士だ。この程度の事で
口は割らないだらうな」

「この程度の事か……

内心で兵士は舌打ちする。

部隊をたつた一人で壊滅させたことをこの程度といつ……

では、壊滅させられた我々は一体なんだというのだらうか？

しかもただ壊滅させられたのではない……彼らが撃ち殺した

隊長以外の兵は皆、虫の息ではあるもののまだ息をしているのだ

もちろんあと三十分もすれば出血多量で死ぬことになるだろ？が、それでもかるうじて生きている。

もちろん、偶然ではない。

緋村優刀は殺せるのに殺さなかつたのだ

「・・・我々をどうする気だ？」

「決まっている・・・情報部隊に引き渡す。あと少しで到着するからな。そこで何かしらの情報が得られるだろ？」

そう淡々と言い放つ優刀

その間も兵士から視線を逸らさず、にらみ続ける。

「・・・・!」

突如優刀は自身に向けられる鋭い殺氣に気が付き、高く跳躍して
その場を飛び退く

刹那

優刀がいた場所には無数の銃弾の雨が降り注ぎ、その場にいた兵士たちを物言わぬ骸に変える

その雨がやみ、優刀がその場に降りるとその場所にいた兵たちは
もはや何者であつたかわからないほど・・・・それこそ動物に食い
荒らされたかのごときその亡骸を無残に晒していた。

「なんだよ使えねえ奴らだな・・・・たかがガキ一人にやられ
やがつて、こんなことなら最初から私一人でやりやあよかつたぜ」

「貴様・・・・・・！」

優刀は声のした方に視線を向ける・・・・・

そこに現れたのは・・・・・

「まあいいさ！あたしがこの餓鬼をさつさとぶつ殺してエウを奪
えばいいんだからなあ！」

その身を黄色と黒の毒々しい色で染め、背中から八つの脚を生や
す異形のエウだった

・・・・・・・・・・・・

やつちまつた～～～～～～！

あんだけるる剣要素出でないようにしてたのに、要素出まくつじ
やねえか～～

くそつ・・・・・俺のばか、なぜその衝動に勝てなかつたんだ・・・

だつてしうがないじやない、好きなんだもの

B

Y 横無（み お風）

というわけで、次回もるる剣要素満載で続けてお送りします

最後に、「意見」感想の方お待ちしています～！

誤字脱字、批判その他もうもぐバツチコイです～！

では次回！

どうもシユウ禅です

今回も前回同様、要素満載でお送りします。

ではどうぞ――

「嫌な月ね・・・」

武子は部隊のオフィスの窓から空を見つめる。

彼女の見つめている空には綺麗な蒼白く光る満月が浮かんでおり、その柔らかな蒼い輝きで地上をこの世のものとは思えぬ程美しく照らしていた。

しかしその幻想的な美しい光景も、武子のその黒曜石を思わせる黒く美しい瞳には、月に照らされている世界が酷く脆い虚構の世界に見えてしまっていた。

少し前まではこの夜空が優しくも美しく感じられていたはずなのに、今ではその優しさが酷く脆いガラス細工のようで・・・・・ちょっとしたことで今の温かみを感じる幸せな日常が壊れてしまつのではないか?という不安に駆られてしまつ。

そんなふうに一人窓の空を見上げていると……

「 窓辺に立つて満月を見上げる一人の少女か……ふむ、絵になるな」

「 ラル」

入り口の方から声がし、そちらに振り替えるとそこにマグンドュラ・ラルがいた。

「 まだ寝ていなかつたのか？……もう一時を回つてゐるんだぞ？」

ラルの言う通り、壁に掛けられた古ぼけた時計の短い針は確かに一時を指しており、基地全体が静まりかえっていることからも夜が更けていくことがわかる。

そんな夜が更けきつている間にナイトウィッチでもなく、普段から規則正しい生活を心掛けている武子が起きているのは確かに珍しい事であった

「ラル」や・・・こんな時間にビリしたの？」

だが、その規則正しい生活を送っているのは何も武子だけではない。

武子の目の前にいるラルもきちつと規則正しい生活を送る人間の一人で、その彼女がこうやってこの時間に起きているのであるから彼女も人のことは言えず、珍しい事この上ない。

「いや・・・なかなか寝付けなくてな、気分転換にコーヒーでもと思つてな・・・武子も飲むか？」

「じゃあ、お願ひしてもいいかしら？」

「わかった」

そうして給湯室に向かうラル。

しばらくしてラルはカップを一つ持つて戻ってきた

「ほり」

「ありがとう」

ラルから「コーヒーを受け取り、口に運ぶ。

「……おいしいわ、ラル」

「それは何よりだ」

互いに微笑む二人

「…………」

「…………」

しばりべー一人は言葉を発することなく淡々と「コーヒーを飲み続ける

「…………なあ武子」

その静寂を破ったのはラルだった

「優刀^{あいの}は今日も戦つてゐるんだな・・・・・・」

「ええ・・・・・・」

そう、優刀^{かれ}は戦つてゐる

どこの誰とも知れぬ者を、同じ?人?から護る為に・・・・・

「歯がゆいな・・・・・・」うしてただ待つてゐることしかできな
いとは」

そう、いつもやつて一人で夜を明かすのは一度や一度ではないのだ。

以前から優刀に対しても今回の様な任務に謎の襲撃者からの対象を護る任務が舞い込んでくることが度々あり、その度に一人はいつもやつて夜を徹している。

そして、ただ待つてゐることしか出来ないのが一人にとつては歯がゆくてしょうがなかつた。

「そうね・・・けど、優刀は？それ？を望んでなんかいない」

過去に一度だけ共に連れて行く約定言つたことがある

けれど、そのとき彼は頑としてその願いを聞かず、その理由を聞いた彼女達に彼は一言だけ答えた

お前たちは？人々？の？希望？なんだ

そう言って彼は出て行つた。

その言葉に込められた彼の気持ちが嫌というほど分かつてしまつた彼女たちは彼に詰め寄ることはしなかつた

そう、？私？達は人々の希望でなければいけない。

ウイッチ

だからこそ、彼は人を傷つけるような事を私たちにさせたくないなかつたのだろう・・・

「まったく、人の気も知らないで・・・あいつは好き勝手やるから困る」

そう、ラルはふてくされたように言つ。

その顔を見て武子は苦笑する

「ふふ、そう言わないの・・・私たちに出来るのは、彼が帰ってきたときにこつものように笑顔で出迎えてあげる事だけなんだから」

「それはそうだが・・・ああ、まったく！　いい女を待たせるとは・・・あいつは女を泣かせるのだけは本当に上手いな」

「ふふ、そうね」

そう、私たちに出来るのは彼が帰ってきたときに笑顔で出迎えてあげる事

だから、彼が無事に帰つてくのことを祈る

う

「貴様・・・いつたい何者だ」

優刀は突然現れた襲撃者を睨み付ける

「ああん？ 知らねーのかよ、悪の組織の一人だつづーの！」

そういうて、異形のHISのパイロットはその口端を釣り上げる。
パイロットのその容姿が整っている分、その笑みは一層不気味だ
った。

「その悪の組織は随分と人材不足なんだな」

「・・・ああん？」

優刀の一言にパイロットは今度はその眉根を釣り上げる

「お前程度の二下がヒヒパイロットなんて……その悪の組織の程度が知れるな」

そういうって優刀はふつ…と鼻で笑った

「てめえ……このオータム様と?^{ファンタム・タスク}亡国企業?^{ファンタム・タスク}に喧嘩売るとほいい度胸してんじゃねえか」

「そうか、やはりお前たちは?^{ファンタム・タスク}亡国企業?^{ファンタム・タスク}だつたか」

「！－！　てめえー嵌めやがったな－！」

その女　オータム　は自身が嵌められたことに氣づき、怒りを露わにする。

しかし優刀はその怒りもどこ吹く風、さらに続ける。

「この程度の事にも気づかないなんて……やはり二下だな」

「てめえ・・・ガキの癡にふざけた真似しやがつて！ てめえ
もこつらみたいにミンチにしてやうあつ・・・」

オータムはそう叫ぶと背中から生えた八つの装甲脚・・・その先端が割れるように開き、中から銃口を見せる

「うーーー」

その銃口が見えるや否や優刀は横に跳ぶ

直後、それを鉛色の雨が襲う

「はつはあーーー おうおらあー 逃げる逃げるおーーー」

オータムは優刀の後を追うよつに、実弾射撃を行つ

優刀は何とか追いつかれまいと横に駆け続ける

そして、優刀が避け続けているとオータムは手にマシンガンを呼び出し、優刀に向けて放つ

先ほどよりも密度を増した鉛弾の豪雨が優刀を襲う

「おらおらあー！さっきまでの威勢はどうした！？逃げてばかりでよー！そんなんじゃあたしに殺されちまつだあー…？」

それを避け続ける優刀

「・・・ふつ！」

防戦一方の優刀・・・

躊躇続ける最中、突如優刀は手に持つ扶桑刀を神速で地面をえぐる様に勢いよく振りぬく。

衝撃で土砂が巻き上がり、剣を振ったことによって生じた衝撃波と共にオータムに襲いかかる。

「はつ……馬鹿があ！　田ぐらまじのつもつかー…？」

たかが土砂……

そう思つたのが彼女の命取りであつた

「がつはあつ！？」

突如、オータムの体に痛みが走る

その土砂はEHSのシールドバリアーを突き抜けてオータムに襲い掛かってきた

肉体は絶対防御という機能で守られている為に傷つきはしないが、
その痛みまでは消してくれない

その事実に彼女が驚愕していると

「なつ！？」

突如、その目の前に優刀の姿が映る。

そして・・・・・

紫電一閃

優刀は扶桑刀を右に薙ぎ、オータムの体に衝撃が走る

「ぐうつー?」

「つ、浅い・・・・」

その場から飛び退くオータム

その表情は困惑と驚愕、怒りがない交ぜになつて醜く歪んでいる

「…………てめえ、一体どんな手品使いやがった

「…………」

オータムの殺意を込めたその問いに優刀は何も言わず、ただその蒼白い輝きを放つ刀を構え、殺意を持つて答える。

「てめえ、何者だ！？ 答えろ！…！」

「…………扶桑国空軍遣欧部隊第281航空隊隊長、並びに義勇統合戦闘飛行隊隊長、緋村優刀だ」

優刀は刀を鞘に納める

そして左足を後ろへ下げ、腰を軽く落とし、左手は腰に差した鞘を掴み構える…………

その構えを取った瞬間、優刀から今までとは比べ物にならないほどの殺気が放たれオータムを包む。

それは殺~~死~~とこいつは~~死~~に一線を画する。

「つ・・・・・！」「くそがああああつ・・・！」

身に走る恐怖に耐えきれなくなつたオータムはその根源である者を亡き者にすべく、跳ぶ

畠に舞ひ影・・・・・

「がああああああつーーー?」

聞こえてくるのは血身の悲鳴・・・・・

そして、オータムは畠を舞ひ・・・・・

はじはじと、黄色と黒の破片をまき散らしながらの血は落ちてい
いく・・・・・

何が起きた?

オータムには理解できていなかつた。

自分は奴を殺すために跳んだのではなかつたのか？

確かにいま自分は跳んでいる けれど、そこには鋭さなくた
だ自分は墜ちて行つてゐるだけだ

視界の端にはあの餓鬼の背中が映る……

なぜ、後ろ姿なのだ？

自分は真正面にいたはずだ

いくら考へてもオータムにはその理由が解らなかつた。

そして、オータムの体は地面に叩き付けられる。

「がはっ！…」

その衝撃がオータムに襲い掛かる。

しかしその痛みは先ほどの痛みとは比べ物にならないほどあり、
意識が飛びそうになる。

「あ・・・・げ・・・・・」

(なぜ、絶対防御が発動しない?)

もうおつとしたが、言葉がうまく出ない

それどころか、全身の感覚がない・・・・

動かせるのは皿ぐらいである・・・

「やすがはエヒの絶対防御だな・・・・・・あの一撃を食いつて
もまだ生きっこねとは」

「・・・あ、が」

声のする方に皿を向ける・・・しかし首も動かせないので眼だけ
がそこに向く。

視界の端に足が見える

「まあ、死んでいない方がこちらにも都合がいい……これが
基地でいろいろとしゃべつてもらひ、覚悟しろ」

「…………な…………せ」

「ん？」

「な…………ぜ…………て…………え…………れ…………い…………？」

なぜてめえが生きている

そう言葉にじよひとしだが、言葉にならなかつた。

だが、彼には云わつていたよひで……

「俺が貴様を斬つたからだ」

そう答えた

拔刀術・・・・・

それが優刀がオータムに放つた一撃の正体である

拔刀術・・・・・それは刀を鞘に納めた状態から抜き放ち相手に一撃を加える術であり、その最高度にまで高められた刀を抜くまでの体術の精妙さは極めて洗練された剣術で知られる扶桑剣術の中でも最高峰であり、一つの到達点とされている

その鞘走りからなる斬撃の速度と、強力無比な一撃の反面、外してしまつと無防備になる為、使い處の難しい極めて高度な技術である。

そして、その拔刀術は扶桑剣士の中でも指折りの実力を持つ彼が最も得意とする技であり、彼の流派の真髄である

優刀はオータムが飛ぶと同時に拔刀術の一撃を放った。

その一撃は彼女のISのシールドバリアーを裂き、絶対防護を極限まで発動させた。

しかしそれでもなお、その衝撃は収まることなくオータムに襲い掛かり、彼女を墜としたのだ。

「く・・・・・そ・・・・が・・・あ」

睨み付けるオータムの視線を無視し、その身を持ち上げようとする優刀

そこへ・・・・・

突如、優刀に向けて一つの赤い閃光が襲い掛かる

「つう！？」

間一髪、察知した優刀は飛び退くことでそれを避ける

しかしそのあとを追つようにな閃光は次々優刀に襲い掛かり、ついには彼を捉える。

「くっ…！」

障壁を展開し防ぐ

閃光が現れた方に目を向ける

鬱そうと生い茂る木々の間をその速度を落とさず飛来する青い
機体

その間にも優刀への攻撃を辞めずにオータムとの距離を広げさせる

「迎えに来たぞ、オータム」

その青い機体はオータムのそばに降りる

「て・・め・え・・・・な・・ぜ」

「あの？女？からの命令だ……作戦は失敗した、退くぞ」

そういうて、謎の襲撃者は優刀の方に顔を向ける

しかしその顔はバイザーに覆われていて口元しか見えない

「緋村優刀……貴様はいづれ私が殺す」

その言葉に込められた明らかに殺意……それを感じた優刀は同じように殺意を向ける

「貴様……何者だ？」

「答える必要はない……ではな」

「・・・つ待て！！」

そういうてオータムを掴み、飛翔する青の襲撃者はそのまま満月の夜に溶けていくように消えて行つた・・・

「…逃げられたか

襲撃者が飛んで行つた方を睨む優刀、そして

「そこにはいるのはわかっている、いい加減出できたりどうなんだ？」

ある一本の木を見据える

その後ろから出でてきたのは・・・・・

「あら、ばれちゃつた

自身の部下である更識権無、その人がいた。

「すごいわね、結構自信があつたんだけど・・・・・いつ気づいたの
？」

「あの青い襲撃者が来たあたりだ・・・・・もう一つよく知った気
配を感じたからな」

「そう・・・さすがね緋村優刀ね、なんだか私がここに来た意味

が無くなっちゃうわ

楯無がここに来た理由……それは優刀と同じだらう。

彼女の家は代々、暗部に対抗するための暗部、そして彼女はその家の当主という事を優刀は知っている

「いや、そうでもないわ……」

優刀は刀を振り、その刀身についた血を落とし鞘に納め、息をはく

その場に漂っていた、言ひようもない重い空気が消える。

「更識は内部の警備に当たっていたんだろ？　おかげでこいつは遠慮なく戦えた」

そういうて穏やかな笑みを彼女に向ける

「やう……」

その笑みに更識は同じよつて穏やかな笑みで返す。

「やつやつて返したもの、更識の内心はかなり動搖していた

全くこの男は……どうこう笑顔を簡単に人に向けるのだらうか……

氣を抜くと一瞬でその笑顔に落とされてしまつではないか。

ラルが女たらしと言つていたことが良く分かる。

「……それにしても驚いたわ。まさかISを生身で倒しちゃつなんて」

内心の動搖を悟りまゝと本口一番の珍事に話題を変える

ISを生身で倒す……

ISが世界最強の兵器として認識されている今、目の前で起きた

出来事はそれがいかに幻想かという事を知らしめた。

無論、更識とてEISが強力な兵器であつて絶対無敵な兵器ではないと分かつてはいるものの、ウイッヂであつてもまさか生身でEISを倒す人物が現れるとはさすがに思わなかつた。

それこそ奇想天外、青天の霹靂としか言いようがない。

しかし、それに対して優刀は・・・

「いや、今回はこっちを侮っていたから勝てたようなものだ。もう少し向こうが冷静だったら、こっちが殺されていた」

そう優刀は淡々と答える。

「そうね・・・」

更識は優刀の言葉に同意するように頷く。

今回はたまたま運が良かつただけだ。相手がこっちをなめてかか

り、優刀はその隙をついて一気に圧倒したに過ぎない。

実際、敵は空を飛んで上からじつへつと長期戦に持ち込めばよかつたのだ。

もちろん、その対処方法もあるにはあつたが、それを使うのはあくまでもどろにもならない時、最後の最後、いわば奥の手であり、それを使わなくて内心ほつとしている。

そしてさすがにもう一機出でた時には覚悟した。

そのまま戦闘を続けていれば、間違いなく優刀は殺されていた。

いかに優刀といえども、一機IJSを相手にするのはさすがに無理がある。

ましてや敵はアウトレンジから攻撃してきたため、生身の状態では相性が悪すぎる。

そういう訳で敵が退却してくれたことは行幸、あるいは奇跡とか言いようがない。

それでも・・・と更識は思つ。

「それでも、やはりすごいわ・・・・・すがは最強の剣術、
飛天御剣流の使い手ね」

「…………知つていたのか？」

「ええ、もちろん」

そして更識は語りだす……

「飛天御剣流…………戦国時代に端を発する古流剣術で。その名が示す通り、その使い手は天空を飛翔するかの如き跳躍力を持つて相手の遙か上空から斬撃を放ち、その身のこなしや斬撃の速さは「神速」とまで謳われる最強の剣術。ああ・・・でもまさか幻とまで云われる剣術を使っている人には会えるなんてびっくりだつたわ！」

「随分と詳しいな、おい」

嬉々とした様子の更識に優刀が少し引いている

それはそうだろう、まさかここまで更識が熱を上げて饒舌に話すのだ。

はだから見ればティープな格闘マニア以外の何ものでもない。

「それにしても、さつきの抜刀術すごかつたわ～。まさかあんな

一瞬で間合いを詰めて敵の懷を一閃、その衝撃に相手は宙をに浮いてしまつんですもの、その威力は推して図るべしねー。」

引いている優刀を氣にもせず、更識はそのボルテージを上げていく。

そんな更識を放つておく」と云した優刀はある方へ田を向ける。

そこには先ほど、オータムによつて肉塊へと変えられた兵たちの亡骸があつた

「隊長・・・もしかして、後悔してる？」

いつの間にやら素に戻つた更識がそう聞いてくる

「・・・後悔なんてしてないや」

正確には優刀が殺した訳ではないが、そうなつた要因の一つは自分にあると優刀は思つてゐる。

「・・・・結果はどうあれ、俺は彼らをこの手で斬つた、その事実は変わらない。であるならば、そのことを後悔するなどあつてはならない・・・・彼らの命を奪つてきた以上、その行動には責任を持つべきだ・・・・そしてそれを罪とと思うなら、彼らの命を奪つたことは決して無駄ではなかつたと、より多くの人々を救うことで示していくしかない・・・・と俺は思つてゐる」

そう優刀は淡々と語る。

「そう・・・よかつた」

そうしてまた更識は優刀に微笑みかける。

「ん、どうしてだ？」

「だつてあなたはちゃんと自分のした事と向き合つてゐる。己の罪を認め、どう贖罪をしていくかひつとその答えを持つてゐるんだもの」

彼は優しい少年だ。

そのことを改めて更識は感じた。

彼はどこまでも優しくて、そして強い。

これが緋村優刀。

これが扶桑最強の剣士

力だけでなく、その心までが強くそしてきれいだ。

そう、更識がしみじみ感じていると、いくつかの明かりが見えてきた。

優刀が言っていた情報部の者たちだろう。

「さてと・・・帰るか

「ええ、そうね」

そうして一人はそちらに向かつて歩き出す・・・・・

不意に優刀が立ち止まり、亡骸に視線を向ける

そして・・・・・

「せめて来世では幸せに生きてくれ・・・・・」

頭上には蒼く光る満月・・・・・・・

優刀のその願いは、優しい蒼い光の中に溶けて行つた。

いかがでしたでしょうか？

すいません、実は最初から優刀に飛天御剣流を使わせよつとばずつと思つてたんです。

オリ主を書く以上はやはりかっこよくないといけないなーとか思つていたら、やはり剣術は外せないだろうとおもいまして・・・・で、結果最強の剣術とは?と考えたら一番に浮かんだのは飛天御剣流でした。

でも、さすがにものに出るのはいかがなものかな? とか考えてたんですけど自分で考えた技はどうにも優刀には合わず、結果開き直つて

- - - もういいじゃん、使っちゃいなよ you!!

・・・・・ と云うわけです。

飛天御剣流は技もそうですが、その流派の理が以外にもウイッチとの相性が抜群という事に気づきました。

次回は再びウイッチの話に戻ります。

最後に『ご意見』『感想の方、お待ちしています。

感想が来たら作者のテンションがキタ

(。 。)

！――！――！ つて感じに上がつて喜びますのでジャンジャン送
つてください

批判その他もうもうバッヂコイです！

それでは、また次回――！

追記・・・PV33・787アクセス、ニーークアクセス5、
248人

ありがとうございます！！こんなに見ててくれる人がいてくれて嬉
しくて嬉しくてしようがないです。
これからもがんばりますのでどうかよろしくお願ひします。

EPA-14 謙れない誇り（前書き）

ビハモシコウ禅です。

いつの間にか日付が変わっていました・・・

ところがEPA-14です

それではビハモー！

クラカウ攻略作戦を一週間後に控え、JG52基地ではその所属する者たちが日に日に慌ただしく動き回っていた。

整備班、補給班はもちろんの事、基地の管理を任せられている施設班も作戦に参加する部隊の受け入れ準備の為に奔走している。

もちろん義勇統合戦闘飛行隊の面々も同様で、本日到着する増援の受け入れの為に奔走していた。

「土田班長、整備班の方はどうですか？」

格納庫に赴いた俺は増援のストライカーコニットの受け入れの為に予備の発着台を準備している土田班長に聞いた。

「はい、発着台の準備も万端です。あとは彼女たちが来るのを待

つばかりです

「そうですか・・・補修部品の方は?」

「はい、あちらさんが使用しているのは少佐の?十一試艦上戦闘脚?の生産モデル、?零式艦上戦闘脚?ですから今日は補給の手間がだいぶ省けました」

「それは良かった」

そうして班長はつぶやく

「・・・・しかし零戦ですか、こっちにも回して貰いたいで
すね」

班長の言葉に頷いて同意する。

俺が使っている十一試艦上戦闘脚は名前からもわかる通り試作機であり、本国では既に採用モデルである零式艦上戦闘脚が量産され、リバウ航空隊を始めとする航空母艦所属の部隊に配備され始めている。

先日、同じように試作機のテストを受け持っていた武子の方は先行試作型の『隼』戦型から『隼』式型へと変わったというのに、まだ自分の方はいまだ試作機であるといつのは少し悔しかったりする。

ちなみに、俺が今使っているゴニーシートはテストが終了した後、俺と土田班長、フェデリカが精度の高い部品をわざわざ選んで、一から組み上げたエンジンをつみ、フレームも出来る限り強化したカスタムゴニーシートである。

おかげで出力は一割ほどアップしているのだが最近はネウロイの方も強力になってきており、十一試の出力の低さに頭を悩ませているのだ。

ある程度は技術でカバーできるものの、やはり新型が出力アップ型があるなら早く乗り換えたいといつのが本音だ。

しかし、一向こじらひぢら回つてくる気配はない。

まあ、ウチの部隊は空母所属の部隊では無い為、回つてこないのは当たり前なのだが・・・・

「俺もいい加減零戦にしたいんですけどね・・・・そうだ、いつその事エンジン付け替えるか?」

零戦は十一試のエンジンをより馬力のあるエンジンに載せ替えただけなので、やうひと思えば出来る事に気が付く

だったら、もつと馬力のあるマーリンでも乗つけようかな

うん、我ながら名案かも知れない

とか考えてくると・・・・

「マークリン乗つけよつとか勘弁して下せいや？・・・・・零戦のエンジンに付け替えるだけならいいですけど、マークリンなんか乗せたらそれこそ空中分解起こしますよ？ 何せ機体強度が弱いとこまで？オリジナル？と似ているんですから」

「・・・・ばれました？」

さすがは土田班長

だてに扶桑海事変から俺のユニットの整備を担当していくわけじゃない

考えていることがバレバレである

「いい案だと思ったんだけどな・・・・・おつたく、宮藤博士もなんでそんなところまで原型に似せるのかね、そんな必要ないだろう」

「いい人なんですがねえ……」

一人して設計者のあの人によそうな顔を思い浮かべる。

富藤一郎博士・・・・・

魔導エンジンの権威で、エンジン背負い式であつたストライカーコニットをエンジンをコニット内に納めるようにした理論「富藤理論」を完成させ、「ストライカーコニットの父」とも呼ばれている扶桑の研究者である。

その博士が開発したのがこの十一試艦上戦闘脚なのだが、なぜ短所までオリジナルに似せたのかはテストパイロットとして共に過ごした事のある俺にも今一つ理解出来ない。

今度あつたら文句の一つでも言ひてやるつ

そんなふうに一人して話していると・・・・・

「少佐！！」

格納庫の入り口の方から聞きなれた声がして、その方へ視線を向けるとそこには・・・・・

「マルセイゴどうした？ 弾薬の在庫確認は終わったのか？」

自身の一一番機である新人ハンナ・ユスティーナ・マルセイゴ少尉と一緒に在庫確認をしていたラルがいた。

「二人とも、在庫確認は終わったのか？」

「ああ・・・これがそのリストだ」

そう言つてリストを渡していく

「ありがと・・・やはり薄殻魔法榴弾が足らないな」

薄殻魔法榴弾・・・・・

その名の通り、魔法力を用いた炸裂弾でその威力は折り紙つきである。しかしその分製造が難しく、なかなか前線に行き渡らないといつ、一発が非常に高価な弾丸である

「ああ、フューテリ力もそつ脱つてロマーニヤ上層部に掛け合っているらしいんだがな、必要十分な数を揃えるのは厳しいらしい」

ちなみにこの薄殻魔法榴弾、使用できる銃が限られており、フューテリ力の使うMG151/Rの様な機関砲とでないと、発射時の衝撃に銃自体が耐えられないという非常に使い勝手の悪い、使う者に高い技量を求められる銃弾である。

「今ままだと精々一弾倉分が限界か・・・・・しちつがない

無いものを作れこれ言つてもしょうがない、どのみち使つのはいつもMG151/Rを使つてゐるのはフェデリカのみで一弾倉であれば彼女ならどうにかなる。

すでに申請はしてあるので作戦までに十分な数が間に合つようであれば無駄撃ちをしないラルに使つてもらおう。

「そうだ優刀、お前にお客人だ」

ふと思い出したようにラルがいい、入口の方を指さす。

「俺に？・・・」

ラルに促されそちらを見る

腕を組み、入り口に片膝を立てて寄りかかる見慣れない制服を着

た少女がいた。

あの制服は確か

「やつと見つけたわ、緋村優刀」

ふつと小さく笑みを漏らし、その頭のツインテールが揺れる。

「ひりに視線を向けようとするが・・・・・・

「嬢ちゃん、通行の邪魔だっ！…さつさとひいてくれ…！」

「…、「めんなさい…！」

外から大きな荷物を運んできた整備員に怒鳴られ、すうすうと退く少女。

さすがは現場叩き上げの整備員、そんじよそひひのじみつきとは迫力が違う

整備員のその迫力に先ほどの氣取つた雰囲気とは打って変わって完全にビビッていている

普段は氣のいい整備員の人達も、今は大きな作戦前で皆氣が立っている。

そんな中、入り口であんなふうに立たれいたら邪魔以外の何ものでもない。

怒られたのがよっぽど怖かつたのか、他の整備員の邪魔にならないようにそそくさとこちらに歩いてくる少女

少女は扶桑人とよく似ているが微妙に違う。扶桑人の温和で誠実さを感じさせる瞳とは似ていて非なるもので、その瞳は鋭角的で艶やかさを感じさせる。

体からはあふれんばかりの活気がとらえられ、彼女のイメージを表すとしたらズバリ、雌豹といった所である

「ん、んん！・・・久しぶりね優刀。元気そうで何よりだわ」

氣を取り直してまたさつきの氣取つた口調で話しかける

けれど、その姿はエディータと同じくらい小柄な体格の所為で背

伸びした子供のようである。

その少女を見て俺は・・・・・

「・・・・・どちら様で?」

そう返すのが精一杯だった。

「へ?」

少女が呆けた顔をしている。

どうやら、彼女は俺のことを知っているようだが俺の方はまるで覚えがない。

どこかであつただろうか?

今一思い出せない。

「ちよ、ちよっと……私よ私！、覚えてないのー？」

「うーん、人の顔は一度見たら忘れない方なんだけどな……。
済まない覚えがない。どこかであつたか？」

「そ、そんな…………」

少女は田に見えて落ち込む……。

彼女には悪いが本当に覚えていないのだからしようがない。

「おい、優刀。思い出してやれ、いくらなんでもこの姿はいたた
まれない」

その姿を不憫に思つたラルに思い出すよつせかされてしまった。

「そんなこと言われてもなあ・・・」

すると・・・

「ま、まあ会ったのはもう5年前だもんね、覚えてなくても当然だわ！」

そう結論付けて少女は復帰する

立ち直り早いな・・・

「私の名前は凰 鈴音・・・」IS中連国家代表候補生よーーー。」

「凰 鈴音・・・おお、思い出したー。」

その名を聞いて思い出す。

彼女の名前は凰 鈴音

扶桑の西南に位置する国、中華人民連邦の出身で小学四年の時に

実家の近所に転校してきてよく遊んだ仲であった

「よつやく思に出したの……一体、同級生をさむとかどうこうひ頭しているわけ?」

「……いや、そんなこと言われてもな

彼女が転校してきたのは小学4年の春^{しゅん}……その年の秋に俺は全寮制の軍付属小学校に転校してしまったために実質一緒に学校に通っていたのは二ヶ月ほどで、後はたまに外で会つたり、だったんで覚えていふところが無理だな。

「まあいいわ、思いで出してくれたわけだしね

「いや、悪い悪い……でも小学生の時は思ひ出したことないんだじやないかな

「まあ、あなたの場合はいつも小学生の時は思ひ出したことないんだじやないかな

じやないか許して貰おうよつだ。

やう言えば、ここつせさせました奴だつたな……話しているうちにどうぞと思ひ出しつづく。

「それで鈴、お前いつの間に代表候補生なんかになつたんだ？」

「アンタこそ、何、ウイッチ部隊の隊長なんてやつてる訳？——
コースで見たときはびっくりしたじゃない」

「ま、こりこりあつてな。話すと氣へなるんでそのうちにな

そんなふうに一人で話していると……

「優刀、いい加減に私たちの事も紹介してもらつていいか？」

「ああ悪い……鈴、彼女はつちの部隊のウイッチ、グンドュラ・
ラル」

「グンドュラ・ラルだ……気軽にラルと呼んでくれ

「鳳 鈴音よ……私の事も鈴で構わないわ、よろしくね

そう言って二人は握手を交わす

「でこつちが……」

「……ハンナ・ユスティーナ・マルセイゴだ。？少佐？の二番機を務めている」

やけに俺の一番機であることを強調して自己紹介をするマルセイゴ

「ふうん、そうなんだ」

鈴は「マルセイゴをじらじら留定めするよ」に見る。

「初めまして、よろしくね」

「ああ、じゅりーか」

そして挨拶を交わす二人の間で火花が散ったような気がした。

「ほら、一人ともそこまでにしておけ……それで鈴、お前は優刀に何か用があつたんじゃないのか？」

「ああ、そうだったわ！ すっかり忘れる所だったわ」

ラルの言葉で鈴は用を思い出したのか俺に尋ねてきた

「ねえ優刀。アンタの部隊って今隊員が十一人って本当？」

「そうだが、それがどうかしたのか？」

「お願い！！ 私も部隊の一員として今度の作戦に参加させてつ

「！」

そう言つて、バシンと手を合わせて挙むように頼んでくる鈴

それに対しても俺は・・・

「ムリダナ」

「早っ……！」

人差し指でバッテンをつくり即答。

「ちよつと……いくらなんでも速すぎでしょーもつちよつと考えるとかない訳！？」

さすがに納得できなかつたのか鈴は詰め寄つてくる。

「いや、今回はもうすでに増援を手配済みでな。増援合わせて14人・・・・さすがにこれ以上は戦力過多になるから俺の指揮下には置けない。」

「そこを何とか！？」

さらに深く押む鈴。

「て、言われてもなあ・・・大体なんでわざわざそんな頼みをしてくるんだよ？ む前のほかにもIISは来ているんだろ？」

さすがに鈴一人でこの作戦に参加するとは考えられない、ほかのIISも来ている筈だ。

その者達は今回作戦に参加しようとはしないのか？。

代表候補生で欧洲に派遣されているといつ事は専用機のデータ取りもかねてなのだろうから余計に部隊単位で動くべきだろ？。

そんな疑問を感じていると鈴が観念したように口を開く。

「・・・実はもともと中連は^{わたしたち}ブラーク攻略作戦に参加するつもりだったの。けれど向こうの作戦司令部に行つたら今回の作戦にIIS部隊は要らないって言われて追い返されちゃったのよ」

「・・・なるほどな、それでこっち？」

「ええ、でもこっちでも似たような反応でね・・・作戦の総予

備部隊として運用するつて、言われたわ。」

なるほどな・・・

ロンメル将軍のその判断は正しこと感づ。

IISのパイロットは戦闘機パイロットやウイッチ達と比べると明らかに稼働時間が少なく、鍛度が低い。

代表候補生と言われる者たちもその例にもれず、前線ではその鍛度の低さが指摘されてきた。

鍛度の低い兵がいるといふのは戦場では弱点以外の何ものでもない。

だったら、予備部隊として後方で待機していくも良つた方がよほどいい。

「でもそれじゃ国としての面子が丸つぶれだから何とかして作戦

に参加させてくれって言つたら・・・何とか専用機持ちは前線に立たせてもらえたことになつたんだけど・・・

「何処の部隊も専用機を扱いたがらないという訳か・・・」

「ええ・・・」

実際、土壇場で入れると言われば、かなり嫌がられる。

IHSを部隊でどう扱えばいいのかといつのも問題の一つなのだろう。

更に専用機と言えばいろいろ特殊である為に特にである

だからIHSとの混成部隊であるしぐて何とか入れてもうまうとうたのだろうが・・・

「でも、やっぱり無理だ。」

今回、あの超大型ネウロイ?山?がいる

俺達はその山を破壊する挺身部隊である。

高度な連携が求められる以上、そこに不確定要素を入れたくない
というのが本音だ。

「ああもう……どうすればいいのよー！」

がーっと叫び声を上げる鈴

・・・そこへ

「・・・済まない、緋村少佐はいるか？」

入口の方から毅然とした澄んだ声が聞こえ、

JG52第一飛行隊隊長、ゲルトルート・バルクホルンが現れた

「トゥルーデ、どうかしたのか？」

「ああ、作戦の細かい確認をしておこうと思つてな、お前達の露払いをするのが我々の任務だからな、不備があつてはまずい。」

相変わらず生真面目な奴だ。

もう思つてこないと……

「優刀、彼女は誰だ？」

トゥルーテは鈴に目を向ける

「ああ、彼女は……」

「初めまして、私はIAS中連國家代表候補生の鳳鈴音よ、よろしく

しく

「ゲルトルート・バルクホルンだ。よろしく

挨拶を交わす二人を見てふとあることを思つぐ。

「そうだトウルーテ・・・確かに前の部隊一人欠員出てたよな?」

「ああ一人風邪をこじらせてな・・・今は後方で療養している」

「だったら、鈴をトウルーテの部隊に入れてもらえないか?」

「・・・・・どうこう」とだ?」

トウルーテに事のあらましを説明する

「なるほどな・・・事情は良く分かった」

そう言つてトウルーテは頷く

「え・・・じゃあつーーー！」

鈴の顔に喜色の色が浮かぶ。

「済まないが・・・私たちの部隊に入れるわけにはいかない」

トゥルーデは冷たく言い放つ。

「そんな・・・・・」

「今回の作戦いかんでは歐州の運命が決まる・・・そんな作戦で不確定要素の多い者を入れるわけには行かない」

「だらうつな・・・」

「ちよつと優刀！最初からわかつてたのーーー？」

鈴にものすゞじ形相で睨まれる。

田にはいつすうじと涙が見える

それはやうだらう、はたから見れば俺は鈴にて希望を持たせとて
思いつきつづん底にたたき落としたのだ我ながら酷いことな思ひ。

だからこそ俺は彼女に？ある提案？をする。

「だからトゥルーデ・・・・・一つ提案があるんだが」

「なんだ？」

「一回、じこつの戦いぶりを見て決めたらどうだ？」

「なんだと？」

「一回、じこつの戦いぶりを見てから決めても遅くはないんじゃ
ないか？」

要するに実力が分からないから扱いに困るわけで、だったら実力

を見せてしまえばいい……

それで実力が無いようであれば断ればいいし実力があると思つたら
使いえばいい

至極単純なことだ

「なるほど……よし、いいだろう」

トゥルーテは納得したように頷く。

「決まりだな

「早速、準備してくれる」

やう言ひて格納庫を出て行こうとするトゥルーテ……

「うよつと待つた

その背中を声をかけることで止める

「なんだ、まだ何があるのか？」

「おおあつだ・・・・・お前が戦つてどうする

「実力を見るんだ、自分で戦つてみなべどうする

至極真つ当な意見を言つトゥルーテ

しかし・・・・

「鈴、お前工の稼働時間つてどれくらいだ？」

「えっと・・・300時間ぐらいかしぃ」

やつぱり・・・思つた通りだ

「・・・優刀、本当に使えるのか?」

かなり訝しむトゥルーテ・・・

戦闘機パイロットにしてもウイッヂにしても前線に出でている新人で総飛行時間が300時間程度という新人はまずいない。
だからこそトゥルーテは訝しんでいるのだが

「俺にもわからないから見てみるんだ」

百聞は一見にしかず・・・

とりあえず見る。

話はそれからである

けれど300時間程度の新人が、カールスラントでも指折りのエースであるトゥルーテ相手に勝負を挑んでも瞬殺されるのがオチだ。

だつたら、もつと技量が近い者で全力を出させたほうがいい

だから・・・・

「マルセイユ、お前が相手しろ」

傍にいる自身の一一番機、マルセイユに声をかける

「ええええっ！？ 私が相手するのか！？」

まさか自分が戦うとは思つていなかつたのか、マルセイユはかなり驚いている。

「お前がどれくらい成長したか確認したかったからな、ちょうどいい機会だ・・・マルセイユ、俺の一一番機ならこの程度の試練乗り越えて見せろ」

「少佐・・・・・

その俺の言葉にマルセイユは頷く

「そこまで言われたらしようがないな…いいや、やつてやるー。」

「上等じゃない、やつてやるわよ…・・私が勝つたら作戦に参加
させてくれるんでしょうね?」

「ああ、貴様がマルセイユに勝つた時は私の部隊に入れて作戦に
参加させてやる」

「ふ、ふふ・・・」

「ふ、ふつふつふ・・・」

火花を散らす二人・・・・・

一人には互いに譲れないプライドがある。

その二人の互いの誇りをかけた戦いが、今始まるつとしていた・・

Ep・14 謙れない誇り（後書き）

セカン党のみなさんお待たせしました。

鈴、満をして登場です

クロスである以上、きちつと原作キャラ同士の絡みも書かねばいけないなあと思いまして原作を読み返したところ、

鈴の意外に冷静な部分を発見しまして、予定より早い登場という事となりました。

原作を読み返したおかげで危うく鈴は唯のかませ犬になる所を何とか脱出しまして個人的には良かつたなど・・・

というわけで次回はマルセイコ対鈴です。

次回はバトルメインで書きたいなと思います！

最後になりましたがご意見ご感想、お待ちしています！

ではまた次回！！

どうもシユウ禅です。

遅くなってしまい申し訳ありません

ではどうぞ！

太陽がJG52基地の真上に上った頃、

基地の滑走路には模擬戦の話を聞いて集まつた大勢の人だかりが出来ていた。

人だかりの視線の先には一人の人物。

マルセイユと鈴だ。

マルセイユはストライカーユニット、メッサー・シャルフBf109-Eを装備して、

鈴はIS『甲龍』^{ションロン}を身にまとい、模擬戦開始の合図を待つてゐる

鈴のIS、『甲龍』^{ションロン}は更識やフェデリカのISの無駄のない洗練されたフォルムとは違い、非固定浮遊部位の棘付き装甲^{バイク・アーマー}が特徴の攻撃的で無骨な印象の機体だ。

「ルールは単純、鈴はシールドエネルギーが零、マルセイユは規定値以上の魔法力使用で撃墜判定とする。装備は自由！同高度でそれ違つた時点から模擬戦開始よ」

「了解ッ！」

審判は例によつて武子

ルールを説明すると彼女は一足先に上空へと飛翔する

「では、始め！！」

優刀の開始の合図とともに二人は蒼穹へと飛翔する。

「さて・・・どっちが勝つかな

一人の駆けあがる姿を見てラルは咳く。

「・・・・・」

その二人をじっと睨むトゥルーデ。

「・・・・トゥルーデ不満そうだな？」

「・・・・そんなもの別にない」

その声には若干のいら立ちが含まれていて不満があることは誰の目に見ても明らかであった。

「やれやれ、まったくいい加減にしたりだつた？ 焼きもちなん

てらしくないぞ？」

ラルはからかう様にバルクホルンに笑みを向ける

「なつ！！ だ、誰がマルセイユに焼きもちを焼くか！！：私は
ただ、マルセイユが未だに軍人をやつてるのが信じられないだけだ。

L

「また、ずいぶん前の話を……」

「優刀はあんなチャラチャラした奴の 一体どこが気に入つたんだ
？ それこそ信じられん

ドンドンふてくされていくバルクホルン。

その姿を見て、ラルは思いつきりからかいたい気分であつたが今は置いておく。

「はつはつはつはつは！！ 確かにぶつ飛んだ奴ではあるな・・・・配属初日に他の部隊の模擬戦に乱入する大馬鹿者なんて早々いない」

当時のことと思い出し、大笑いするラル

ハンナ・コステイーナ・マルセイユ・・・

義勇統合戦闘飛行隊に所属する新人でその入隊にはひと悶着あつたのだ。

彼女は本来はバルクホルンの部隊」G52第一中隊に所属する筈であったのだが、配属初日に他部隊である義勇統合戦闘飛行隊の模擬戦に突如乱入り、隊長であつた優刃に模擬戦を申し込むといふでもないことをしでかしたのだ。

「本来ならとっくに辞めさせられていたんだぞ？ それをお前たち一人は辞めさせないように嘆願するなど・・・・あんな奴の為に頭を下げるお前たちが信じられん」

「なに、せつかくだから義勇統合戦闘飛行隊に貰いたいといっただけだ」

飄々と返すラル。

返されてしまつてさらに不貞腐れるバルクホルン。

「・・・・ま、配属時にはいろいろ問題があつたのは確かだが今は特に問題も起こしていないじゃないか

」

「確かにそうだが・・・・優刀に氣に入られるために猫を被つているだけかもしれないだろ！うん、そうだ、きっとそつに違いない！」

やつぱり焼きもちを焼いているんじゃないかな・・・・

そう言つてやううと黙つたが、ラルは面倒なので止めた

「まあ、氣持ちはわかるがな・・・・真面目な話、これからはあいつ奴が必要になつてくる」

「確かに空戦技術は大したものだと思つが、お前が一番機の座を明け渡すほどではないだろ？」

バルクホルンの言う通り、マルセイユ達新人が配属される前に優刀の一番機に就いていたのは他でもない、目の前にいるグンドュラ・ラルであった。

「欧洲でも五指に入るお前たちが目をかけるほど腕を持つているとはとても思えん」

「なにもそれだけであいつを優刀の一一番機に押した訳じゃないさ」

「…どう意味だ？」

構わずラルは続ける。

「…からの時代、ただネウロイを倒すだけでは人々に希望は与えられない。もっと確かな希望が必要なんだ。人々に生きる希望を与える太陽みたいなやつが必要なんだ。あれには華があるからな…・磨けば化ける」

「だからお前は優刀の一一番機の座を明け渡したのか？」

「あれは周りがどうこう言つよりもきちつとした道しるべを示してやる方が伸びるタイプだ。優刀の背中を追わせた方がまっすぐ成長するや」

どこか自嘲するような笑みをたたえ、ラルはそう語る

そのラルの確信めいた口調にバルクホルンは押しだまる。

「 ま、なんにせよ、その判断が正しいかったのか、そうでなかつたのかはこの模擬戦で分かるわ・・・」

そう言つてラルは上空に目を向ける。

バルクホルンもラルに従い空を見上げる。

そこでは、件の二人の空中戦が激しく繰り広げられていた・・・

「はあつーー！」

掛け声とともに鈴がその手に持つ青竜刀マルセイコに突撃、一気に振り下ろす。それをマルセイコはシールドを斜めに展開することで突撃の勢いを乗せた青竜刀の軌道を逸らす。そしてマルセイコはMG52をすれ違いざまに放ち鈴から距離を取る。

至近距離で攻撃を受けることとなつた鈴はそのシールドエネルギー

ーを大きく削られ体勢を崩すがPICOでぐて体勢を立て直す

鈴は通り抜けたマルセイコの後を追い、その背中に青竜刀を振り落す

その攻撃をマルセイコは左にロールすることで避ける

「せひむせじなー！」

「やうこつお前ー..」

「はあつーー..」

一人は絡み合つ様に上空へ昇る・・・・・

鈴はもう一刀青竜刀を呼び出しそれを連結、高速回転させてマルセイコに向けて青竜刀を振る。つ

それを障壁で受け止めるマルセイコ。

しかし、回転の威力を加えられたその連撃にマルセイコは徐々に推され始める

(く、さすがに近距離格闘戦はこちうが不利だ。ここの距離を取つて)

マルセイコは牽制弾を放ち鈴から距離を取ろうとする。しかし・・

「　　甘いわッ！　！」

突如、一非固定浮遊部位のカバーがスライドして開き中の球体が光った瞬間、マルセイコに殴られたような衝撃が走る

「ああっ！　！」

マルセイコはその衝撃に半ば意識が飛び、錐もみ上に落下する。

「クッ！」

何とか意識を取り戻して体勢を立て直し、墜落を免れる。

「今のはジャブだからね

不敵な笑みを浮かべる。

「△○！」

見えない衝撃がマルセイユを襲う。当たる直前に障壁を開くこと何とか防ぐが魔法力を大きく削られる。

形勢は一気に鈴の方へと傾きつつあつた

「ちよつと、なごみあわせ」

ラルとバルクホルンの二人から少し離れたところで模擬戦を見ていたエディータは呟く。

それに答えたのは皆が上空に目を向ける中、一人下を向きキー ボードをたたいているフェデリカだつた。

「？衝撃砲？ね・・・空間自体に圧力をかけて砲身を形成余剰で生じる衝撃それ 자체を砲弾にして打ち出す　なかなか中連もまたもな兵装を開発するじゃない」

「うんうんと感心したように頷くフヨーテリカ。

「え、 そうかしら？」

「何言つてゐるの、 少なくとも樋無の水を自由自在に操つていつよつよつまど現実的で堅実な兵装よ」

「私にはまだちもトシテモ兵器よ・・・」

会話の最中であつても二人のそれぞれの視線は動かされることはなく、エディータの視線の先ではおそらく見えない衝撃を避け続けているのだろう、マルセイユが右へ左へと不規則な機動を取つている。

「なんにせよ、ハンナは苦しくなるね」

隣にいるクルピングスキーが咳くとそれに答えるよつて元ニードルが
続ける

「・・・ああ、マルセイユの奴はある見えない衝撃を警戒して常
に障壁を張り続けないといけなくなつた。」

「砲身も見えない以上どこに向かられているかも分からなか
ね。タイミングもつかめないつたらないよ」

「極めつけはあの射撃角度の広さね」

Hディーターの言葉にクルピングスキーとドリード一力は頷く

「うん、・・・後ろを取つたハンナが吹き飛ばされているのを見
ると砲身射角はほぼ無制限。これはなかなかに攻めづらいね」

「ああ・・・」

三人が戦況を観察している中、一人ふと思い出したようにフューデリ
カが呟く

「・・・ねえ、そもそもなんで優刀はマルセイユに今回相手をす

るやつに元気だったのかしら?」

「ヒ、嘘うそ?」

「確かにマルセイユはよく優刀の一一番機として良くやつてるわ。
けど相手の実力を測りたいというならやつぱりバルクホルンが
やるべさよ」

「確かに・・・」

フューデリカのその言葉にクルピングスキーとジョンタイルは頷く。

バルクホルンの部隊に入るか否かを決める模擬戦であるはずなのに、その隊長であるバルクホルンではなく、他の部隊の隊員であるマルセイユが相手をしているという不可解な状態になつていてのだ。

疑問に思つのが普通だろう

「謎だね」

「優刀の事だからあの代表候補生を巣廻しているわけじゃないん
でしょうけど・・・」

「と戦闘において優刀がそんな出来レースをする事など、ありえ
ない」という事は彼女たちが一番よく理解している。

そんなふうに三人が頭を捻っていると、その答えは意外なところから帰ってきた。

「ああそれはね、マルセイユの固有魔法がなんなのか確かめようとしているのよ。」

答えたのは新人教育係のエディータ・ロスマンその人。

「どういうことだいエディータ？」

今ひとつわからないといった風のクルピンスキーはその真意を聞こうとエディータに聞く。

「言った通りよ・・・彼女は何かしらの固有魔法を持つていることは解っていたんだけど、それがなんのかはっきりと解っていないの」

固有魔法・・・それはウイッチの中でも「」く稀に発現することがある稀有な技能の事である。

様々な国のウイッチが集まる義勇統合戦闘飛行隊でも現在固有魔法を有しているのは優刀、武子、下原、ハルトマンの四人だけ。

具体的に言えば、大気を扱えたり、より遠くのものを見渡せたり出来る技能の事なのだが、どれくらいの種類があるのかも不明であり、固有と言つても同じ能力を持つウイッチも多々いる。

「それで彼女が配属された初日の訓練で？検査？してみたんだけど・・・」

「ねえ、検査つてもしかして？あれ？？」

「そ、？あれ？」

フェデリカはマルセイユが配属された日に行われた？歓迎会？を思い出し顔をひくかせる。

その日、マルセイユ達三人が配属された日に優刀は歓迎会もとい、ペイント弾による模擬戦を行つた。

しかしその模擬戦は通常の模擬戦とは違つており新人たち三人が先任と延々と戦い続けるという極めて過酷な内容であつた。

終わるのは隊長である優刀が終了」というまで

それまで先任の背中を追いかけ、銃弾を躱すという行為を延々と繰り返すのだ。

「・・・あのが検査つて、いくら天狗になつていたからつてマルセイユも可哀想に」

その模擬戦で最後まで戦つていたのはマルセイユであり、また全身をペイント弾でオレンジ色に染まって半泣きになつたのは今や酒席でのいい肴である。

「鼻の圧し折るにはちょうど良かつたわ。・・・結局あの時分かつたのは空間把握能力と?魔弾?が優れているという事だけで、その能力も他と比べると中途半端でねえ・・・だから私も優刀もどういう方向性で育てたらいいのか解らなくて。」

困ったわ、と手を頬にあてため息をつくヒューティータ

「今まで基礎を教える段階だったから良かつたけど、そろそろ

それぞれの特徴を生かした戦い方を見つけてあげたくてね

「この固有魔法があるのとないのとでは戦い方もおのずと変わってくる。

例えば優刀は固有魔法の大気操作で周辺大気を操作して圧倒的な機動性を利用してのヒット＆アウエイであつたり、武子の三次元空間把握能力を生かした集団戦法など・・・各々が自分の固有魔法を活かした戦い方をしている。

「なるほど・・・で、ボスはこの模擬戦を利用してマルセイコの方向性を見極めようとしているのか」

優刀の考えていることがようやく分かったという風に呟くジョン・タイル。

「そういう事

人の真価は極限状態で試されるとはよく言つたもので、優刀はこの模擬戦を利用しててつとり早くマルセイコの固有魔法の正体を掴んでしまおうというわけだ

「けど、よくH'テイータ気づいたね」

「当たり前でしょ、私は彼女たちの教育係よ？ 優刀と一緒に彼女達を指導しているんだから見破れるのは当然じゃない」

フフン、と年の割には小柄ともいえる体で胸を張る彼女
しかしその姿はさぞ見ても褒められたことを喜んでいる小学生で
ある。

「そう言えばそうだったわね」

「すっかり忘れていたな」

「・・・貴方達、私の事なんだと思つてたの？」

「マセた子供」

ガキ

「手を出しても大丈夫な 学生」

「合法口リ」

スココーンッ！！

チョークが飛んできて三人の眉間に突き刺さり、その場に倒れ悶える三人。

「まあなんにせよ、優刀の目論見は功をそつしたようね」

その三人を置いておいて、エディータはマルセイコに目を向ける。

「あつたくもひ・・・手のかかる教え子なんだから」

その言葉とは裏腹にヒトヨーハセビイが満足げに呟いた

遅くなってしまい申し訳あつませんでしたーー

(THE 扶桑・土下座ー)

いつも季節の変わりに風邪を拗らせてしまって、そんな中で講義やらバイトやらで書く余裕が無くても‥‥‥

皆さんも体調管理には気を付けてください。

申し訳ないついでにまだこの回は続きます。

ホントはこのE p - 15で終わらすつもりだったんですが、あれもこれもと入れてたらいつの間にか一万字を超えちゃいました‥‥‥

せりに分けることになりました。

申し訳ありません‥‥‥

再び(THE 扶桑・土下座ー)

最後になりますが、意見、感想お待ちしています。

24時間365日、料金はプライスレスでスタッフ一同お待ちしております

それではまた次回ーー

どうもシユウ禅です！

といつわけで第十六話です・・・

ではどうぞ――

「」のおおおおおおつーー！」

鈴の叫びと共に肩部ゴニットである衝撃砲叫びと共に肩部ゴニットである衝撃砲《龍砲》の砲口が開く

その砲口から放たれた衝撃波はマルセイコを吹き飛ばし、その魔法力を大きく削る
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - - 箕だった

その一撃をマルセイコはロールして躰し、鈴にその銃口を向ける
その瞬間、鈴は迫り来るであろう銃弾を回避するために後退する
が
・
・
・
・
・

「 もやあつー? 」

その攻撃を避けることが出来ずシールドエネルギーを削られるお返しとばかりに龍砲をマルセイコに放つが、またもや回避されてしまった。

「 ああ、もつせりきからなんで当たらないのよー。 」

鈴は明らかに焦っていた

模擬戦開始直後は衝撃砲と青竜刀による波状攻撃で圧倒的に優位に立っていたのだが

今ではその衝撃砲が躲されるようになり、波状攻撃も精彩を欠いてきた。

(どうする? こいつの射撃武器は龍砲だけ・・・エネルギーが切れたらこいつの武装は『双天牙月』だけになる)

衝撃波を弾丸としている『龍砲』でも無限に撃てるわけではない。エネルギーが底をつけば撃てなくなる

いくら甲龍(カニロ)が燃費と安定性を主眼に置いて開発された機体とはいっても、今だ試作機であることには変わりなく、エネルギー消費型の兵装を装備している以上、第一世代型と比べるとやはり多少稼働時間に不安が残る。

しかも相手はどつこいつが見えない筈の衝撃砲を避け始めているのだ。

油断はできない。

(あつらは射撃型・・・下手に突っ込んでいったら蜂の巣ね)

衝撃砲があてにならない以上、しばらくは様子を見るしかない

何せこの戦いには作戦に参加できるかどうかがかかっているのだ。

・・・・・負けるわけにはいかない。

鈴は別に国の面子がどうとかそういうものには一切興味はないし、代表候補生だからというアホ臭いプライドもない。

そんなことよりも鈴にはもっと大事な事があった。

扶桑海事変・・・・・

その末期、扶桑はネウロイの大攻勢によりウラル方面にあった戦線を裏塩まで後退させられ、大陸側にいた住民は次々に本土への避難を余儀なくされた。

鈴はの家は中華料理屋で当時は裏塩に店を構えており、鈴の家族もまた裏塩からの避難を余儀なくされた。

幸い扶桑軍の対応が早かつたおかげで鈴たち家族は無事だったが、戦争が終わり裏塩の町に戻るとそこには信じられない光景が広がっていた。

あの綺麗だった港町の風景は見る影もなくそこに広がっていたのは・・・・・

ネウロトイ^{躁鬪}しつくされて瓦礫の山となつた町の姿だった

今まで家族と幸せに過ごしていた町が破壊しつくされていたのだ。
・
・
・
・

その光景を見たとき自然と涙がこぼれた。

その後、糺余曲折あつて中華連邦に帰国することとなり、故郷で受けたIS適性検査で適性が高いことがわかるとすぐさま銃はIS操縦者になることを選んだ。

もう自分の街を失うような悲しい思いは「めんた。

自分に戦う力があるなら自分は戦う。

ネウロイの驚異から、国を、人を、両親を守りたい・・・

その思いで鈴はE.Sバイロットになった。

必死にE.Sのこと学び、厳しい訓練にも耐えてきた。

そして厳しい訓練に耐え、代表候補生に選ばれて戦闘データ収集の為に欧洲に派遣されることになった

けれど、欧洲で待っていたのは作戦参加を許されず追い返されるという冷たい現実だつた。

もちろんそんなこと納得できるわけが無く、何とか作戦に参加させてもうおつと食い下がつたが・・・

?貴様らの様に戦争をゲームかなにかと勘違いしている連中にこれ以上兵を傷つけられてたまるか?

指揮官にそう言われ追い返されてしまった。

戦争をゲームか何かと勘違いしているつもりは全くない。けれど一部の心無い人たちの所為でそう思われているのがたまらなく悔しかつた。

だからこそ、『えられた』のチャンス……

モノにして少しでも認めてもらわなければならぬ。

でなければ他に自分と同じような気持ちで『操縦者になつた者たちもきっと悔しい思いをする。

そんなことは絶対に許せなかつた。

「はああっ！……！」

だから『』の戦いは何としても勝つてみせる……

全ての思いを込めて鈴はマルセイユに向けて最大出力の衝撃砲を放つた。

「すゞいですねえ・・・マルセイコさん」

「うん、あんなの真似出来ないよ」

私は感心している下原が漏らした咳きに同意する

何せ見えない攻撃を避け続けているのだ。

そんな基当はまず普通の人間じゃできないだろつ。

一人の視線はただひたすらマルセイコの機動を追っている。

そんなふうに上空を見つめていると...

「ほう・・・あれが優刀の言つていた面白い？新人？か・・・」

「

「え？」

横に見慣れない人物が立っていた。

すらりとした長身に腰まである艶やかな黒髪、端整な顔立ちに浮かぶ微笑みは優雅で、自分たちがここにいるのは場違いなのではないか、そう思わせるほど目の前にいるその女性は気品に満ち溢れていた。

「あの…すみません、あなたは一体どちら様でしょうか?」

恐る恐る田の前に立った女性にそう尋ねる。

その下原の問いに対してその女性は・・・・・

「ああすまない、邪魔をしてしまったかな? 私はアドルフィーネ・ガランド・・・・・今回の作戦に参加する部隊の一人さ」

「ええ! ?」

その名を聞いてエーリカ達は驚く

アドルフィーネ・ガランド・・・・・

ヒスパニア戦役から活躍するウイッチで、対地攻撃ウイッチとして勇名をはせ、現在はJG 26の司令を務めるカールスラントを代表するウイッチの一人である

今回の作戦で航空部隊の総指揮をとるためにこっちに来るとは朝のブリーフィングで聞いていたのだが…まさかこんなふうに対面することになるとは夢にも思わなかつた。

「し、失礼しました！！」

慌てて敬礼、しかし彼女はそれをにこやかに手でやんわりと制する

「ああ構わないでいいよ、今は公式な場じやないからね・・・
それにしても君たちが緋村の所に入った新人かい？」

「は、はい！」

思わず声が上擦つてしまつた。

新米 ヒヨウ ウィッチである私達からすれば雲の上のようない存在である彼女が何の前触れもなくひょっこりと目の前に現れたのだ・・・驚くなという方が無理だ。

そんな私達の緊張を知つてか知らずか、彼女 ガランド中佐
はその青く澄んだ瞳で私たちの瞳を覗き込む・・・

「うん・・・いい眼だ。退屈しのぎの散歩で君たちの様な将来有望な
ウィッチに出会えるとは 私の運も捨てたモノじゃないな」

微笑む中佐

その動作一つ一つが優雅で気品に溢れており、私たちはギラギラしてしまつ。

そこへ・・・・・

「中佐・・・・なにしているんですか？」

私たちの背後から呆れたような声がため息とともに聞こえてきた。

「あ、隊長」

我らの隊長、緋村優刀少佐だった

「やあ優刀、ずいぶん久しぶりだね」

「お久しぶりですガランド中佐……確かに中佐は明日お見えになるのではありませんでしたか？」

中佐をジト目で見る隊長。

そんな隊長に中佐は

「ふふ、早く君に会いたくてね。雑務は副官に任せて私は部下を引き連れて一足先に来たんだよ」

そう言つて隊長の頬に指を滑らせる中佐。

その蠱惑的な笑みは同性の私でさえも見惚れてしまうほどに魅力的で、思わず息をのむ

しかし、その笑みを向けられた当の本人はどうと……

「なにアホなこと言つてるんですか……おかげで予想外に早い到着でうちの整備班はてんやわんやですよ」

おかげで土田班長からお小言言われましたし……と

その笑みになびくこともなく一蹴

心底呆れたような顔をする。

「ははっ、怒られてしまつたな。」

「まつたく・・・」

隊長はそんな中佐の姿に頭を抱え、当の中佐は先ほどの蠱惑的な笑みではなくいたずらっぽく笑つ。

「あの、お二人はお知り合いなのですか?」

一人のやり取りを見ていた下原が疑問に思い尋ねる

一人のやり取りはどこか上高と部下という関係としてはあまりにも砕けすぎていて不思議に思つたのだろう。

一体全体、この二人はどういった間柄なのだろうか?

「ああ、彼は私の婚約者^{フィアンセ}だよ」

「ええー?」

ガランド中佐から投下された爆弾発言に驚く私達

確かに隊長くらいの人物なら恋人がいるんじゃないかと思つてい
たけど、まさか婚約者がいたなんて……

ちょっとショックだ

しかし当の本人はといふと

「……はあ、違うからな一人とも」

本日二度目の深いため息を吐き即否定

中佐の発言を切り捨てる

扶桑海事変の時、中佐は觀戦武官として俺や
武子がいた基地に赴任してきてな。それが縁で知り合つたんだ」

「そ、そなんだ」

隊長のその言葉を聞いてほっとする。

否定された中佐はといふと……

「やれやれ……相変わらず酷い男だね君は。もう少し残念そうな顔をしてくれてもいいじゃないか。」

「そうですね、人をからかう癖を変えなければ彼女にしたいくらいですけどね」

肩をすくめる中佐。

隊長のいひつた反応は予想どおりだったのだろう~~否定された~~とはあまり残念ではないようだ

「まあ優刀をいじるのはさておいて……優刀、彼女はなかなか面白いね」

そう言つて上空のハンナを見る中佐

「大した観察力と判断力だ。さすがは君が眼をつけただけの事はあるな」

「まつたく、見てこる」ひのは冷や冷やモノですけどね」

苦笑する隊長

「さてと……一人とも、この戦いを見てどいつ悪いつへ..」

「え？」

突然、隊長から感想を聞かれ、戸惑ってしまった

「うんと、良く見えない攻撃を回避しているなあ」と

こんな感想しか思い浮かばなかつた。

だつてそりだらう。他になんて言えばいいのだ？

そんなありきたりな感想しか浮かばない自分が恨めしい。

きつと隊長に呆れられてしまつた・・・

「そうだな、あいつは良く避けているよ。ではなぜ見えない攻撃を避け続ける」とが出来ると思つて。」

「うう・・・隊長わかんない」

やうこつ私の頭をポンッポンッとながら隊長は続ける。

「少し難しそぎたな。何せ弾が見えないのでから避けられないのは当たり前・・・そう考えるのが普通だし、でも実際は避ける事自体に弾が見えるとかそういうのは関係ないんだ。」

「え・・・・どうして」とですか?」

訳が解らないといった風の下原。

それはやうだ。見えないから避けられないのに見えないこと自体は避けるのには関係ないといわれたのだ

「とにかくの様な話が理解出来る方がす」

「例えば・・・拳銃の弾を避けられるかい?」

「無理です・・・」

「どうじゅう？」

「え・・・だつて見えないじゃないですか - - - - - あ
！」

「そう・・・実際の話、実弾も撃つた時にはその弾丸 자체は視覚で捉えることは出来ない。よしんば捉える事が出来たとしても、弾丸を見てから行動を起こしていたら間に合わない・・・なりどうやって避けるか？」

「えと・・・動き続けるとか？」

「うん、半分正解・・・けどそれではすべての弾を避け続けるのは無理だ。ならどう避け続けるか？・・・相手の目を見ればいい」

「相手の目を？」

「そう、相手の目だ。銃を撃つときは目で照準を合わせるだろう？あの機体はどうやらいちいち自分で照準を合わせなければいけないからみたいだからな・・・マルセイコもそれに気づいたんだろう。マルセイコは相手の視線の向かう先をみてタイミングと方向を予想して避けているんだ」

「はえ～～」

そんな驚嘆の声しか出なかつた

「でも相手の目を見るのなんて、ネウロイ戦に役に立つんですか？」

下原が当然の疑問を口にする

それはそうだろう。ネウロイには目も口もないのだ。小型は航空機的なシルエットをしているが中型大型ともなると全身に機銃が装備されており、眼を見て射線を読むことなどはとても無理だ

「もちろんこれは対人相手じゃないと意味のないことだ・・・・。
けれど今この模擬戦で一番重要なのは勝ち負けよりもどれだけの観察力と判断力を持っているかだ。相手を觀察し的確な選択をする事・・・これは戦場で最も重要なことだからな」

「はあ・・・」

「まあなんにせよ、これで彼女にも少しは勝機が見えたかな？」

中佐がそう締めくくると.....

「そこまであいつは甘くないと思こますけどね…」

「とこうとう…」

「鈴の方も戦法を変えたよつですからね……ほら」

その言葉に促され、私たちは再び上空を見る。

確かに隊長の言つ通り、鈴という人の動きが変わってきた。

「…………なるほど、衝撃砲の優位性が崩れたと解るや今度は近接格闘にシフト。彼女、なかなか思い切りがいいじゃないか」

「ええ、さすが代表候補生といった所でしょうか。自分の機体の性能をきちっと理解しています」

最初は衝撃砲とあの大きなブレードの波状攻撃だったのに、今はどうやら衝撃砲を牽制に使って近接戦闘を仕掛ける戦法に変えたようだ。

「互いに攻めあぐねているな

「ええ・・・鈴の方は衝撃砲とブレードによる波状攻撃から牽制による一撃離脱に変えたのはいいんですけど、元々マルセイユは射撃型ですから常に一定の距離で攻撃を仕掛けるからその一撃離脱も使い処が難しい。マルセイユの方も距離を取っている分、一撃一撃の威力が低い」

「両方とも決め手を欠いたまか・・・」

「ええ・・・ですが」

そういうつた隊長に笑顔が浮かぶ。

「マルセイユの固有魔法が開花すればあるいは・・・」

「固有魔法？ でもハンナの固有魔法って解つてないんじゃなかつたっけ？」

確かにハンナの固有魔法については隊長とロスマン先生があれこれと検査をしていたがいまだに解つていなかつたはずだ。

「ああ確かにあいつの固有魔法についてはまだ分かつていなかつた」

「といつはもづわかったんだな」

「ええ・・・・・」

そう言つて隊長は言葉を区切り・・・・・

「あいつの固有魔法は未来視です」

すいませんまた終わらせんでした。

なんかこの鈴対マルセイゴも少し続きそつです。

「めんなさいです。

もう少しお付き合って下さい。

最後になりますが「意見」「感想お待ちしています」

「感想をいただけたら作者のテンションが上がつてうれしいです。

それではまた次回！

さうもシユウ禪です。

さと鈴対マルセイゴ終了です

二人の戦いの結果やいかに!?

どうぞ!!

「未来視か・・・また随分と大層な固有魔法だな」

ガランド中佐が驚いた様な呆れたような声で呟いた。

実際の話、マルセイユが衝撃砲の攻撃を避け続けられる理由を相手の目を見て回避しているといったがそれだけで避け続けるのは無理である。

であるならば、それを成すとしたら未来を知る以外にはない。

しかし・・・

「そうですねって言いたいところなんですけど・・・実際、あいつのあれはそこまで凄まじい能力じゃないみたいなんですよ」

俺は苦笑いを浮かべる

「どう?」

「以前、検査と称していろいろ悪戯をしたんですが・・・」

その時の出来事を思い出す。

～～～ある日～～～

「よしマルセイコ 準備はいいか?」

「あ、ああ・・・・た、大尉、何する気なんだ?」

田隠しきされて滑走路のど真ん中に立たせられたマルセイコは不安そうな声で優刀に訪ねる。

「ん~……検査だ」

その声にしゃがみこんで何やら「アーニャ」とやつていた優刀はのんきな声で返す

「け、検査って何の？」

「決まってるだろ？ 固有魔法の検査だ」

もちろん検査である。しかしその内容はとこうと・・・・・

「ボス、こいつはOKだ」

「こいつも同じく」

大将とフェデリカから準備完了の知らせが入ると優刀は立ち上がり、ある方向を向く。

その視線の先には義勇統合戦闘飛行隊を支える整備中隊の姿があった。

その数二十人

彼らも彼らで何やら忙しそうに走っている。

「土田班長……そつちひびきですかー？」

「いっちゃんOKでーすー！」

返事をした彼らの手には銃の形をしたプラスチック状の物体。

所謂水鉄砲ウォーターガンという奴だ

彼らはせつせと化けるに組んだ水の中にタンクを沈めて水を入れている。

もちろん大将ら一人の手にも水鉄砲を持っている。

「いっちゃんOKだよ」

横にいた伯爵がうれしそうに笑う。

彼女の手にはひときわ大きな水鉄砲を持っている。

その笑顔がまたさわやかなことこの上ない。

そして極めつけは傍においてあるかごの中の水風船

「マルセイゴー、これからお前が未来予知の固有魔法を持っているかどうかの検査を始めるぞ！今からお前に向けてここにいる全員がお前に向けて水鉄砲を放つ！全部避ける！」

そう……この検査、最近スオムスで発現したウイッチが見つかったという”未来予知”の検査なのだ。

「な、無理に決まってるだろ！……こんなことに付き合えるか！…」

そういうて田隠しを取ろうとする……が

「なつ！？ と、取れない……」

だが外れない……田隠しは片結びできつーく縛られている

「ふ・・・当たり前だ、私が外れないよつきつ縛ったからな」

犯人は大将。

彼女が全力で結んだのだからマルセイユでは外す事は無理である。

「よし、じゃあ始めるぞ・・・用意はいいな？マルセイユ」

「よ、よくない！私がそんな能力持っているわけないだろ！」

「そんなんやつてみないとわからないだろ！　スオムスでお前と同じくらいのウイッチが発現したんだ！お前だつてやればできる！」

「なんなんだ！その根性論は！？絶対違うから、お願ひ、お願ひだから！まつて、待つてえ大尉！」

「問答無用！！！オールウェポンズフリー総員全兵装自由！！！　マルセイユに叩き込めええええっ！..」

.....

.....

■ ■ ■ ■ ■

「……………と、まあこんな感じで検査をしたんですが、……………ついでにしました？」

中佐と下原が呆れたような顔でこいつを見ている。

「いや・・・やっぱにやつ過ぎだろひつ」

「マルセイゴさんが可哀想ですよ」

「いや、つい楽しくなつて・・・・・」

中佐と下原の言葉にただ苦笑するしかない。

〔実際やつてみると馬鹿馬鹿しくも楽しく、いつの間にか本来の目的である検査のことを忘れて皆で遊んでいた。（ちょいと冬まつただ中でビショビショになれば風邪をひくこと確定、マルセイコは本気で逃げていた）

「結局、武子が来るまでやつてたんですね」

騒ぎを聞きつけた武子が現れて音頭を取り終了

マルセイコは大して濡れることながなく事なきを得たように思えた・・・・・

「・・で、その時彼女は避けていたのか？」

「ええ」

そもそも、田隠しをしている者相手にそこまで遊べるわけがない

その時マルセイコは田隠しをしていたにもかかわらず、ほとんど水鉄砲の攻撃を避けていたのだ。

「田嶋じしても避けられる……おれしく未来予知じゃないか」

「いえ、この話にはまだ続きがありまして……」

~~~~~

「まつたく…………揃いも揃つて何考えているのよ」

「いや悪い悪い…………ここ楽しくなつちやつとな」

しおり遊んでいたと、ビックリ騒ぎを聞いた武子が現れた。

「まつたくもう…………とにかく検査は終了。 整備班の方々もさしあと止付け始めてくださいね  
・田嶋じを取つてあげるから」

「うう・・・中尉」

田隠しを取つたマルセイコと連れだって、そのまま滑走路を後に  
する武子。

まづいあの方向は

「武子ーーそこは通るなーー！」

「え？・・・・さやあつーー？」

「うが早いか、二人の姿が突然視界から消える。

ドボーーーーーン

大きな水柱が上がる。

「そこには落とし穴があるから気をつけてって言おうとしたんだ  
けど・・・・間に合わなかつたか」

もし未来予知が発現しているなら落とし穴ぐらい避けられるだろ  
うと思つて作つておいたのだが・・・・・

彼女はモノの見事に引っ掛けた。

「み、みんな逃げるぞつて・・・・・いないつー？」

さつきまでそこにいたメンバーの姿はすでになく、皆に散り散り  
に逃げていた

「・・・・優刀」

背後からは武子の声、

振り向くとそこには一人の姿が・・・・・

どうやら自力で這い上がってきたらしい。

全身ずぶ濡れ、ぴたりと張り付いた制服、水を滴らせる武子の姿  
に胸が高鳴るのを感じるがそんなことを言つてはいる場合ではない。

それこそ表情は笑顔ではあるが、その額にはくつきりと青筋が見える。

「ええ・・・・・

普段穏やかで人当たりがいい分、怒ると余計に怖い・・・・・  
しかもヒステリックに怒るわけじゃなく、普段と変わらない穏やかな笑顔で威圧してくるもんだから余計に恐ろしい・・・・・  
鬼の副長とはまさにこのこと・・・・・

ギンツ！――！

「緋村大尉・・・・・？」

笑顔でこちらを見る武子

「・・・・・なんでもありません、サー」

「そう・・・・なにかいい残すことは？」

「アリマセン」

隊長としての威厳？

そんなものあつません……

「まあ、そんな感じで落とし穴に引っ掛けっていたので完全な未来予知とは違うといふ訳なんですよ」

その後散り散りに逃げた奴らも武子の固有魔法三次元空間把握 の前では歯が立たず、敢え無く御用となり、皆でくそ寒い夜の格納庫で正座をさせられたのも今やいい思い出だ。

「な、なるほどな」

「緋村少佐……やつすぎです」

「あははまつ・おつかしー！ー！」

三者三様の反応をする

「けど、今回の模擬戦でようやくあいつのその固有魔法の正体がわかりました・・・どうやらあいつの魔眼は？未来？を見通すんじゃないで、どうやら？物体の未来位置を正確に把握できるっていうこと、精々分かるのはモノが動いた時それがどのように動いてそれに対する対処すればいいかという事だけのようですね」

「なるほど、決して未来に起つて出来事が分かるわけではないと  
いつ事か」

「ええ・・・」

マルセイユの魔眼は何が起きるのかを見るわけじゃなく、対象の僅かな動きからその行動を予測して理解するというものなのだろう。

しかしその後の事象が解るといつ点では範囲は違えども、未来予知と同じである。

故に？未来視？

「…………と話は脱線しましたが、マルセイコは？未来視？？空間把握？？魔弾？の三つ固有魔法を持つて居るわけです」

「なるほど……固有魔法を三つも持つて居るとはなかなかすばらしいやないか」

中佐はただ感心するように何度も頷いている。

「まあ、どれもこれもその専門の能力と比べたら中途半端なんですかね。でも、この三つの固有魔法をつまへ使用する」ことが出来れば……」

「EISに勝てるかもしれない」と？

「ええ……どのみち、このまま長期戦に持ち込まれたら近接格闘武器のないマルセイコは弾切れになつた時点で負けも同然ですか

「 勝負は一瞬といつ事か」

「ぐつ……」

瞬間、マルセイコの頬を風が撫でる

衝撃波がすぐ横を通過した証拠だ。

(どうする？ 何とか衝撃波は避けることが出来始めたのはいい  
がこっちの攻撃は距離があつてなかなか効果的とは言えない……な  
んとか相手に効果的な戦法を考えないと)

相手は見えない衝撃を牽制に使って近接格闘による一撃離脱に切り替えてきた。

何とか距離を取っているために対応は出来ているが、こちらの弾  
が切れれば牽制も出来なくなるために一気に距離を詰められた瞬間

に負けは確定する。

少佐やラル中尉であればその圧倒的な空戦機動で相手を引き離して一気に決める事が出来るだろ。けれど、自分の腕ではそんなことはまだ出来ない。

相手からはこの戦いにかける熱意が尋常じゃないほど感じられ、氣を抜けば飲み込まれそうになる。

けれど負けられないのは二つとも一緒に。

少佐が自分に課した試練であるなら、自分はそれに答えないといけない。

今思えばあの人との出会いはそれは散々なものであった。

私ははつきりって問題児だった。

おかげで士官学校の主席はハルトマンにとられるわ、卒業させられなくなりそうになるわといろいろあったのだが何とか卒業出来た。

私の腕を惜しんだ士官学校の教官がいろいろ手をまわしてくれた上での卒業だつたらしいのだが、それを私は？天才なんだから卒業させるのが当たり前だ？と思つていた。

所謂、？天狗？になつていたという奴だ。

だから配属初日に違う部隊である筈の少佐に対して模擬戦を申し込んだ。

士官学校の時から噂になつていいた？扶桑の白き龍？の腕がどれ程か見てやろうと思つたのだ。

結果は案の定惨敗・・・

模擬戦を申し込んだことが問題になり、不名誉除隊を言い渡された。

その瞬間、目の前が真っ暗になつた。

軍を辞めさせられる事がショックだった訳ではない・・・・・・

空を飛べなくなる事・・・・・・

それが何よりもショックだった。

その時、思い出した……なぜ自分が航空ウイツチに憧れ、その道を目指したのか

大空を飛びたかったのだ

何ものにも縛られないこの大空を……

その時、初めて自分のやつてきたことの馬鹿さ加減に気付き、後悔した。

後悔してももう遅かった。

けれど、そこに手を差し伸べてくれたのが少佐とラル中尉だった。二人はこんな私の為に頭を下してくれ、自分たちの部隊に引き入れてくれたのだ。

あまつさえ私を成長させるためにラル中尉は一番機の座を明け渡してくれた。

そして少佐は言つてくれた

『お前は将来人々に希望を『えられるようなエースになると俺は

信じてる

少佐がいてくれたから、自分は今も空を飛んでいられる。

だからこそ負けられない

少佐が、ラル中尉が、隊のみんなが。私が成長するのを待つていてくれているのだ、信じてくれているのだ

自分に居場所をくれた人達を裏切りたくない・・・・

その信頼に応えたい。

だから

「私は負けられないんだああああああああああああああ！」

一気に呐喊する。

どのみち長期戦になればこちらに勝機はない。

だつたら敵の懷に入り込んで十分に魔力を込めた一撃を叩き込む！

「くーー、だつたらこっちもーー！」

向こうも覚悟を決めたのかこちらに向かって一気に突撃してくる。

衝撃波を次々と放つてくるがその砲火の中を一気に駆け抜ける

そして・・・

無骨な鎧を着た相手が目の前に迫る

「この距離ならつーーー！」

相手は巨大なブレードを振りかぶっている

構つものか、相手が振りぬくよりもこちらの方が早い！

ドオーンッ！

「！？」

敵の懷に銃身を向け、トリガーを引こうとしたその瞬間・・・

突如上空から飛来した侵入者が一人の間に割り込み、私の銃をその左手に展開したシールドで射軸を逸らし、相手が振り下ろしたブレードを右手に持つ扶桑刀で防ぐ。

「…………二人ともそこまでよ」

侵入者はそういうと体を回転させてブレードと銃をはじく。

「ちよっと、いきなり割り込んで……あんた何者よー。」

飛び退いた向こうの方は侵入者にそのブレードの切っ先を向ける

当の侵入者はブレードの切っ先を向けられても涼しい顔のまま。

私はその凛とした顔に見覚えがあつた。

「あんたは確かにバウ航空隊の……」

「扶桑国空軍遣欧艦隊所属、竹井醇子少尉です…………一人とも、  
模擬戦は終了よ」

彼女は名乗り、模擬戦が終了したことを告げた。

「ゴンジー・

模擬戦終了後、滑走路に降りてきたマルセイゴの頭に拳骨を食らわせる。

その場で崖へ転落するマルセイゴ

「いた／＼＼＼＼何するんだ少佐

余りにも痛かったのだろう涙を浮かべ抗議するマルセイゴ

「全くヒヤヒヤさせて・・・竹井が来なかつたらどうなつていたことか

「もうひさ私が勝つていたに決まつてゐるー。」

「ゴンッ！」

グリグリグリ

「痛い痛い痛い痛い痛い・・・・・・」

さらにもう一発食らわせぐじぐじと拳を押し付ける

「アホか、あのままだったらお前の上半身と下半身は永遠にサヨナラをするところだつたんだぞ？竹井に感謝しろ」

実際、竹井が止めに入らなければ危ないところであった。あの時マルセイユは攻撃することに集中しすぎていた、まったく防御のことを考えていなかつた。もし障壁が発動しても重量のある青竜刀の一撃は防ぐことは難しかつた

「うう・・・じめんなさい」

「ま、なんこせよ無事でよかつた」

そう言つて頭をなでてやる。

「う・・・」

そんなふつにマルセイユをなでていると・・・・・

「ちよっと、なんで止めたのよ！ あのまま言つてれば私が勝つたのにー！」

今度は鈴がこちらに向かつてズカズカと大股で歩いてきた。・・・  
なんというか女らしくないな

「お前ももしあのままマルセイユの魔弾を食らっていたら腹に大穴が開いていたぞ。それでもよかつたのか？」

「？・・・・・」

鈴は鈴でマルセイユの全力の魔弾を食らつていれば間違いなく死んでいた。身内顛廻するわけではないが、彼女の魔弾は狙撃主体のウィッチの魔弾に比べれば威力は墜ちるがウィッチの魔法障壁をいつも簡単に貫く。シールドエネルギーが残り少ない状態でくらいでもしたら、鈴の上半身と下半身も永遠にサヨナラをするのは目に見えていた。

「ま、なんにせよこれで模擬戦は終了……で、どうだった？トウルーデ。」

今回の判定人、トウルーデの方に視線を向ける

当の本人は腕を組んで何かを考えるように目をつぶっている

数瞬後、彼女は口を開く

「射撃も近接格闘も間合いの取り方が雑でまだまだ甘く、肝心の空戦機動はお遊戯レベル……最後には一か八かの突撃も中途半端な加速で勢いがない……話にならん」

「う……」

トウルーデの容赦のない評価に鈴は俯く

彼女は戦闘において甘い評価を下すことはない・・・

きっと作戦参加を認められないだろう、そう思われたが

次にトゥルーテの口から出た言葉は意外なものだった。

「 だが特殊兵装の効果が薄いとみるや、すぐさま近接装備に切り替えた判断の速さは評価出来る.....稼働時間300時間でそこまで冷静に早く判断が出来れば大したものだ。」

「え・・・・」

トゥルーテの意外な評価に鈴が顔を上げる

「勝負は引き分け、実力も確認して.....いいだろう、今度の作戦でお前を私の隊に編入するよ」ボニン司令に頼んでおいてやる

「ほ、ホントに?」

鈴が信じられないといった風に聞く

「嘘をついてどうなる・・・私の部隊に入る以上は私の指示は聞いてもらひなさい？」

そう言つてトゥルーデは鈴に微笑みかけ、手を差し出す。

「あ、ありがとう……」これからよろしく頼むわね、隊長！」

鈴もまたトゥルーデに笑いかけその手を握り返す

「上官には敬語を使え・・・私の部隊の仲間を紹介する、ついて來い」

「サー、イエッサー！！」

そうして一人は隊舎の方へ歩いて行つた。

「……雨降つて地固まるつてといふかしら？」

去つていいく二人の背中を微笑ましそうに見ていた武子が呟く。

「別に雨なんて降つてないさ、ただ単にトゥルーデの奴が頑固だ  
つただけだ」

「それもそうね」

そういうて微笑む武子……

しかし、すぐに顔を引き締め、遙か彼方を見据える

「ナビよひやく始まるのね……」

「ああ」

彼女にひれりてその視線の先に目を向ける……

そこに映るのは遙か先にある戦場……

そこにはかつての仇敵がいる……

扶桑を壊滅の危機に陥れた強大な敵

戦いは苛烈を極めるだろう……

だが……

自分には師が託してくれた飛天御剣流と仲間がいる

そして

「もう何も失わせはしない…………今度こそ全てを守る」

そつ、恐れるものは何もない.....

今度こそ全てを護つて見せる

義勇統合戦闘飛行隊の仲間と共に.....

鈴対マルセイユ、いかがでしたでしょうか?  
なんか場外乱闘が多くつた気がしないでもないんですけど、楽しんでいただけたのなら幸いです。

次回はついにクラカウ攻略作戦が開始します。

長かったです・・・

予定では第零章、10話の予定だつたんですけどね・・・  
小説書くのって楽しいですね、調子に乗つて書き過ぎた感があります

ようやく本編に入れそうです。

最後になりましたがご意見ご感想お待ちしています。  
感想が書かれたたら作者の気分が上がりに上がって嬉しそうで涙が  
出てくるかも！？

ではまた次回！！

「お、お、シユウ禅です」

今日はこつもとね趣が違つてゐる番外編とこつ奴です。

それでせうべー

「…………では失礼します」

そう言つて、その重たい扉を閉める。

「ふう…………」

やっと終わった

今田の作戦の報告書を大急ぎでまとめて司令に何とか今田中に提出することができた

時刻は午後8時30分

ふと窓から外を見ると日はもうすでに落ち辺りは漆黒の闇に包まれている

これでよひやく休めぬ……

自室へ帰ろうとする

「なんだ、お前がため息とは珍しいな」

突然後ろから声をかけられ、その方向に体を向ける

「ああ、トゥルーテか」

カールスラント空軍中尉、ゲルトルート・バルクホルンが立つてい  
た。

「・・・ずいぶんと疲れているようだが、大丈夫か?」

人の顔を見るなり酷い発言だな

まあ、遠征先から帰つてくるなり報告書を大急ぎでまとめたからな、  
実際結構疲れてるけど

「大丈夫だ」

「そ、そ、そ、う、か、・、・、・、と、こ、う、で、優、刀、、こ、の、後、は、何、か、予、定、は、あ、る、か、?」

「いや、特にないけど」

「そ、う、か、・、・、じ、や、あ、少、し、付、き、合、つ、て、く、れ、な、い、か、?」

「今日はすいぶんと活躍したらしこじやないか

「それでもな、こ、か、い、つ、も、と、変、わ、ら、な、い、敵、を、い、つ、も、の、よ、う、に、落、と、  
し、た、だ、け、だ。」

基地内の食堂の片隅、その一角を俺とトゥルーデで占領し向かいあつて飲んでいた

「まつたくお前といつやつは・・・ほら」

「あいがとう・・・もうこいぞ」

少し呆れ氣味に笑いながらトゥルーデは空いたグラスにコルンを注ぎ込む。

ちなみにバルクホルンはまだ年齢が15歳を超えていないので彼女はミルクだ。

カールスラントでは15歳から飲酒がOKらしく、同じ部隊の仲間に勧められてからというもの週に一、二度は酒を嗜むようになり、最近はこのコルンという小麦の蒸留酒がお気に入りだ。

「……それで、急にどうしたんだ？　トウルーデが飲みに誘うなんて珍しいな」

彼女とは去年の4月にこの基地に派遣された時に知り合い、同じ中隊長という立場からすぐに意気投合し互いによく相談する間柄になりました、たまにこうして飲むことがままあつた。（といっても飲むのは自分で彼女はいつもミルクなのだが……）

「ああ、じ、実はな……妹のクリスの事なんだが……」

「クリスって……また何があつたのか？」

またかと思ひながら話を聞く

彼女には一人妹がいる。

クリスティアーネ・バルクホルン

トウルーデは彼女のこととて大事に思つていてよく妹の相談を

持ちかけられる

「いや、特に何もないんだが、ここ最近は忙しかったうう..特に今年に入つてからは休暇が取れず、家にも帰れない。もしかしたらクリスに淋しい思いをさせているんじゃないかと思ううどいてもたつてもいられなくなつてな、家に両親がいるから大丈夫だとは思つてはいるんだが・・・」

「毎日電話かけてるんだろう?」

「ああ、その日に起きた事を毎日楽しそうに話してくれるんだ。」

「じゃあ、いいじゃないか」

「良くない!..」

「ん! とテーブルを強くたたくトゥルーデ。

「なんでだよ・..」

少し呆れるように問いかける

「もしかして私を心配させないために無理して元気よく振る舞つて  
いるかも知れないだろー。」

「そんなことはない・・・・ともいえないな」

不意に幼いころを思い出す。

自分にも歳の離れた姉がいて、両親を早く亡くした俺は、幼いこ  
ろ心配かけまいとして姉の前では明るく振る舞つていたことを思い  
出し、強くは否定できなかつた。

「や・・・・やはりそつなのか・・・・わ、私はクリスに淋しい思  
いをさせているのか

トゥルーテの顔がみるみる青くなつていぐ

あ、やばい。地雷踏んだ

「まつまあ、どうせお前はこいつもじおつ振る舞つべきだな」

これ以上困まれると朝まで付き合わされるのでせつと解決策を上げる

いつも思つんだが、こいつ酒飲んでないよな？

「どうしてだ！ ク里斯がむびしがつているんだぞ……そのままにしておけるか……」

がたん！ と突然身を乗り出して人の首をグイグイ締め出した

「うぐつーぢよつ、落ち着け！ぐ、首しまつてゐー！」

「これが！ 落ち着いて！ いられるかああああああああああつ！！！」

その状態から後ろに回り込まれ、更にスリーパーホールドをかける  
その動作がこれまた綺麗なこと。

さすがカールスラント軍人の鏡、バルクホルン。

完璧に極まっている

あ、これ落ちるな

「あがががが・・・・・・」

あ、やばい ぼくとしてきた。

「そのままトゥルーデに首を絞められて死ぬのか・・・

「やあ、トゥルーデに優刀。二人とも相変わらず仲がいいね~」

極まってから約6秒、落ちる寸前に救いの女神が現れた。

「クルピングスキーーー！」

「仲がいいのは羨ましいけど、トゥルーデ、早く放してあげないと死ぬよ？」

「え？・・・ああッ！？」

が眼をやるとそこには顔を青くした俺

あ、せつと氣づいてくれたか

「す、済まん！」

佐びの言葉と共に技をばますトゥルーダ

「ふう・・・さすがに今回は死ぬかと思った。」

「完璧に極まってたね、さすがトゥルーダ！ 惣れ惣れするほどきれ  
いな締め方だよ。」

「ぐ・・・・・」

「ところで伯爵、こんな時間に食堂に来るなんてどうしたのか

時刻は現在午後9時を回っている。

一応この食堂は夜勤の隊員も利用するので24時間いつでも開いて  
はいるのだが、夜戦ウィッチでもない伯爵がこの時間に来るなんて  
珍しい。

「フランと同時期に入った第3中隊の子達いのでしょ？あの子達と一緒にティナーをね。」

「ああ、あの子達か・・・」

一度だけ見かけた少女達の姿を思い出す

そういえば三日前に伯爵が何やら話しかけていたような

「・・・相変わらずだな、クルピングスキー。少しはその女と見た  
らすぐさま声をかける癖どうにかしたらどうだ？」

「何言つてるんだい。かわいい子がいたり食事に誘つ、常識じゃな  
いか」

なのに当たり前のことを聞いてくるんだいといった風に返す伯爵

「……」

さすがは伯爵、ヴァルトルート・クルピングスキー。

無類の酒好き女好きの享楽主義者で楽天家。

その行動にはブレがない。

「それで？ いつたい何の話をしていたんだい？」

「ああ、それはな……」

・ · · · · · · · · · ·

「……というわけだ。クリスがさびしい思いをしてこむと思つたら、いてもたつてもいられなくてな」

「なるほどね……それで勢い余つて優刀を絞め殺そうとしたんだ

だ

「ナウコラフ事

「ハハ・・・・・

事のあらましをクルピンスキーへ説明する。ついでにみよつとしたジヨークを入れるのも彼女らしい。

「わうか・・・うんやつぱり、優刀の言つ通り、こつも通りに振る舞うべきだね

そしてあいつとじ回じ答えが返つてきた。

「なんでだーーー！」

「考えてみる。仮にクリスちゃんがさびしい思いをしてこないとしたら、なんでトゥルーデに黙っているんだよ。」

「私を心配させないためだ」

「でしょ？ それなのにトゥルーデがいかにも心配しますって顔したら余計心配かけさせまことしてせりに無理するに決まってるじゃないか。」

「そ、それもそうか。なら、私はどうすればいい？」

「だから今度休暇で家に帰つたら思いつきつ盍々せてやれ。普段構つてやれない分思いつきり、な

そう言ひてコルンを一気に飲み干す

「やう、か・・・・やうだな、やうだ。思いつきつ盍々せてやるんだー。」

先ほどまでの沈没していた表情から一転、あふれんばかりの笑顔になるトゥルーデ

「せうこいつ」とだよ。まったく、トゥルーデックでば本当にクリスチ  
やん命だねえ。」「

「なんだ、悪いか」

少しばつの懲そつにしてやっぽを向くトゥルーデ

「いやいや、家族を大切にするのはいいことだよ。それに、そういう  
ことなら私が相談に乗つてあげるのにね、優刀」

「俺に同意を求めるなよ・・・伯爵の事だからどうせ、～ベットの  
上で聞いてあげるよ?的な感じだひ?」

「ベー…ベットの上だと!…!…!」

その意味を正しく理解したのか顔を真っ赤にさせたトゥルーデ。

「さすが優刀、よくわかつてゐるじゃないか！」

「なんだかんだで、付き合いが長くなつたからな」

適当に返す

「みんなが寝静まつた夜に一人悶々と悩んでいるトゥルーテに優しく、「どうしたんだい？」って語りかけてあげるんだ。最初はなかなか悩みを打ち明けないトゥルーテだけど真摯に聞いてくれる私に少しずつ悩みを打ち明けてくれるようになる。そして己が悩みをすべて打ち明けたトゥルーテにこう一言、「大丈夫だよ、私がついてるからね」って」

「ぎゃーーっ！…やめろーーっ！！人でへんなこと妄想するなーーっ！！」

「何言つてるんだいこれからじやないか！…それから一人の距離はだんだんと近づいて行く。いつしかトゥルーテは私のことを自然に目で追いやるようになり・・・・・私がほかの女の子としゃべっているのを見るとなんだか胸がざわついてくる。ああ、この胸のもやもやは一体なんだろうか？」

「優刀も見てないで止めるーーー！」

「すまん、こいつは以上は俺も無理だ」

そつこじてゐる間に伯爵の妄想は進み・・・

「・・・・そしてこの日の日がやつてきたんだー!」

「わああー! もうやめてくれー!..」

「薄暗い部屋の中、一つの影がつこに一つに・・・・そして「天誅  
ううー!」ぐはあつー!..」

突然、伯爵の脳天に何かが振り下ろされ、伯爵を襲つ。

テーブルにひれ伏す伯爵

その後ろには

「はあつーはあつーはあつー まつたぐ、このHセ伯爵ー、日を  
離すとすぐこれなんだからー!..」

部隊の新人教育係のエディータ・ロスマンが立っていた。

「よ、エディータ

「ふ、ロスマン……」

「や、やあ・・エディータ

「まったく！ 今までたつても帰つてこないから、探しに来てみ  
れば！ 一人していつたい何やつてるのよ！ ！」

その小柄な体格からは考えられないほどの貫録を見せるエディータ

「『』めんぶエディータ、淋しい思いをさせて

強烈な一撃を食らったにも拘らず、すぐさま復活した伯爵は怒られている事などどこ吹く風、といった風にそう囁く。

「……」のHセ伯爵は・・・優刀も一緒にいたなら彼女を止めよ。.

「いや、俺にこいつを止めるのは無理。」

俺がこうなった伯爵を止める?

はは、そんなの無理に決まってるだろ?.

だつてこんなに面白いんだから、止めるなんてもつたいない。

「まったくもつ・・・」

その言葉に呆れているHティータ

「トゥルーテモ」めんなさいね、うちの一人が迷惑かけて。」

「いや一人には相談に乗つてもらつていたんだ」

「そうなの? 優刀はともかく、伯爵に相談はねえ···」

伯爵を白い目で見るエディータ

「エディータ、何気に酷いね」

「ま、まあ、とにかくありがとう。一人とも助かつた。気分が楽になつたよ」

「それはよかつた」

「また何かあつたらいつでも相談に乗るよ?」

「なつ! まつたく、貴様といひやつは···」

「ほり、二人とも行くわよ。」

「ああ」

「それじゃお休みトゥルーテ。また明日

「ああ、お休み。また明日」

そういって食堂を出て、各自の部屋へと戻つて行った

数日後・・・・・

「・・・・・・・では失礼します」

そう言って、その重たい扉を閉める。

「ふう・・・・・」

やつと終わった

今日の戦闘の報告書を大急ぎでまとめて司令に向とか今日中に提出することができた

時刻は午後8時30分

ふと窓から外を見ると日はもうすでに落ち辺りは漆黒の闇に包まれている

これでよしやく休める・・・・ってこれと同じ光景を先日見たようだな?

まあ、いつか

それよりもやつとと血室へ帰らう

そうして血室への進路を取る。

ギュッ

「…………へ？」

突如、何者かに制服の端を掴まれる

その主を確かめようと振り向くと…………

「…………」

「…………ば、バルクホルンさん？」

トウルーテがいた

しかしその表情は暗く、この世の終わりの様な顔をしている。

「…………」

「…………え？ と、一杯付き合つか？」

「…………」「ク」

場所を移動して食堂にて、いつものように片隅を占領して向かい合つて座る。

ちなみに今日は「ルンジャなくしてキュンメルのソーダ割り。

いつも同じものを飲んでいると味気ないので今日は少し変えてみた。

「・・・でどうしたんだ？ 確か今日は休暇で実家に帰っているんじゃなかつたのか？」

確かに昨日の朝、彼女が大きな風呂敷もつて基地を出ていくのを見たような気がするのだが・・・

「・・・ああ、確かに帰った。久々に取れた休暇だから、クリスの好きなお菓子もいっぱい買って、欲しがっていたW.iも買って

「いつたわ」

ええ～～～

もしやあの風呂敷包みの中に一杯お菓子が入っていたのか?  
さすがにあれだけの量を持つていつたらさすがにクリスちゃんも  
引いただろ？に

システムに極まる・・・

「・・・そして、やつとの思いで家に着き、クリスを驚かせてや  
る」といつそり庭の方へ回ったんだ

「お前はストーカーか・・・」

「そして庭からリビングの方を覗きクリスの姿を見つけた・・・  
けれど、そこにいたのはクリスだけじゃなかつた」

「」「両親もいたのか？」

「・・・いや、二人とも共働きで昼間は家にいない」

「じゃあ、いつたい誰が？・・・まさか、泥棒か！？」

「そうだ・・・・・」

そう言って彼女は身を震わせる・・・

その姿を見て、なぜ彼女が落ち込んでいたのか理解する。

クリスちゃんを危ない目にあわせてしまったことを後悔しているのだろう・・・・・

もし自分が早く帰つていれば彼女に怖い思いをさせなくて済んだかもしけない・・・そう思つてゐるのだ。

生真面目で、責任感の強い彼女の事だ、そう思つてゐるに違ひない。

「・・・・・トゥルーテ、君の所為じやない

そして彼女の肩に手を置く・・・・・

そう、彼女の所為じゃない。

悪いのはその泥棒だ・・・・・・

今の彼女はとても壊れそう・・・・

だから少しでも慰めてやりたくて・・・・

その言葉を口こしよつとある・・・・

「あの泥棒・・・人がいないことをいいことに、クリスとツイス  
ターゲームなんかして楽しそうにしてたんだ・・・・クリスもク

リストだ、あんなにこの馬の骨とも分からぬこやつとあんなに乐しそうに・・・・・・しゃべるわけねえやつーーー。」

「・・・  
はい?  
」

一瞬、思考が止まる

「私は耐え切れず「クリスその男は誰だ！！」と叫びながら飛び出した・・・」

その間もトゥルーデは話し続ける。

彼女が家に帰ると、クリスちゃんは学校の同級生と遊んでいた・・・

それだけだ・・・・・

他に言いようがない・・・・

「うわーー」

そつから先の事は大体想像できた

大方、トゥルーデが今日は自分がクリスと遊ぼうと思っていたのに先に同級生と遊ばれていた。

それにショックを受けたトゥルーデは何も考えずにそのまま出て行つた。

クリスちゃんの同級生は突如現れた謎の人物に驚く。そしてクリスちゃんはそんなわけのわからない行動をとったトゥルーデに対して・・・

「・・・・？お姉ちゃんなんて大嫌い！もつ絶交？と言われた、と

「うわああああああんっ！..！」

その場に崩れ落ちるトゥルーデ・・・・

「はあ・・・・」

盛大な溜息を吐く

なんか余計に疲れた・・・

もうとつとと帰つて寝たいが、そもそもいかないだろう。

じつなつた彼女は朝まで止まらない。

今夜は徹夜決定だな・・・

彼女を慰めるために気合を入れるべく、そばに置いてあつたコリ  
ンを飲み欲しお・・・

「わかつた今日は付き合つてやる・・・だから飲め、思いつき  
り」

そう言ってミルクを差し出す。

それを一気に飲み干し、トゥルーデは

「うわああああああああんっ！――クリスウウウウウツ――！」

・・・・・その夜、食堂から聞こえる一人の少女の泣き声  
は夜が明けるまで続いたという・・・・・

いかがでしたでしょうか？

なにぶんこいつたコメディチックな話は初めて書いたので楽しんで頂けたのならいいのですが・・・  
ちゃんと、コメディになつてましたでしょうか？

気分転換にだいぶ前に書いていた投稿しようとしたら、まだお姉ちゃんがきちんと出ていない状態でして、そのままお流れになつていたのを今回むりうじ良かつたので載せました。

本編ではあまり活躍していないお姉ちゃんですが次の話で活躍してもらいたいと思います。

ではまた次回！！

どうもシユウ禅です。

ついに始まるクラカウ奪還作戦・・・

それではござれーー！

クラカウ奪還作戦前日……

ついに明日、クラカウ攻略作戦が欠航されるという事で基地全体が異様な緊張に包まれていた。その中で俺はフェデリカに呼ばれ、同じように呼び出されたトゥルーデと共に格納庫にいた。

「フェデリカ、量子変換システムが使えるようになつたっていうのは本当か?」

俺は呼ばれた用件……量子変換システムのストライカーコニットへの搭載が可能になつたという知らせを聞きに入る。

「はいはい、もうそんなに焦らなくたつてモノは逃げないわ……  
はいこれ」

そう言って彼女は手の平にあるものを差し出す。

手の平にあるものを凝視する

「……イヤホン？」

「ええ、そり

彼女の手の平にあるのはハンズフリーマイクロフォンという通信機に使われるイヤホンマイクだった。

通常、機械化航空歩兵が使用するイヤホンは耳にスッポリと入るマイク内蔵型の円形タイプであつたはずだが、現在この片耳に掛けるタイプのイヤホンは使われていない。

ところも、このタイプはデザイン性が良くまた円形のイヤホンに比べて音質もよかつたのだが、非常に外れやすく高機動戦闘などしそうなものならすぐさま外れてしまうので現場からはかなり不評だつたのだ

なぜそんなものがこんな感じに？

「ふふ… 言ひておくれどこのイヤホン、ただのイヤホンじゃないのよ?」

「どこ?」

フューデリカが自信満々に説明を始める

「いい?」このイヤホンはね、装着者のイメージを感知するシステムを搭載しているの。これによつて装着者のイメージを感知、そのイメージに合つた武器を構成するの」

「よくそんな小さなサイズに収まつたな」

「元々そんなに脳波感知システムは大きい訳じゃないし、量子変換システム 자체もストライカーコニットに搭載できるくらいのそこまで大きなものじゃなかつたから割とすぐに出来たわ」

そう言つて、フューデリカは格納庫にある簡素な机の上におかれた箱状の物を見せる

大きさは片手で楽に持てるサイズ。

おそらくそれが量子変換システムなのだろう。

「これ一つで汎用機関銃一つ分くらいの容量があるわ・・・後はこれをゴーットに乗つけるだけでOK」

「しかしフンテリカ、本当に使えるのか?」

今まで黙っていたトゥルーデが当然の疑問を口にする。

彼女の言い分ももつともだ。

戦闘の最中に使つていて武器を呼び出したりとして無反応は洒落にならない。

「ええ、もちろんよ……ちょっと見てて」

そういつて彼女は背後にあつた皿巣のゴーット、ファロットG555チヨンタウロに飛び乗る。

彼女の頭から使い魔であるイタリアングレー・ハウンズの耳が出てくる

「はいこれ持つてて」

そしてひょいと彼女のHSの待機状態である赤いバンブルを放り投げて渡してくれる

そして、

「…インター セプター」

彼女がそう呟くと彼女の手に光の粒子が集まり、形を成す

光が剣の形を成すまでの時間は1秒とかからなかった

「…ね？」

形成された小剣をこちらに見せてくるフェデリカ。

どうやら使用する分には問題がなさそうだ。

「フェデリカ、皆が使えるようになるまでどれくらいかかる?」

「そうね……普通に出し入れするだけなら一時間もあれば何とかなるはずよ。実戦で使えるようにするにはもう少しうつとかかると思うけど……まさか使いつもり?」

フューテリカの言葉につなぎいて肯定する

「…………ぶつつけ本番は避けたいところだけど、今日は戦闘場になるからな。継戦能力が上がるなら使いたいドックファイトとかの最中に使わなければ問題はないだろ?」

「まあ、それはそうだけど……」

「それに、フューテリカも使用を考えていたんだろう?」

「まあね、今回ほどじたって長期戦なんだからたぶん使いつて言い出すだらうなって思つて、とりあえず作れるだけ作つておいたけど全員分は無理だつたわ」

そうこつて息を吐く

「今のところ用意出来たのは七つに増量パッケージが一つ。全部取り付けるのに一時間もかかるな」わ

「じゃあ頼む、乗つけられるだけ乗つけといてくれ。」

「了解、ついでにバルクホルンのコードもつけておくわね

そう言ってバルクホルンのゴーニットにもつけよつとするフューテリ  
カ……しかし

「い、いや……わ、私は遠慮しておいで」

フューテリカの提案を断るトゥルーデ。

「どうじてだ？火力重視のお前なら特に必要だろ？」

「もちろんそうだが……やはつこにはお前たちの部隊が優先的に  
使うべきだ」

「あら、もともと先任にだけ渡そうと思つていたから問題はない  
わ。それには？あなたには絶対持たせてくれつて頼まれちゃつた  
のよ。」

「？ どうじてだ？」

「あなたの所の整備員泣いてたわよ？バルクホルン中尉が銃を乱  
暴に扱いすぎるって。いくらなんでも弾切れ起こしたからつて銃で  
殴ることはないでしょう。」

「う……いやしかしだな、あの時はしょうがなかつたんだ。手直  
にいい武器が無くてな」

「だったら余計に必要じゃない。今ならついでに増槽パッケージも付けて？あれ？も付けるわよ？」

そう言つて奥においてあるものを指さす。

そこには一対の大きな剣があつた。

大きさは2m程度、その幅広い刃は見るからに重そうで叩き付けてときの破壊力は想像に難くない。

「また随分と大きな剣だな」

「カールスラント製IS近接戦闘用兵装、BWS - 02よ

フェデリカは説明を続ける。

「元々カールスラントがISの装備として開発したものらしいんだけど・・・見た目通りに破壊力は抜群で取り回しが不便で外した時の隙も大きいからなどの欠点があつて、結局お蔵入りになつた代物よ」

その姿を見て息をのむトゥルーデ。

相手を破碎する・・・それに特化したデザインとこゝべきかそ  
の刀身はなかなかに肉厚で、見る者を圧倒する迫力がある。

無骨な中にも洗練されたデザイン・・彼女が好きそうなデザイ  
ンだ

「うひー。使ってみたくない?」

じつやら脈あつと見たのかフェデリカは彼女に誘うように囁く  
へ囁てうりょく

「いや、しかし・・・

しかし、それでもなお、彼女は首を縦には振らないでいる。

いつもなら決断は早いほうなのに、今日に限ってはどうとも歯切  
れが悪い……

アーリーフラットのことを思って出す

「

ああ、お前やつ言へば機械音痴だったな

グサツー！

そんな音が聞こえた。

「えー…そ�だつたの!?

フェデリカが信じられないといった風に呟く。

それはそうだ。

なにせトゥルーデはブラックウルフ社製のストライカーコニットのテストパイロットを務めているのだ。

同じテストパイロットであるフェデリカからすれば彼女が機械音痴という事実の方が信じられない。

「う・う・う・う・う

肩を落とすトゥルーデ。

「トゥルーデ、あんまり落ち込むな。人間誰にだつて得手不得手があるさ……」

そんな彼女の肩を慰めるようにたたいてやる。

「まあ、機械音痴なのは驚いたけどそれはさておいて……大丈夫よバルクホルン。そんなに難しい操作はないから私が教えてあげる。こっちに来て」

フェデリカは気を取り直しトゥルーデに自身のチョントウロを履かせ、扱い方を説明する。

「いい？ まずはあなたが使いたい武器をイメージするの。そうね……まずはさつきのインターフェプターをイメージしてみて」

「わ、分かった……」

トゥルーデは目を閉じてイメージを描く……すると

彼女の前に光が集まり、剣が形成される

「おお……」

「ね、簡単でしょ？」

「なんだ、やればできるじゃないかトゥルーテ」

「あ、ああ・・・・・・」

顔を赤ぐするトゥルーテ

「なんにせよフューデリカ、頼んだぞ」

「ええ、任せておいて」

そういうてにこりと笑つフューデリカ。

その場を彼女に任せて俺は明日の作戦に必要な書類を提出するためにその場を後にした。

「納得できませんつ……！」

異様な緊張に包まれた」G52基地から南へと下ったところにある陸軍駐屯地、そこに用意された執務室で明日の作戦の細かなところを確認していたロンメルは目の前で怒り狂う少女の姿を見て深く息を吐く。

腰まで長くのばされた銀に輝く美しい髪、端整な顔立ちである彼女は間違いなく美少女と言つてもいいが、その左目を覆っている漆黒の眼帯が彼女の異質さを表していた

「何が納得できないのかね？ ラウラ・ボーデヴィッヒ少佐」

そんな彼女の姿を見ながら呆れたように言葉を返すロンメル。

「なぜ、我が部隊が後方の予備部隊なのですか！！ 納得できません！」

「…………なぜだね？」

「我々はカールスラントに十機ある工場のうち、三機の所有を許された精銳部隊です！ であるにもかかわらず、今回我々の任務は前線でネウロイと戦う事ではなく後方で指をくわえて他の者の戦いを見ていろと言われたのです。納得できるわけがありません！！」

彼女の訴えにロンメルは再び深く息を吐く。

作戦というものは全てにおいて念密に計算されて立案される。

与えられた任務、我の保有する戦闘力、作戦地域の地形や気象、敵情などの情報を総合的に考慮し、具体的な攻撃目標や陣地配置などを決めて実施される。その一つ一つに無駄なものなどなく、考ええうる状況全てに対応し、作戦を成功に導くために考え抜いて考え抜いて立案され、決行される。

「用件はそれだけかね？ だったら早く立ち去ってくれないか？」

まだまだやる」とは山ほどあるんだ、君の妄言に付き合ひ時間などないのだよ」

「なー?」

ロンメルは鬱陶しいといわんばかりに退出するよつに促す

ロンメルも別にたかが一佐官が身の程を弁えず直訴しに来た事をとやかく言つほど器量の狭い人物ではない。

直訴しに来た内容が考えるに値する意見であればもちろんその意見には耳を貸す。それくらいの度量は持つているつもりだ。

しかし自身が活躍したいからという極めて個人的な欲求で作戦変更を一部隊の隊長が作戦の総指揮を執る人物に直訴しに来るとは……そんなバカげた話に付き合つてやるほど彼も暇な人物ではない。

「しかしーーー」

それでもなお食い下がろうとするボーデヴィッヒ

その姿を見て更にロンメルは呆れ、深いため息を落とす。

目の前にいる少女のなんと器量の狭いことか……軍人の資質を問いただしたくなる。

もし这么よつた者が自分の旗下の少佐であれば即刻全ての権利をはぐ奪し、一兵卒からやり直させている所である。

所詮はエスと云ふ兵器の恩恵にあやかつたモノという事か……

その一言で全てが片付いてしまうのだから笑い話にすらなりない。

「…………くどいな少佐。これはすでに決定したことだ。それでも前線で戦いたいといつのであれば……いいだらう、戦わせてやる。その場合はエスは今ここにおいて行け」

「つ！それでは意味がありません！我々はエスで戦果を挙げ無ければいけないので！」

「ふ…………エスで戦果を挙げるにこどれだけの意味がある？……やれすらも解らない貴様に作戦に参加する資格など無い。……ひとつと出ていけ少佐、これは命令だ。」

退出するよつては元ソンメル…………モード

「…………失礼します」

突如その空氣を断つように執務室に毅然とした声が響く

その声と共に入室する女性

すらりとした長身に良く鍛えられているが過肉厚ではないボディライ  
イン。狼を思わせる鋭い釣り眼のカールスラントの軍服を着た扶桑  
出身と思われる黒髪の美女であった。

「…………ブリュンヒルデー織斑千冬か」

ロンメルはその女性の名を呟く

入室してきたのはIAS世界大会一モンド・グロッソー第一回優勝  
者、織斑千冬であった。

「教官……」

ラウラは千冬の登場に歓喜の声を上げ、ロンメルは千冬の顔を睨  
み付ける。

「…………何か用かな？ 織斑教官」

ロンメルやラウラが教官と呼んだように、今現在彼女は代表を引退してここカルスラントでHS部隊の教官の職に就いている。

その教官と呼んだロンメルのその声には険を含んでいた。

しかし、それを気にした風でもなく彼女はその整った口を開く

「・・・・私の教え子が大変失礼いたしました。数々の失礼な振る舞いお許しください」

頭を下げる千冬

「・・・別に気にしていない。それよりも何か用件があつてきただではないかね?」

さつやと用件を言えとばかりに言い放つロンメル。

その姿は温厚で常に紳士然とした態度をとる普段の彼とは思えない態度である。

「…………お願いがあつてきました」

「何かね？」

やつ書ひてしまつすぐロンメルの皿を見据える千冬。

「さうか、彼女たちを前線で戦わせて上手にやつだぞ二

千冬は呻ひて深く頭を下げる千冬。

「…………教官」

「ワウワは敬愛する教官のその姿を申し訳なきつ見つめる

その誠心誠意頭を下げる千冬の願いをロンメルは・・・

「…………言いたいことはそれだけかね？」

冷たい視線で見下ろし切り捨てる

「…………どうかお願いします」

切り捨てられても尚、頭を下げ続ける千冬

「……あの時の事を忘れたわけではないだろ?」

「うー。」

ロンメルの言葉に体を強張らせる千冬

「あの日……撃墜数欲しさにクラカウの避難民を見捨て、ネウロイの勢力圏内に無謀にも侵入したのはどこの部隊だ?」

「……」

その言葉と共に辺りを尋ねじやない霸気がつつむ。

「…………私が教導した部隊? シュヴァルツ・ハウング? です」

その霸気に気圧されそうになりながら何とか言葉を絞り出す千冬

クラカウから避難民を撤退させる作戦に彼女の教えていた部隊の一つが参加していた。しかし、その部隊は戦闘が始まると避難民の護衛を放棄した挙句、ネウロイを深追いしてさらに彼らの活動を活性化させるという取り返しのつかない失態を犯したのだ。

「あの部隊の所為で一体どれだけの兵が傷つき、民間人を危険に晒したと思っている?」

「もしあの日、？彼ら？がいなければ今頃カールスラントも奴らの勢力圏内に入っていたろう」

そしてロンメルはラウラを睨み付ける

「……あれから半年経つたが君の教え子は変わらず傲慢のようだな」

「私は！あのような屑たちと違います！！」

ロンメルのその言葉にラウラは必死に否定する。

「何が違うというのかね？ISで戦果を上げたい……そんな個人的な要望で作戦の配置替えを行わせようと作戦指揮官の所に乗り込み声を荒げる……撃墜数を稼ぎたいといって避難民を護ることを放棄した奴らと何が違うというのだ？」

「つ――」

ロンメルの非難に何も言えず押し黙るラウラ

ロンメルはそんな彼女は氣にも留めずにいまだ頭を下げ続ける千冬に視線を戻す。

「織斑教官……君は何をこの半年教えていたのだ？」

そのロンメルの容赦ない言葉に何も言い返せない千冬・・・

ロンメルはうつむく彼女の耳元に顔を寄せ

「ブリュンヒルデという称号に酔い、たった一人の家族にすら見放された君に誰かを教え導くことなど出来はしなかったという事か」

「つ――」

そう近くとロンメルは立ち上がり机の荷物をまとめ、部屋を後にしようとアドアに手をかける。

「今の君たちにこの作戦、ひいてはこの戦争に参加する資格はない……帰りたまえ。」

最後にさういふとロンメルは俯く彼女たちを置いて部屋を後にした。

ロンメルが去った後も顔を上げることなくつづき続ける千冬。

「申し訳ありません教官……私の所為で」

「…………」

ラウラの言葉に返事を返すことも視線を向けることもなく部屋を後にしようとする千冬。

「教官……」

「…………帰るぞボーデヴィッシュ」

そう一言ついでやき部屋を後にする千冬。

「…………教官」

その去る背中をただ見て居ることしか出来ず、顔を俯かせる

「…………私は認めない…………あの男が教官の？弟？  
などとこう事を…………絶対認めない」

そして顔を上げる。

その瞳には決意と深い憎悪の炎が宿り、口にはいないその者に  
殺意を抱く

「？――？――貴様は……この私が必ず殺す」

その怨みを込めた決意の声は暗い夜の闇に溶けていく・・・・・

そして・・・・・・・

それぞれの思いを胸に抱き、そして夜は明ける

「……さて、皆準備はいいか？」

俺は田の前に並ぶウイック達に声をかける。

「ええ、もちろん。」

皆を代表して答えるのは武子。

彼女の言葉と共に皆頷いて返事をする。

「…………、あっ、あいがといひ

そう言って頭を下げる

「いろいろ苦しい事、つらい事あつたけれど田舎で本當に  
良かった。」

「何言つてゐるんだい優刀、それじゃお別れの挨拶だよ」

その姿を見た伯爵がおかしそうに笑つ。

「それに、お礼を言つのは私たちの方よ

」そう言つて微笑むのはエディータ。

「そうだな・・・ボスのおかげでこんなにも面白い奴らと一緒に空を飛べただからな」

大将がいつもの氣だるげな態度で笑みを浮かべる

「おいおい、これじゃ本当に今生の別れみたいじゃないか

今までのやり取りを見ていたラルが呆れたように笑みを浮かべる

「えー・?」の部隊今日で解散なのー?」

ラルの言葉に本氣で驚くフラウ。

「大丈夫ですよ、まだ解散なんてしませんよ。……ね?マルセイ  
ゴセイ」

フラウをあやす様にマルセイコに同意を求める下原

「ああ、こんなに氣の合ひ仲間はいなーからな!解散なんてさせ  
るかー!」

その言葉に強く頷くマルセイコ

「ふふ、そうね。こんなに面白い子達が揃つた部隊は他にないわ  
ね」

そういうと更識は扇子をパンツと開く・・・そこには?最高?と  
書かれていた。

「ま、とうとう訳でこの部隊はあなたがいたからまとまつたのよ。  
貴方が嫌つて言つても解散なんてさせないわよ?」

そう言って微笑むフューテリカ。

「やうこつ事・・・だからあつがとう。この部隊を作ってくれて」

そう言って微笑む武子。

「嘘・・・・・」

皆のその言葉に田頭が熱くなるのを感じる。

モニ・・・

『…義勇統合戦闘飛行隊は誘導路へ、滑走路手前で待機』

「ドーフィンへ〇一】解

管制塔から指示が入り、俺たちは出撃するために誘導路へと向かう。

滑走路には発進台が並べられており、そこでは土田班長達整備班が次に発進する俺たちのストライカーコニットを準備していた

「少佐、準備できました！」

「ありがとう班長」

「後武運をお祈りしています」

そういうと班長は敬礼して離れていく。

「義勇統合戦闘飛行隊へ離陸を許可する。後武運を！！」

「アリシア、解説……めし、みんないぐモー。」

「「「「了解！！」」」

その声を聞き俺は号令をかける



あれえ・・・?

なんかロンメル將軍が悪役っぽくなってしまった気が?

もつと紳士で騎士道精神あふれる人だつたはずなんですけどね・・

まあ、言いたいこと書けたので良しです。

最後になりますが「意見」「感想お待ちしています。

感想が来たら作者の気分がレベルアップ、不思議なアメなんて曰  
じやないくらいに作品が成長するかもしません。

ではまた次回!!

一日連続投稿！！

というわけでついにクラカウ奪還作戦始まります。

ではどうぞ！！

「うわあ・・・すごいな隊長、飛行機がいっぱいだ~」

カールスラント上空を南方にあるクラカウに向かって飛行しているとフーラウは珍しいものを見るかのように見回している。

彼女の言う通り、今自分たちの周りには今回の作戦に参加するために各基地から飛び立った戦闘機がちらほらと飛んでいる。

「F - 35 ライトニング? に EF - 2000、ガリアのダッスオ - ラ・ラファール……、おいおい扶桑の F - 2A まで参加するのか?」

大将が飛んでいる戦闘機の多様さに驚いている。

それはそうだ・・・何せ今周りを飛んでいるのが四半世紀ほど前に空を飛んでいた戦闘機だ。

普通に考えれば航空博物館で展示されていてもおかしくないような代物ばかりである。

「まるで戦闘機の大見本市ねえ・・・・」

その光景の特殊さにユーティータがどこか呆れたような言葉を漏らす。

すると・・・・

『はつはつはつはーー。　おいおい嬢ちゃん達、見本市はねえだろ  
いへー』

突然、インカムから男性の者と思われる笑い声が聞こえてきた。

その声と共に一機の戦闘機が後方から接近してきて横に並ぶ。

その戦闘機はF-22「ラプター」……

かつて世界最強の戦闘機と言われ、大空を支配した戦闘機が今自分たちの横にいる。

『はははあ！ 久しぶりだな坊主、元気にしてたか？』

「その声・・・冬戸さん！？」

黒く染め上げられたラプターに視線を向ける。

キャノピーにむかひながらに向かって手を振る男の姿が

彼の名前は冬戸蒼哉

扶桑国空軍に所属するパイロットであり、扶桑海事変では一般航空歩兵でありながら航空型ネウロイを単機で10機撃墜した伝説のエースパイロットで、漆黒に塗られた機体と騎士のパーソナルマークから「黒騎士」と呼ばれ讃えられている。

「お久しぶりです冬戸少佐」

今回の作戦の為にリバウ航空隊から派遣された坂本がうれしそうに挨拶する。

扶桑海事変の時からの兄貴分である冬戸さんに会えたのがうれしかったのだろう、普段は見せないような笑顔を見せている。

「少佐もこの作戦に参加するんですか？」

『おうよ、何せ歐州の未来がかかつてこる』の大一番、参加しないわけにはいかないだろ？』

だはははと豪快に笑いつ冬戸さん。

相変わらずお気楽な人だなあ

「冬戸さんが参加するなら心強いです」

『ははははっ！まさか扶桑の白き龍にそう言わるとはな。ま、この作戦が終わったら一緒に酒でも酌み交わそつや。』

「了解です」

冬馬さんは敬礼をして離れていく

やへ・・・

『忠勇なる世界各國の兵たちよ… 今回の作戦の指揮を執るカール  
スラント陸軍のロンメルだ… まずは各國より支援に来てく  
れた皆に祖国を代表して厚くお礼申し上げる。本当にありがとう…』

毅然とした声が響く

『

諸君

……今滅亡の危機に瀕している世界の中で、君たちの様な勇猛なる者たちに出会えたことを誇りに思う　　そして君たちと平和な世で出会えなかつたことを悲しく思う。ただ、現在我々は存亡の危機に瀕していることもまた事実。世界中の人々が一致団結し、迫り来る脅威に対峙せねばならない。諸君らにおいてはその一致団結の先端となりて黒き異形の敵を粉碎し、未来への一條の希望となつてほしい。』

そこで一息をつき、そして言葉を続ける

『　　半年前、我々はクラカウで苦汁をなめさせられた。護るべき場所も、人も護れずにただ逃げることしか出来なかつた。あれから半年……今日この日、我々は再びかの地へ向かう……あの美しいクラカウの町を黒き異形の魔の手から解放し、人々に再び平和をもたらすために！』

そして将軍は高らかに声を上げる。

『行け！つい一皆の平和を取り戻しに！』

『行け！つい一皆の笑顔を取り戻しに！…』

『さあ諸君！奪われた我らの美しい大地を取り戻そう！…』

ワアアアアアアアアツ  
…………

「さすがはロンメル将軍だな」

通信機越しに陸軍兵たちの歓声が聞こえる。

どうやら今のロンメル将軍の演説で兵たちの士気が上がったようだ。

かくいう俺も胸の奥からナーフ熱いものが込み上げている

そして次に無線機から聞こえてきたのは凜とした女性の声

『空にいる全ての諸君！聞こえるか？ 今回、航空部隊の総指揮を執ることになったカールスラント空軍、アドルフィーネ・ガランドだ。作戦を改めて説明する』

ガランド中佐は続ける

『今回、我々の作戦目標はクラカウ上空に鎮座する超大型ネウロ

イ『山』の撃破だ……まず、クラカウ周辺に展開する航空型ネウロイを殲滅。その後支援戦闘機部隊による対地攻撃を行い、味方陸戦部隊とクラカウ上空の安全を確保。そして部隊をクラカウ直上の航空型をひきつける囮部隊と『山』に直接攻撃を仕掛ける挺身部隊の一一部隊に分ける』

『囮部隊はクラカウ上空部隊に攻撃を仕掛け、敵の注意を牽きつけて『山』から引き離す。・・・その間に挺身部隊は『山』に攻撃を仕掛け撃破しろ……何か質問は?』

ガランド中佐のその問いに皆無言で肯定の意志を示す

『よし……ではこれより作戦を開始する、諸君! 奴らに教えてやるつじやないか、人間は貴様らの様な虫に負けはしないとな!…』

「「「「ア解!」」」

此處にいる皆が叫ぶ。

『中佐！4時方向にネウロイの反応を感知！…その数、数えきれません！』

「坂本、下原！確認できるか？」

「はい！高度5'000m、距離30'000mに敵確認！」

「大型8、中型15、小型は…ざつと70！！勲章の大盤振る舞いだ！！」

「中佐！！」

『…こちらでも補足した…戦闘機部隊、さつやく出番だ！』

ガランド中佐の号令と共に戦闘機たちが前に躍り出る。

『ネウロイ、目視内射程に入りました！』

『よし…攻撃開始！…』

『メビウス1、FOX3!!..』

『ガルーダ1、FOX3!!..』

ガランデ中佐の命令と共にミサイルが一斉に発射される。

ミサイルは白い尾を引いて黒き軍勢に一直線に突き進む

ドオン!!

轟音が響き、優刀達の所にも爆風によつて飛ばされた空気が優等の頬をなぐ。

「全機全兵装自由！攻撃開始！！」  
オールウェポンフリー

一斉にネウロイへと呐喊する

「よしラル行くぞ！！」

「ああ、久々のロッテ復活だ！派手にいくぞ！..」

優刀も一番機のラルを引き連れてネウロイの大群の中に飛び込む。

狙うは中央に坐する大型ネウロイ

そこに向かって一気に突撃する。

その前に立ちあがる多数の小型のネウロイ

しかしその小型を前にさらに加速する優刀

減速する必要などない、なぜなら……

「ふーー」

後ろに彼女がいるからだ。

ラルは彼に攻撃を仕掛けようとするネウロイに素早く魔力を込めた銃弾を放つ。

その攻撃を食らって落とされるネウロイ

優刀も自らの射線に飛び込んできた敵機に機銃を齊射、そのまま次に飛び込んできた敵機に一気に接近……

「はあーー」

MG52を量子変換システムで収納し腰に差した扶桑刀を一閃、その刹那の一連の動作で敵機を両断する。

消えていくネウロイの白い破片の中を一気に突っ切る。

その後を飛行するラル。

大型をやらせはしないと二人の行く手を次々に小型機が遮り、二人に向けてビームを放つがその中を二人は気にも留めてないようすり抜けて突き進んでいく。

「なめるなつ！！」

再びMG54をその手に展開した優刀は前方に向けて一斉射。バランスが崩れ隙を見せた敵を背後のラルが打ち抜く。

そのまま優刀は扶桑刀を構えて一気に大型へ・・・・・

大型は優刀を近づかせまいと幾重ものビームを放つがすべて見切りネウロイに迫る

「もらつた！！」

魔法力を込めた扶桑刀を逆袈裟で一気に振りぬく

その一撃で優刀は300mはあるつかといつネウロイを一刀のもとに切り伏せる。

勢いを殺すことなくそのまま次の敵へと向かう

「全く、いつ見ても凄まじいな」

ある時はラルがサポートに回り、ある時は優刀が彼女を援護する…

二人の息の合つたコンビネーションを見たジェンタイルが呟く。

「…マルセイユ、遅れるなよ？」

「もちろんだ大将、背中は任せてくれ！…」

大将の言葉にマルセイユはつなづき、共に突き進む。

ジェンタイルは眼前に立ちはだかる中型に狙いを定めて猛禽の如く襲い掛かる

そのジェンタイルに背後から襲い掛かるうとする小型にマルセイユは一連射、わずかな銃弾でネウロイを木端微塵にする。

撃ち落としたネウロイに目を向けることもなくマルセイユはジェンタイルの援護をする為に後を追つ

その間もジェンタイルは目の前の中型に向けて銃弾を放ち続ける。

そしてついに中型の「ア」を露出せね。

「それで終わりだ」

ジョンタイルは手に持つM249を即座にレリントンM870に  
変え、コアへと放つ

その強力な一撃を食らったコアは見る影もなく粉砕され、あたり  
に白い破片をまき散らす。

「・・・ふむ、使えるな」

一連の動作で量子変換システムの有用性が実証され、その結果に  
満足そうに呟くジョンタイル

そして再度M249を展開、今度は更に左手にグレネードランチ  
ヤーを開ける。

「さて、今の私はすごぶる機嫌がいいんだ・・・墜とされた  
い奴はかかるこい」

「やれやれ、大将つたらあんない笑顔で物騒なこと言つね」

「で、でもジョンスタイル中尉らしいですね」

ジョンスタイルの暴れまわる様を見て、クルピングスキーはおかしそうに、下原はいつものように困ったように笑う。

「じゃあ、私たちは四人の残りのお掃除と行こうか?」

「はい!」

その場から左右に飛び退く。一人がいた場所に左右から飛んできたビームがぶつかり爆発する。

クルピングスキーと下原は一瞬でビームを放ってきた一機の敵の側面に回り込み……

「「これで終わり（だよ）です！」」

同時にトリガーを引く。

一人の攻撃を食らったネウロイは成す術もなくおちていった。

武子や、ロスマン・・・・その他のウイットチ達も縦横無尽に活躍し、次々とネウロイを墜としていく。

それに負けじと戦闘機乗りたちもネウロイに挑み、勝利を収めていく。

戦場に次々と白い破片が舞う

この蒼穹に白い破片が舞うたびに人類は勝利へと近づいている……

今、この戦場にいる誰もがそう信じていた

しかし彼らはまだ知らない

」の戦いをはるか上空から見つめる黒き影の存在を・・・・・

ああ・・・やつぱり戦闘シーンって難しいです。

書いていてとても楽しいんですけどねえ・・・

それよりもロンメル将軍の演説の方が難しかったです。

これで少しばかり彼の悪役っぽいイメージが払拭出来ればいいんですが

最後になりますが「意見」「感想お待ちしています。

感想が来たら作者の気分が上がつて何かいいことあるかもしけないですね

それではまた次回――

## E p - 2 0 s c h w a r z e H e x e (前書き)

どうも、三日連続投稿でテンションが変な方向に向かってこるシ  
ュウ禅です！

というわけでクラカウ奪還戦の続きです。

それでさじい〜〜！

「 こいつでラスト...。」

双天牙月を横なぎに振るう鈴。

その一撃を食らった小型ネウロイはコアを碎かれ、碎け散つて墜ちて行く

「 まあ、まあ、まあ、まあ...。」

肩で大きく息をする鈴。

「 とくせいた、鳳。これでここ一帯のネウロイは倒した」

その鈴にね、この言葉をかけるバルクホルン。

「バ、バルクホルン中尉・・・・

「ほら、これでも飲め」

そういうと彼女は鈴にあるものを渡す

「・・・・え、これって」

「リングテンティーだ。気分が落ち着くぞ」

「あ、ありがとう・・・」

そう言って渡されたリングテンティーを一口飲む。

ほのかに甘く優しい味が口の中に広がつて不思議とすげに落ち着いた

「・・・・おいしい」

「そうか」

そういうつて優しく微笑むバルクホルン

ふと鈴はあることに気付く

「あの中尉、もしかしてこれ……私の為に？」

今回が初の実戦である自分の為に用意してくれたのか？

そう思い尋ねた

「極度の緊張は大きな失敗を招く。だからそうならないようにな

まあ、気休め程度だが……というバルクホルン。

だが鈴は嫌われていると思っていた人物からのそのさりげない心遣いが嬉しかった。

「なんにせよ、これで作戦第一段階は終了だ……今扶桑のF-2Aを中心とする地上攻撃部隊がクラカウ周辺の対空陣地と陸戦

部隊の支援に向かっている。今のうちに呼吸を整えておけ

「はい！」

「いい返事だ・・・・・・皆呼吸を整えろ！それが済み次第、我々は義勇統合戦闘航空隊と合流し、超大型ネウロイ『山』の撃破に向かう！！」

「ロンメル将軍、航空部隊が敵第一波を殲滅。作戦第一段階は終了・・・・現在、F-2Aを中心とする地上攻撃部隊が対空陣地の制圧を開始しています」

「よし、全軍作戦を第一段階へ移行、陸戦部隊は我に続け」

そう言つてロンメルは指示し、クラカウに向けて軍を進める

作戦は予定通りに進んでいる・・・・・・

誰もがそう思っている中、ロンメルは眉間にしわを寄せ、その力  
ールスラント人らしい端整な顔に厳しい表情を作っている。

(嫌な空気だな……)

彼は作戦の指揮を執る際に大勢の指揮官が安全な後方で入つてくる情報を元に指揮を執る将校が多い中、常に前線の中に身を置き陣頭で指揮を執った。

戦場の空気というものを肌で感じれるからだ。

その戦場の空気が酷く悪い・・・

「ついこの時には何かが起ころる。

「つまくは説明できないが彼の長年の経験からそう感じていた。

（何事も無く終わればいいのだが……）

しかしそれは絶対に有り得ないだらうと自身の中で浮かんだ希望を即座に否定する。

基本、戦場においては作戦においてはどこか楽天的な部分があるといわれているロンメル。

しかし、それは彼が常に自分に言い聞かせて居ることでもあった。

「とにかく何とかなるであれ」という気持ちが無ければとてもではないがこの殺伐とした戦場で兵士たちに生き残る希望を持たせることはできない。

空にいる一人の少年たちを思い浮かべる。

（緋村、死ぬなよ・・・・・）

「よし、クラカウ上空への進路は確保された！ これより第二段階に移行する。囮部隊はクラカウ上空に展開する航空型に攻撃を仕掛けろ！」

ガランドの号令に従い、次々とクラカウに向かって飛翔していく  
ウイッヂと戦闘機。

そこへバルクホルン率いる第一中隊と合流した優刀達が近づいて  
きた。

「…………優刀、どう思う？」

傍まで来た優刀にガランドは顔を近づけて聞く。

その問い合わせに対して優刀は

「今のところ順調ですね…………順調すぎます」

そう順調すぎるのだ。

交戦開始からわずか30分……その短時間で大規模空中戦を制し、作戦の第一段階が済んでしまったのだ

士気が高まっていたからこそ快進撃…………とてもそのようには思えない

うまくいき過ぎている

それが一人にとっては何か良くないことが起きる事の前兆ではないかと思えてならなかつた。

「なんにせよ、一層氣を引き締めなければならぬ……」  
「…………」

らが正念場だ

「はい・・・・・

「…………うだうだ言つてもしょうがない

何か起きたときはその時に考えれば良い・・・・・

一人は胸によぎる不安を振り払い前を向く

『……こちらボーン、クラカウ上空の敵部隊を釣り上げた！これより  
北東へ進路を取り、敵航空隊を目標から引き離す……後は頼みまし  
たよ、ガランド中佐！』

「ア解だボーン、感謝する…………ではこぐれ…………」

その言葉に続き、優刀達はクラカウヘを目指し飛翔する。

その前方には優刀達を向かい撃つべくネウロイが立ち塞がる。

しかし・・・・・

「じゃまだっ……」

鎧袖一触：彼らの勢いを止める事は出来ず、ただ撃ち落とされ  
ていき、その身を黒から白へと変えていくネウロイ達。

血りが通った道筋に白い破片をまき散らしながら優刀達は突き進む

そして遂に・・・・・

「・・・・捕捉しました！！」

ガランド旗下のナイトウイッチが声を上げる

「ビームだーー！」

「」のまま直進、クラカウ上空、距離10'000、高度3000mにひときわ大きな反応があります・・・・・・大きい・・・こんな大きな反応見たことありません！！」

その報告に自らも魔眼を発動して首から下げた小銃用、照準眼鏡を通してその方向を見る。

「こちからでも補足した・・・・・おいおい、報告より大きこじやないか」

「3人ともどうだ？」

優刀はすぐ後ろを飛んでいた武子、坂本、下原に声をかける。

「ああ・・・・あの時のネウロイよりも一回り近くも大きいな」

「それに表面には赤いビーム発射用のセルが見受けられます」

「そうか・・・中佐」

その二人の報告を聞いた優刀はガランドに声をかける。

「ああ・・・では当初の予定通り、我々JG27はこれより奴の周りにいる敵機を叩く。その間に義勇統合戦闘飛行隊の面々は奴の懷に侵入、奴を叩け・・・・バルクホルン中尉、彼らのエスコートを頼むぞ」

「了解です

「よし、では各一「まつて、下方に敵機！！」・・なんだといつ・  
？」

「各機散開！！」

武子の叫ぶような報告に優刀は反射的に指示を出す。

その場から散りぢりに飛び退くウイット

次の瞬間・・・・・・

ドンッ！――！

下から白い雲海をかき分けて巨大な紅い柱が立ち昇る

「な・・・・・」

その余りの威力に皆が驚愕していると・・・・・

G Y a A A A A A A A A A A - - - - ! ! ! ! ! ! !

天に上るよう翼を広げて飛翔する黒い影・・・・・

「おいおい・・・・」

その姿を見た優刀達は驚愕する

雄々しく広げられた禍々しい翼・・・・・

酷く鋭く伸びた尻尾・・・・

そして頭部と思われる部分には赤く輝く3つの模様・・・・・

目の前に現れた巨大なネウロイはまさしく怪鳥と呼べる姿をしていた。

「奴が此処の番人という事か・・・・・」

「あんなタイプのネウロイ見たことないよ・・・・

その姿を見たマルセイコとフラウが呆然としている。

無理もない、あのよつなタイプ誰も見たことないのだ。驚くなど  
いつ方が無理である。

「ちう・・・」の時間のないとき

舌打ちする優刀。

団部隊が航空部隊の大半を引き連れて行つてくれたおかげで今は  
手薄だが、それもいつまでなのか分からぬ。

あの『山』はネウロイを生み出せるのだ。

時間がたてばたつほど向こうの戦力は増えていく・・・

早急に破壊しなければならないのに、目の前に現れたの新種のネ  
ウロイ・・・・

状況は一気に不利へと傾いた

「この状況を開拓するにはどうあるべきか？」

優刀とガランド、それぞれが考えていると……

「ガランド中佐……！」私は私たちに任せてくれさい。

「な、フェデリカ！？」

その声の主、フェデリカに視線を向ける

「私と更識少尉でこの新種を足止めします、その隙に中佐たちは行つてください」

「な、しかしそれでは……」

「今こいつに時間をかけるわけにはいきません……今最も倒すべきは『山』です。あれを破壊しない限りは敵の兵力は増えしていくだけです。」

そう言つてガランドを諭すフェーデリカ。

「フェーデリカ……」

そんな彼女を優刀は悲しそうな目で見つめる

「優刀、心配いらないわ。こんな奴に負けるほど私たちはヤワじ  
やないわ」

フェーデリカはいつものような陽気な笑みではなく、慈愛を含んだ  
聖母の様な笑みを浮かべる

「…………死ぬなよ」

「もちろん」

互いに言葉を交わす二人…………すると

「じゃあ、あたしも残るーっと

この場に緊迫した空氣などひからず、のんきな顔で言つだしたのはリバウ航空隊の西沢義子

「な、義子…」

「ちよつと義子、本気なの？」

そんな戦友の言葉が信じられず聞き返してしまつ竹井と坂本。

「だつて、あの『山』っていうの固くて機関銃じや装甲削れないんでしょ？ だったら機関銃しか持っていない私がいっても意味ないじゃん」

「確かにそうだが……」

西沢の正論に言葉を詰まらせる坂本

「見た感じさ、あのネウロイ……アホみたいな威力のビーム撃つし動きも素早い、砲門の数がデタラメで強そうだけど、あんなに砲門の数多くしてることとはきっとあのネウロイ装甲はそこそこしかないんだよ」

「なるほどな……」

西沢の言葉に優刀は一人頷く。

彼女の言う通り、あの新種のネウロイは異常なほど砲門が多い。その理由が装甲が薄くて相手を近づかせない為についているのだとしたら納得がいく。あのネウロイは速度と火力を高めるために装甲を犠牲にしたのだ。

拠点を防衛するのには確かにうってつけだ。

「だったら大勢であれに立ち向かうよりも、少数精銳で機動力の高い人でコアを潰しちゃえればいいんじゃない? ··· ··· ··· って、どうしたよ二人とも?」

西沢の説明に目を丸くしている竹井と坂本

「いやだつて、……なあ」

「まさかあなたがそこまで考えて行動しているなんて……。  
・何か悪いものでも食べた?」

「「わーひびつーー? 一人ともあたしの事どんな目で見てたの  
やー?」

「太〇胃散ジャンキー」

「新二〇胃腸薬中毒者」

「ひどーーいくらあたしが胃腸弱いからつらつまで言ひつーー?」

そんな二人の言葉にショックを受ける西沢

とそこへ・・・・

「「わつーー」

「うーっ……」

次々とビームを打ち込んでくるネウロトイ

再び散開する優刀達。

そして楯無が口を開く。

「まあ、そんなわけだから隊長、ここはお姉さんたちにお任せあれ。」

「更識……」

「心配しなくても大丈夫、きちつと私が年長者として付き添つか  
ら」

ほほっと笑う楯無……

そこに再び撃ち込まれる幾条のビーム

「…………いぐぞ、ここは彼女たちに任せよう」

今まで黙つて聞いていたガランドが決断する。

「了解」

そして優刀達は次々と降下する

「そっちは任せるわーー！」

「山を頼んだわよ」

「二人とも帰つたら覚えとけーーー！」

「・・・・・あれが」

雲の下に降り立ち、クラカウの町を視界に納めた優刀達はその光景に息をのむ。

かつての古き美しい町並みは今はなく、荒廃した街並みを覆う様に巨大な黒い影が浮かんでいる。

「あれが『山』・・・・」

町に覆いかぶさる黒き異形・・・『山』がついに優刀達の町の前にその姿を表した

その山の周りにはいまだ多くの小型ネウロイが護るように飛んでいる。

そして眼下に拡がるクラカウの街には陸戦型のネウロイが姿が見え、既にロンメル将軍率いる陸戦部隊と戦闘を始めていた。

「見えた！コアの位置は頂上！」この位置は変わっていない――

眼帯を外して山を見ていた坂本から嬉しい知らせが入る

「よし・・・全機準備はいいか？」

その報告を聞いたガランドは優刀達に声をかける。

「これより我々は『山』に対し攻撃を仕掛ける・・・・」  
まで来たらもう何も言う必要はないな。私からはただ一つ・・・・。  
・死ぬな、絶対生き延びろ！――

「」「「了解！――」」

「よし、全機攻撃開始！」の街を奴らから取り戻すぞ……」

そして優刀達は山に向かつて攻撃を開始する

「じゃまあをするな……。」

山へと向かつていく途中、次々と小型のネウロイが優刀達を襲う  
がそれらを払い潜り、敵を次々と落して『山』へと迫る。

「つ……皆避ける……」

次の瞬間・・・・・

ドンッ！――！

『山』から四条のビームが発射され、優刀達に襲いかかる

「くつーー！」

それを何とかギリギリのところで回避する

優刀が避けた一撃はそのまま地表に直撃して大地を揺らす

辺りに白い破片が舞う。

「相変わらず敵味方お構いなしか…………！… ラル、一気に行くぞ！」

「ああー！」

そう吐き捨てる優刀は一気に山との距離を縮めようと加速する。

『山』唯一とも言つていい欠点、それがあの強力なビームを放つた後、次の発射までにいくらか時間を要するという事だ。もちろんその時間は微々たるものだがその間に一気に距離を詰めてコアを両断すればいい。

距離を詰めよつとする優刀に小型機が群がるがそれをラルが全て  
撃ち落とす

「相変わらず頼りになるな」

「惚れてもいいんだぞ?」

そして『山』の頂上へと迫ったその時

「なつ!!--?」

はるか上空から降り注ぐ赤き閃光が優刀に襲い掛かる

それを間一髪、障壁で防ぐ優刀。

「まあこーーー！」

すぐ下から『山』のペームが迫る

「フーーー！」

左右のストライカーの出力を器用に操作してその場で宙返りをする。

そのままペームは空しく上空へと昇つてゆく

一重で避けた優刀は一回『山』から距離を取る

「優刀！無事！？」

インカムから武子の心配そうな声が響く。

「ああ、大丈夫だ・・・・・」

武子のまつとしたよつたため息が聞こえる。

「しかし今の攻撃は一体……」

謎のビームの正体を確かめようと上空を見上げる

「な……」

「そんな……」

「まさか……？」

優刀につられて上空を見上げた者たちから驚愕の声が漏れる

彼らの視線の先……そこには



その身を黒く染め上げ、赤き熒光を発してこちらを見下ろすウイ  
ツチがいた

## E p - 2 0 s c h w a r z e H e x e (後書き)

アホ兎を期待していた皆さん、申し訳ござりません。

正体はウイツチ？でした・・・

さすがにここまでアホ兎出したらトンでもねえ結果になると・・・

というわけで次回に続きます

最後になりますが、意見、感想の方お待ちしています。

それではまた次回！

どうもシユウ禅です！！

遂に『山』前にたどり着いた優刀達、しかしその前に立ちはだかる謎のウイッチ・・・

それでございぞー！

「ウイッチ・・・・・・・・なのが?」

遥か上空からこちらを見下ろす人物を見上げて優刀は驚愕の声を上げる。

その姿は紛れもなくウイッチだ。

足にはストライカーユニットを履き、そしてウイッチである証の使い魔の耳と尻尾もある。

しかしその体は黒い無機質で光沢を放ち、顔にはのっぺりとした

マスクを被っている。そのマスクと腰まで伸びる漆黒の髪の所為で  
その人物がどんな顔をしているのか確認することが出来ない

その漆黒の魔女が腰に差した扶桑刀を引き抜き、優刀に掛かる

「くそつー！」

迎え撃つ優刀

漆黒の魔女のその漆黒の扶桑刀から放たれた斬撃を優刀は魔法力  
を込めた扶桑刀で受け止める

その斬撃を見た瞬間、優刀は驚愕する

「まさか・・・そんな・・・」

この太刀筋を俺は知っている。

いや、そんなはずはない……

だつて彼女は今……

「智子……なのかな？」

眼前の漆黒の魔女は答えない

「智子……なの？」

その戦いを見ていた武子も信じられないといった風に田の前の魔女に問いかける

魔女を力づくで押し返して距離を取る

「二人とも、あいつを知っているのか？」

俺たちの反応を不思議に思つたラルが聞いてくる

「ああ、あいつは穴吹智子・・・・扶桑で同じ部隊に所属していたウイットチだ」

「こっちでは？扶桑海の巴御前？って言つたほうが解るかしら？」

「なんだと！？」

「あの？巴御前？なの！？」

皆が出てきた名前に驚く

彼女の名は穴吹智子・・・・

優刀と武子の扶桑海事変の時、共に戦つた仲間であり、扶桑海の巴御前？と呼ばれる扶桑を代表するエースの一人である。

「だが、今あいつはスオムスにいる筈だ・・・こんなところにいるわけがない」

今は遙か北欧の国、スオムスにて迫り来るネウロイからスオムス防衛についている筈である。

そんな彼女がはるか南のカールスラントにいる筈がないのだ・・・

「答える・・・お前は誰だ？」

しかし、漆黒の魔女はその間にに答えることなくただ無言で優刀達を見続けている

間違いない・・・今の太刀筋は間違いなく彼女、智子のものだ。

幾度となく剣を交えたから分かる

彼女だ・・・

間違いない・・・それなのに

違う彼女じゃない、彼女である訳が無い

かつて共に戦った彼女である筈がない

心が彼女であることを認めない・・・認めようとしない

そんな優刀の葛藤を見透かすようにただ見つめ続ける漆黒の魔女。

優刀の脳裏に昔の記憶が蘇る・・・・・

彼女と一体何度も剣を交えた事だろうか？

一体どれだけの戦場を駆けぬけただろうか？

共に笑い、共に泣いた・・・・・数少ない幸せな懐かしい記憶、  
その全てが脳裏を過ぎる

田の前いる漆黒のウィッチが彼女なら俺は

決断する

「 哎、あいつの相手は俺がする・・・手を出すな」

俺は彼女を斬る

「何馬鹿な」と言つてゐるんだ優刀！」

「得体のしれない相手なんだ、ここはみんなで戦つべきだよ

俺の言葉にラルが驚き、伯爵が止めようとする

しかし・・・・・

「今、俺たち全員でこいつを相手にする余裕はない・・・・・こいつに構ついたら後ろから『山』に撃たれる。」

そう・・・今、相手にしなければいけないのは田の前の彼女だけではない。

最大の目標はその後ろにそびえる『山』なのだ。

その肝心の『山』は今はどつこつ訳かただじつと何もせずにはいる。

「どうしてもボスが戦う必要はない、仲間かも知れないなら・・・  
・私がやる」

漆黒の魔女に向かおうとする大将を手で制する

「悪いが大将それはダメだ

俺がやる」

そういうて漆黒の魔女に目を向ける

その漆黒の魔女はいまだにこぢりを無言で見続けている

「もし彼女が本当に？六吹智子？なら俺が討つべきだ」

「しかし、ボス……」

何か言おうとする大将を手で止める

「ありがとうな・・・・お前が憎まれ役をやる必要なんてない。  
これはかつて？仲間？であつた俺がやらなくちゃいけないんだ。あ  
いつが人に仇名す存在になつたのなら、かつての仲間である俺が討  
たないといけない」

そうだ、彼女はかつて共に戦つた仲間である。

その彼女が敵に回るところのない、仲間である俺が止めるべきで、他の誰かにやらせる訳にはいかない

彼女に向かって行けりといふと……

さあ…………

後ろから羽織の裾をギュッと強く握られる

「…………

「武子…………

握っていたのは武子だった

振り向くと俯き、何かに耐えるよつて体を震わせている

智子は彼女の・・・武子の親友だ。

突撃癖のある智子の身を案じ、激戦区であるカールスラントではなく侵攻が比較的緩やかなスオムスに派遣するよつて上層部に掛け合つたのは他ならない彼女なのだ。

何よりも共に戦いたがっていた智子を騙す形になつたとしても、それでもなお彼女の身を案じていたのだ。

そんな彼女の親友を俺は殺す……

「・・・・・恨んでくれて構わない」

視線を前に戻し、彼女に告げる

「恨むなんて、出来るわけないじゃない・・・・・」

背中に頭をつけて彼女は弱々しく声を出す

「お願い…………彼女を…………貴方の手で殺して」

そして背中を押される…………

「…………ああ」

「…………いくわよ、私達で『山』を破壊するわ……」

その武子の声を背中で聞ぎながら俺は彼女に向かつてまっすぐ飛ぶ

彼女を殺すために

そして彼女もじゅうじゅうに向かつて一直線に飛ぶ。

俺を殺すために

刹那、白と黒・・・・その二つの煌めきが交差する

「かかってこい智子！――今日でお前との勝負に決着をつけや――」

優刀と智子が戦いを始めたその時、クラカウ上空では・・・・

「く・・・・早い！――」

フェデリカの横を黒い壁が通り過ぎる。

その場から何とか離脱しようとするが・・・

「つーー?」

前方から次々と赤い光弾がフェデリカに襲い掛かり、壁の傍に釘付けにする

それを体をロールさせながら右へ左へと動き続けることで躰し続ける

振り向き攻撃を仕掛けようとするが、

「もうあんなところにー!」

すでに黒禽は遙か彼方、その姿は豆粒ほどしか見えない

クラカウの空を覆う雲海の更に上空ではフェデリカ達三人が？怪鳥？を相手に苦戦を強いられていた。

「まったく、厄介な敵ね・・・・」

遙か彼方の『黒禽』を見据えながらフェデリカは考える。

（敵はその攻撃力と機動力を生かした一撃離脱タイプ・・・おかげでこっちが捉えようとしたときにはその巨体は遙か向こう・・・・やりにくいつららしいわね。）

何とか足止めできればいいのだが、足止めを行おうと先ほどから西沢と更識が攻撃を仕掛けているが、あまり効果があるとは言えない。

稀に攻撃がヒットしているが、その勢いを殺すことが出来ていない。

「せめて、何か足止め出来る手段があれば・・・・」

足が止まれば、後は自身のへとつておしゃべり呟き落としてじが出来る

何か使える物が無いかいつも機械を弄つている時の癖で辺りをつい見回してしまつ・・・

しかし、目に映るのとじまでも続く青い空と先の見えない白い雲の絨毯だけである

そんなに都合よく何かがあるなとじまではまずない。

しかし

フューデリカは？それ？が眼に入った瞬間・・・・・

「『れよーーー』『れだわー』これならこけるーーー」

そう叫んだかと思つとフューデリカはすぐさま行動に移る

「二人とも聞こえる！？」

『何かしら、今こいつちは手が離せないんだけれど……ぐー！？』

「櫛無ー！？」

『だ、大丈夫……それより何か思いついたの？』

「ええ、とつておきの秘策がね」

フェデリカは彼女に？それ？を話し始める

『それ本気？』

インカムからは聞き終えた更識の驚きを通り越して呆れた声が返ってくる。

「本氣よ本氣、あれを倒すにはそれしかないわ」

『・・・わかった、あなたに賭けるわ。』

「ありがと  
聞こえてたわね西沢飛曹長ー。」

そういうと一人で『黒禽』の相手をしていた西沢からすぐに答えたが返ってきた。

『りょーかい、中尉!』

そして三人はすぐに行動を開始する

フエデリカは西沢へと向かい、西沢を通り過ぎた『黒禽』は今度は真正面から迫るフエデリカに狙いを定め、頭部からの強力な一撃を放つ。

「はああああっー！」

それをギリギリ紙一重で躱し、そのまま速度を落とさず突き進むフェデリカ

しかし躱したのもつかの間、紅き閃光の後には無数の光弾がフェデリカに迫る

その間をすり抜けるように突き進むフェデリカ・・・そして『黒禽』の黒き巨体とすれ違い、その禍々しい翼の下を潜り抜け、背後に出てる。

しかし、その背後に攻撃を放つことなくそのまま西沢と合流、一気に加速して旋回、その場所へと進路を取る

旋回してそのあとを追う『黒禽』

「・・・・來た！――」

「振り向かないで――」のまま一氣に行くわよ――」

白い尾を引きながら飛ぶ一人、そこにまたも『黒禽』から強力な閃光が放たれる

それを寸でのどこで隠すフューテリカと西沢。

・・・・・ だが

「つーしまつたーー?」

その一撃がフューテリカのコニットを掠つた

爆発して黒煙を吐くコニット。

「中尉ーー」

「飛曹長ーーそのまま飛んでーー」

フューテリカは微笑み、白い雲海にその身を墜としていった

雄叫びを上げながら西沢はその場所へとひたすらに飛ぶ。

その後から次々に光弾を放つ『黒禽』

それらを何とか躊躇続ける西沢だが『黒禽』はその距離を詰めていく

「く・・・もう駄目」

西沢が諦めかけたその時・・・・・

『上出来よ、西沢飛騨長』

パチンッと指を鳴らす音

次の瞬間、

ドンッ！－！

突如、雲海から巨大な爆発音とともに立ち上った巨大な白柱が、『黒禽』を飲み込む。

G Y a s A A A A ! ? \* % & \$ ! ! ?

突然の出来事に『黒禽』は混乱したように雄叫びを上げる

水蒸気爆発・・・・・

それが『黒禽』を襲つた巨大な白き柱の正体だった。

それを成したのはISオラーシャ代表、更識楯無その人

彼女の纏うIS、？霧纏の淑女？の特殊兵装は水操る能力。雲ミステリオス・レイディ

の中に潜んでいた彼女は周囲にISエネルギーを伝達させる特殊なナノマシンを散布。散布されたナノマシンは水滴と氷の粒で構成される雲に溶け込み、その範囲を拡大させる。そしてナノマシンに伝達されるエネルギーを一気に熱に変換することで水を瞬時に気化

させ、水蒸気爆発を起こしえた。

いまだ完成には至っていない為、ナノマシンの変換効率も反応も悪く、とても権無が考へているような使い方も実戦での使用も出来ないが、それでもナノマシンを散布させ、熱に変換させるという動作が出来た……おかげで？ミスティアス・レイディ霧纏の淑女ミスティアス・レイディ？のエネルギーは底を尽きかけているが、期せずして兵装の稼働データが得られたのだ。十分おつりがくる。

しかしあまりに広範囲での爆発であつた為に、その威力は見た目に反して高くない……

けれどその動きを止める事はできた

突如、雲海を突き破り一つの影が現れる

それは赤き雄々しい翼を広げた猛禽。

それは・・・・

「あとは任せたわよ！－ フェデリカ！」

IS? 赤い嵐?<sup>テンペスター・ロツソ</sup>をその身に纏つたフェデリカだった。

「はあああああああああつ－！」

その手に大剣、BWS-3、通称?大型級殺し?<sup>フォートレス・スレイヤー</sup>を構えて一気に『黒禽』のその懷へと飛び込み、その巨体へと突き刺す

G Y d a e a e a e e r o p a ! ? !

苦悶の声を上げる『黒鷲』

体勢を崩し、その胴体をフューテリカの眼前に曝す

「見せてあげるわ・・・・私の?とつておき? ! ! !」

フューテリカは両手にMG151/Rを呼び出し、主翼のマイクロミサイルポッドの照準を『黒鷲』に向ける。

「全弾持つて行来なさいッ ! ! クアドラロック ! ! !」

? 赤い嵐テンペスター・ロッソ？に搭載された装備による全弾一斉射

放たれた火の嵐は吸い込まれるよつに『黒嵐』へ

gya a a a uuuuuu!!!!!!

蒼き光に飲み込まれ、その身を粉々に碎かれる『黒嵐』

その最後の雄叫びは蒼き蒼穹の空の中へと溶けて行つた・・・・



いかがでしたでしょうか?

フェデリカさん、樋無さん大活躍回でした。

ついに次回、クラカウ奪還作戦も大詰めです。激闘の果てに待つのは一体何か?

最後になりますが、意見、感想お待ちしています!!

それではまた次回!!

どうもシユウ禅です

いよいよ作戦も大詰め、その先にあるものとは?

ではどうぞ!!

「はあつー！」

二つの影が交差する

一つは白を纏い、もう一つはその身を漆黒に染めている

優刀と智子だ

既に二人は何十合も打ち合っている。

それでも二人の戦いに終わりが見える気配はない

「ふつー！」

優刀が上空から智子へ肉薄し、蒼く煌めく扶桑刀を横薙ぎに振る

う。その一撃を智子は体を優刀の方へ正面に向けて、漆黒の扶桑刀で弾く。

一瞬の交差……そして二人は共に体を上に向け急上昇を始める。  
一機は絡み合つようこそその機動で螺旋を描きながらどんどん上昇する

しかし、智子は優刀からどんどんその距離を離れていく。

速度勝負ではかなわないと悟ったのか智子は上昇を止め、下降にうつる。

それを見計らつたように優刀は反転、完全に智子の後ろをとった形で下降を始める。

優速と体重を生かした下降でその距離を一気に詰める

息が掛かるような間合いに迫った瞬間・・・・・、

「もううた！」

智子めがけて優刀の白刃が一閃

しかしそこには智子は既にいなく、優刀の放つた一撃はむなしく空を切る。

「上か！」

斜め左上空を睨む優刀、そこに智子の姿があつた。

?ツバメ返し?

智子が最も得意とする戦闘機動である

智子は右足と左足を複雑に動かし、後ろ回転の要領で智子は一瞬で宙返りをして、優刀の頭を押されたのだ。

宙返りをしながら握った扶桑刀が煌めく。

「ぐつ！――」

受け止める優刀

そして互いに刀を押し返し、距離を取る。

距離を取つた優刀はMG54を展開、側面に回り込むような機動を取りながら智子に向けて撃ち込む

対する智子も左手をこちらに向けると、赤い光弾を放ち、側面を取らせまいと反対方向に回り始める

不規則な加速を行いながら、円を描いていく速度を上げる二人

「…………おかしい」

闘い初めてから数分…優刀はふと、ある違和感を目の前の智子に覚える

(なんなんだ?智子の奴……単調過ぎやん)

元々頑固で堅物、生真面目で猪武者という言葉を絵にかいたような奴だが、その飛行センスと剣術の腕は確かだ。

彼女の腕は自分がよく知っている。

あの太刀筋は間違いなく彼女のモノだった。

だとうのにいざ戦い始めてみると、先ほどからどうにも戦い方に違和感を覚える。

剣の太刀筋も、射撃の腕も、飛行技術もまさしく彼女の動きだ。

だとうのにその戦い方はどうだ？

その戦い方には駆け引きも何もありはしない…田の前に敵がいれば剣を振り、離れていれば銃を撃つ、それだけだ

いくら猪であつた智子もここまで何も考えていないような戦い方はしなかつた。

だとうのに田の前の智子はただ敵の動きに反応しているだけ…そんな戦い方であつた

「弱いな・・・」

とてもじゃないが自分の知っている六拭智子の強さではない。

いつだって彼女は自信満々、自分の技量に絶対の自信を持つている・・・そのアホみたいな強情さから武子に心配され、スオムスに追いやられるくらいだ。それが振るう刀からいつも伝わって来ていたのに今はまるで伝わってこない。

もちろんネウロイに洗脳されているのであれば、そんなものを感じ取れというのが無理な話だが、それにしたって弱い。

田の前に立てる漆黒の魔女はあの六拭智子ではないのかもしれない

そんな僅かな希望が脳裏を過ぎる

そうであつてほしいと思つ。

けれど、今はそんなことを言つていられる状況じゃない。

優刀が思考の海に沈んでくると・・・

「・・・つしまつた!-?」

優刀の後ろに智子の姿が・・・

完璧な位置取りだ。

十分にビームで撃ち落とせる距離である。

智子は狙いを定めてビームを放とうとする

しかし  
…

！！！  
-

突如、智子の視界から優刀が消える

瞬間  
・  
・  
・

上空から優刀が一気に接近、智子に襲い掛かる

！  
！  
？  
-

智子の左腕に激痛が走る

痛む左腕に視線を向けると肘から先が無くなっていた。

その状態に驚く智子、しかし

それ以上に驚いていたのは智子を斬った……他ならぬ優刀だった。

「な、どうして？」とだ・・・・

思わずそんな言葉を漏らす。

彼女がビームを放とうとした、まさにその瞬間・・・

彼もまた先ほどの智子と同じようツバメ返し？を行い、彼女の頭を押さえたのだ。

そして一気に加速、智子に向かってその手の扶桑刀を振り下ろし、智子の左腕を叩き切った。

「・・なぜ反応しなかった？」

優刀が驚いていること・・・

それは智子が何も反応しなかったことだ

彼女とは幾度とも剣を交えている。優刀が？ツバメ返し？が出来るのを智子は知っている筈なのだ。

何せ一人で？ツバメ返し？を練習し、先に覚えた優刀が彼女にコツを教えたのだ。

知らない筈がない。

事実、何度も彼女との模擬戦で優刀は？ツバメ返し？を行い、攻撃を何度も防がれている。

である筈なのに彼女はとても驚いているようだ

まるで、優刀の？ツバメ返し？を初めて見たかのような反応である

（まさか、本当に・・？）

芽生えた小さな希望が僅かに大きくなる。

しかし確証はない・・・

ならば

「もう一回確かめるだけだ！！」

優刀は彼女から距離を取り、扶桑刀を鞘に戻し、MG54を展開して智子にその銃口を向ける

智子は優刀に攻撃を試みようと突撃してくる。

優刀は迫る彼女に構わず、銃口を向けたまま、飛び続ける。

優刀の体が青い光に包まれていく

するとそれに呼応するかのように蒼き光がMG54の銃身に纏わり、強く光り始める

優刀に向かつて突き進んで行く智子。

「

蒼の雷光で消え失せろ

一条の蒼き閃光が智子を貫き裂く

直後・・・・・

ドオオオオオオオオン！！

耳を劈くような轟音が響く

半身を吹き飛ばされ、地上へと落ちていく智子

「・・・・やはづな」

その様子を見ていた優刀はそつぬぐ。

「まつたくあの猪娘、心配かけて……これで武子の悲し  
んだ顔を見ずに済む……そうだろ?」

見据えた先にいる智子に語りかける

「ずいぶんと面白い真似をしてくれたよ……おかげで半分信  
じた、まつたくアカデミー主演女優賞モノだ……ネウロイ!!」

Q y a a a a a a ! !

甲高い雄叫びを上げて智子……智子の形を模したネウロイ  
は吹き飛ばされた半身を再生、優刀へ向かって呐喊しようとするが・  
・・・・

ドンッ!!

雷鳴が轟き、またもその半身を吹き飛ばされる

「学習能力が無いんだな・・・それとも速すぎて解らなかつたのか？」

左手にMG54を構えた優刀が冷めた眼でネウロイを見下ろす。

「俺の固有魔法である？大気操作？で周辺の大気を操作、雷を発生させてそれを銃身周辺に帯電させて一気に放出する・・・それがお前を吹き飛ばした一撃の正体だ。」

やや、めんべくぞうに口を開く優刀

「まあ初速も早くて攻撃力貫通力もあるんだが元々俺の固有魔法は大気を操作する能力だからな、魔法力を電気エネルギーに変える固有魔法よりも消費が多くて多用は出来ないんだ。銃身の加熱も凄くて連射は出来ないし銃の寿命も縮まるが、使い所さえ見極めればとても強力な一撃だ・・・俺のとつておきの一つだ」

優刀はその冷めた瞳でネウロイを睨み付ける

「」の一撃を智子は知っている、もしあ前が智子であるなら銃身  
が光りだした瞬間に障壁を張つて防ごうとするか、出来るだけ距離  
を取ろうとしたはずだ・・・けれど、お前はしなかつた

砲身から煙を上げるMG54をしまい、優刀は腰に差した扶桑刀  
に手をかける。

「覚悟しろ・・・今まで散々人の心をもて遊んでくれたんだ。  
お前は俺が？殺す？」

「ぐ、駄目！－！ 敵の火力が高すぎでうかつに近づけない－！」

田の前にいた小型ネウロイを氣合一閃、腰に差した扶桑刀で切り捨てた武子が悔しそうに叫ぶ

武子達は『山』を破壊するべく、コアのある頂上へと近づこうとしていたが、その道を無数の小型機によつて阻まれていた

「こいつの連戦で魔法力も残り少ない・・・・このままじゃギリ貧か」

次々に小型ネウロイを落としていくジエンタイル。その顔にはわずかだが疲労が見え始めていた。

「それに敵はまだまだ増えるよつだしな・・・どつする武子?」

武子の背後で援護していたラルが山を見据える。

その視線の先では『山』は一機、また一機と小型を吐きだしている。

ガランド中佐やバルクホルン達がその大多数を引きつけているから武子たちに向かってくるネウロイは少ないものの、今の武子たちは極限まで消耗しており、このままでは全滅は免れない。

「せめてあのビームさえ何とか出来れば・・・」

武子たちの進撃を阻んでいるのは小型ネウロイだけではない。

『山』の頂上から発せられる四つの強力なビームがあった。

武子たちが進撃しようとするといつも小型によつて道をふさがれ、『山』  
が小型もひとも武子たちを落とそつとビームを放つのだ。

今は何とか直撃を免れてはいるが、それもいつまで続くか解らない。  
・・・

何か策はないか？

武子が必死に考えていると・・・・・

『

ビームは俺たちに任せなー!』

突然インカムから聞き覚えのある声が・・・・・

「その声・・・・・まさか！！」

キイイイイイイインッと甲高い音が北の方角から聞こえてくる

その方向に目を向ける武子たち・・・・・

武子たちの瞳に映るもの・・・それは

遙か彼方より接近してくる四つの猛禽・・・・

その先頭を駆けるのは

「黒い | ラプター (F · 22) · · · 夏后少佐—…」

漆黒の猛禽ラプターを駆る? 黒騎士? · · · 夏后蒼哉だった

『嬢ちゃん達、待たせたなッ！－！ ちゃんと俺たちの獲物は残つ  
てるか？』

一気に戦場に飛び込む四機のラプター

次々にネウロイを落としていくその様はまさに大空を支配する猛<sup>ラブ</sup>  
禽<sup>タ</sup>そのもの……

ネウロイも彼らを脅威と感じたのか、次々にビームを仕掛けるも、  
それらの間をすり抜け、墜としていく

「冬月少佐…… ビリーハーク…？」

武子が驚くのも無理はない・・・・

何せ冬月は団部隊としておびき寄せたネウロイと戦っている筈な  
のだ

『 なに、案外早くおびき寄せた奴らを倒しちまつてな、他に獲物  
が無いかと思つてこいつで飛んできたのぞ』

そう言つて、軽快な笑い声をあげる冬月。

『フジの嬢ちゃん、『山』のページは俺たちに任せな。俺たちで四つのセルを破壊する・・・その隙に嬢ちゃん達は奴の口アを頼むぜ！』

「しかし！」

ラプターは確かに最強と謳われた戦闘機だ。

しかし機動性はストライカーゴニッシュトヒュンには遠く及ばない。

危険すぎる・・・・・ありますとあります

『確かに、お前さんたちの使つてこるストライカーやエリには機動性は遠く及ばねえぞ・・・・けどな、スピードはどうだ？』

「・・・・まさか！..」

武子は冬月の言わんとしていることを理解した。

『超音速によるビーム発射セルの一撃離脱・・・これしかね  
え』

「危険すぎます！－一步間違えば『山』に激突します！－」

あの巨大な『山』に超音速で突つ込むなど自殺行為だ

危険な賭けを行おうとする冬<sup>ヒカル</sup>を止めようとする

「・・・・死ぬ気ですか」

『別にカミカゼ精神なんて俺にはねえ……ただ証明してえんだよ』

そういうて言葉を紡ぐ冬<sup>ヒカル</sup>

『俺達、男はちゃんと？お前さん達？と一緒に『奴ら』と戦える  
つて事をな・・・・・』

「少佐・・・・・」

ウェイツチ

『別にお前たちが戦っている』ことが気に食わねえって訳じゃねえ。・・ただ、な？ お前たちだけに戦うことを任せると・・そんなことが絶対に良い訳がねえ』

『確かに俺たちは奴らを倒すには力不足だ・・・けど、お前たちの力になつてやることは出来る筈だ。だから頼む・・・やらせてくれ』

その声に宿る決意は堅かつた。

その決意の固さを感じた武子は

「分かりました・・・・ビームはお願ひします」

『・・・ありがと』

そして武子は瞬時に作戦を立てた。

「皆よく聞いて！ これより私たちは『E』への攻撃を開始します！ まずあの厄介なビームを発射する四つのセルをラプター四機

による超音速での一撃離脱で破壊する為に『山』周辺にいる敵ネウロイの数を減らし、注意を出来るだけ引きつけます！十分に数が減ったところでラプター部隊は一撃離脱を敢行、セルを破壊してください！…セルが再生する前に私と坂本飛曹長で敵直上から降下！…『アヘと攻撃を仕掛け破壊します！』

そう言つて武子はガランドとバルクホルンの戦つてゐる方へと視線を向ける

「お二人には北と東の敵の掃討をお任せします！」

『ふ、了解だ中尉』

『任せておけ、必ず成功させてみせる！…』

そして武子は義勇統合戦闘飛行隊の面々へと視線を向ける

「皆、これは危険な賭けよ…もしかしたら」

死ぬかも知れない…それをいつするのをワルに肩に手を置かれて止められる

「大丈夫だ武子……皆死にはしないぞ」

「ええ……そうね」

目の前には隊員たちの笑顔があつた。

大丈夫だ、作戦はうまくいく……そう確信し、武子は『山』を見据え、声を上げる

「全機、攻撃開始！――！」

武子の号令の元、ウイッチ達は空を駆ける

全てを……明日を取り戻すために



次回、ついにクラカウ奪還作戦決着！！そして第零章完結

物語は終わり・・・そして始まる。

「期待くださいーー！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4483x/>

---

INFINITE WITCHES 一無限の蒼穹を駆ける白き龍一

2011年11月29日21時47分発行